

全文 近現代日本語における新語・新用法の研究

著者	新野 直哉，梅林 博人，島田 泰子，鳴海 伸一，橋本 行洋
ページ	1-85
発行年	2014-03-28
シリーズ	国立国語研究所共同研究報告 ； 13-03
URL	http://doi.org/10.15084/00002741

国立国語研究所
共同研究報告 13-03

ISSN 2185-0127

近現代日本語における新語・新用法の研究

国立国語研究所 時空間変異研究系

新野 直哉 編

2014 年 3 月

目次

はしがき	1
本プロジェクトの紹介	2
共同研究発表会記録	
研究成果一覧	
『青い山脈』（1947）の「全然同意ですな」について —「変な軍隊用語」とは？—	新野 直哉 6
『古川ロッパ昭和日記』の「とても」「断然」「てんで」「絶対」 —否定呼応と言われた副詞の使用実態—	梅林 博人 22
〈何事かをなし得た人〉に見る、言語変化の一兆候 —補助動詞〈～得る〉の意味変化—	島田 泰子 38
漢語形容動詞・副詞の品詞性と用法変化 —通時的観点からみた近現代の特徴—	鳴海 伸一 56
「全然」の“迷信”に関する通言語的考察	橋本 行洋 76

はしがき

本書は、国立国語研究所共同研究プロジェクト（萌芽・発掘型）「近現代日本語における新語・新用法の研究」の成果報告書である。

本プロジェクトは 2010 年 11 月にスタートした。当初のメンバーは、リーダーの新野、そして橋本行洋（花園大学文学部）、梅林博人（相模女子大学学芸学部）、島田泰子（二松学舎大学文学部）の 3 名の共同研究者であった。その後 2012 年 7 月から鳴海伸一（京都府立大学文学部）が加入した。

3 年間で研究発表会は計 7 回開催した。第 1 回（東日本大震災発生の 6 日前であった）はメンバーを含めても一ケタの参加者であったが、京都で開催した（第 3 回）際には関西さらに中京・九州地区の研究者の参加もあった。その後は 2 ヶ月近く前から、メーリングリストやフェイスブックに加え、いくつかの研究会で告知チラシを配布するというオーソドックスな PR 活動も行い、その甲斐もあって第 6 回、第 7 回は 20 人を超える参加者となり、発表会後の酒席も含め大いに議論を戦わせた。

そしてこの間には、日本語学会で 2 度のブース発表を行った。2 度とも予想を上回る多くの来聴者があり、成功であったと思っている。このうち 1 度目（平成 23 年度秋季大会、高知大学）の発表は日本経済新聞ウェブ版の連載「ことばオンライン」に取り上げられ（同年 12 月 13 日掲載）、アクセスランキングで当日の全記事中 1 位、月間でも 3 位となった。この記事は、日本経済新聞社編（2013）『謎だらけの日本語』（日本経済新聞出版社）に「「全然いい」誤用説の起源は？」という題で収録されている。

プロジェクトは 2013 年 10 月をもって終了した。この報告書は、活動の締めくくりとして、メンバー全員が新たに執筆した論文を集めたものである。わずか 5 本ではあるが、学界に貢献できるものとなれば幸いである。

新野直哉

本プロジェクトの紹介

○名称

近現代日本語における新語・新用法の研究

○略称

新語・新用法研究

○プロジェクトリーダー

新野 直哉

○研究分野

言語学

○キーワード

言語学、日本語学、日本語教育

○概要

近現代の日本語においては、次々に新語が生まれ、また以前からある語句でも、意味・用法の変化が次々に起きている。その中には、流行語のように一時的に多用されたり、メディアで話題になったりするもののほか、いつの間にか定着してしまうものも少なくない。それらの新語・新用法に関する、発生・浸透・定着の時期やそのプロセスという言語変化そのものについての研究、さらにその背景にある、正誤・好悪・美醜などに関わる一般社会の言語意識の問題について、研究を行う。必ずしも語彙研究には限定せず、文法・表現法等に関わる事例も対象とする。

本研究では、現在進行中の言語変化を分析することにより、一般的な言語変化研究に応用できる理論を得る。また国語教育・日本語教育分野へ貢献するとともに、国民の知的関心に応える。

○共同研究者（所属）

橋本行洋（花園大学文学部）、梅林博人（相模女子大学学芸学部）、島田泰子（二松学舎大学文学部）、鳴海伸一（京都府立大学文学部）

○研究目的

本研究は、近現代日本語の新語・新用法について、いつごろ、なぜ、どのように発生・拡大し、現在はどのような状況にあるのを、文献調査に加え、アンケート調査や統計的手

法などを用いて明らかにしていく。また、言語変化の背後にある正誤・好悪・美醜といった言語意識についても調査・記述し、言語の変異そのものの記述的研究に加え、これまで顧みられることの少なかった言語意識の面からも言語変化の要因を明らかにする。

本研究で扱う現在進行中の変化は、古代語や中世語の言語変化の事例に対し、そのプロセスの観察や、背景にある言語意識の調査がリアルタイムで可能である、というメリットがある。その成果として、日本語史上の言語変化一般の研究に応用できるような理論を得ることを目的とする。以上の点で、本研究は、現在の時空間変異研究系のプロジェクトに不足している分野を補うものである。

○共同研究発表会記録

*プロジェクトメンバー以外の発表者には所属（当時）を付した。

第1回共同研究発表会（2011年3月5日国立国語研究所）

- ・新野直哉「新語“なにげに”をめぐる国語意識—現代「国語意識史」記述の試みとして—」

第2回共同研究発表会（2011年6月8日国立国語研究所）

- ・梅林博人「戦前戦中の「全然＋肯定」の一側面—『古川ロッパ昭和日記』（戦前篇、戦中篇）を資料とし、同書の資料性にもふれる—」
- ・橋本行洋「近世中国語「全然」の日本語への受容について」

第3回共同研究発表会（2011年9月18日花園大学）

- ・新野直哉「昭和10年代の国語学・国語教育・日本語教育専門誌に見られる言語規範意識」
- ・島田泰子「全量性副詞と否定(的表現)との結び付き傾向について」
- ・余田弘実（京都西山短期大学）「近世から近代の”いためる”について—料理書を資料にして—」

第4回共同研究発表会（2012年6月10日国立国語研究所）

- ・橋本行洋「「断然」の受容と展開—「全然」の受容と“迷信”に言及して—」
- ・鳴海伸一「程度的意味発生の過程の類型—程度的意味と量的意味・評価的意味との関わり—」

第5回共同研究発表会（2012年8月28日二松学舎大学）

- ・新野直哉「『『青い山脈』（1947）の「全然同意ですな」について」
- ・中尾比早子（椋山女学園大学非常勤講師）「形容詞「すごい」の程度副詞化」

第6回共同研究発表会（2012年12月27日国立国語研究所）

- ・ 島田泰子「現代日本語における二格表現の衰微と交替—広義の“新用法”研究の一端として—」
- ・ 佐々木文彦（明海大学）「誤用から見た言語変化の方向性—“確信犯”“敷居が低い”を例に—」

第7回共同研究発表会（2013年6月23日ユニコムプラザさがみはら）

- ・ 上村健太郎（明海大学大学院生）「新語・流行語の使用の経年変化—新聞記事とインターネット検索における使用実態から—」
- ・ 梅林博人「否定呼応と言われた副詞の実態—古川ロッパの「とても」「てんで」を中心に—」

○研究成果一覧

（1）論文

- ・ 梅林博人「「全然」再考—迷信アプレ前提の否定など—」『相模国文』39号、71-82、2012
- ・ 新野直哉「昭和10年代の国語学・国語教育・日本語教育専門誌に見られる言語規範意識—副詞“とても”・「ら抜き言葉」などについて—」『言語文化研究』11号、1-14、2012
- ・ 梅林博人「『古川ロッパ昭和日記』における副詞「全然」の用法—言語変化の過渡期における個人の使用実態—」『表現研究』96号、44-53、2012
- ・ 島田泰子「広告表現等における〈終止形準体法〉について」『叙説』28号、1-16、2013
- ・ 島田泰子「現代日本語における動詞の〈終止形準体法〉について」『二松学舎大学論集』56号、21-40、2013
- ・ 新野直哉「言語規範意識記述を日本語史研究資料としてどう考えるか—3人の研究者の“全然”をめぐる記述を例に—」『国語学研究』52号、1-13、2013
- ・ 新野直哉「新語“なにげに”をめぐる言語意識—1980～90年代の新聞・雑誌記事を対象に—」『言語文化研究』12号、21-36、2013
- ・ 梅林博人「〈研究余滴〉『古川ロッパ昭和日記』の接続詞「ところへ」—「そこへ」との比較—」『相模国文』40号、115-120、2013
- ・ 新野直哉「“全然”に関する国語学者浅野信の言語規範意識—昭和10年代を中心に—」『表現研究』97号、1—10、2013
- ・ 鳴海伸一「副詞における程度的意味発生の過程の類型」『国立国語研究所論集』6号、93-110、2013

（2）発表・講演

A 発表

- ・ 新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子「言語の規範意識と使用実態—副詞“全然”

- の「迷信」をめぐって一」日本語学会平成 23 年度秋季大会、高知大学、2011 年 10 月
- ・新野直哉「「“全然”＋肯定」に関する日本語学研究者の言語規範意識」JLVC2012、国立国語研究所、2012 年 3 月
 - ・新野直哉「昭和 10 年代の“全然”に関する国語学者・浅野信の言語規範意識」日本近代語研究会第 293 回研究発表会、千葉大学、2012 年 5 月
 - ・梅林博人「言語変化の過渡期における個人の使用実態—古川ロッパの「全然」を例に—」第 49 回表現学会全国大会、共立女子大学、2012 年 6 月
 - ・新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子・鳴海伸一「漢語副詞の受容と展開—〈漢語の和化〉と否定との呼応—」日本語学会平成 25 年度秋季大会、静岡大学、2013 年 10 月

B 講演

- ・梅林博人「言語使用と規範意識—「全然」を中心に—」中京大学文学会春季大会、中京大学、2013 年 6 月

『青い山脈』(1947)の「全然同意ですな」について
——「変な軍隊用語」とは?——

新野直哉

1 はじめに

「“全然”は本来否定を伴う副詞である」という言語規範意識が、国語史上の客観的事実と反しており、「迷信」と呼ばれるべきものであることは、すでに多くの文献で指摘されている。そのうち早い時期の重要な論文の一つと位置付けられるのが鈴木(1993)である。

その中で、鈴木は、昭和後期には肯定表現と結びつく“全然”に、<すべて>の意味の伝統的な用法と、<非常に>の意味の新しい用法とが見られる、とした¹うえで、次のように述べる。

[1] この新しい用法に関して注意されるのは、『青い山脈』の次の例である。

「全然同意ですな……」沼田は変な軍隊用語で、ポカンと気が抜けたように答えた。
(306・7～8)

「全然同意です」という言い方の、どんな点が「変な軍隊用語」なのか明らかでない。

「全然」が肯定表現に係っている点なのか、「同意です」が軍隊用語なのか、どちらも取れる。前者であれば、「全然」を「^{ママ}非常に」「全く」の意味で肯定表現を修飾する言い方は、軍隊での表現に由来することになるが、果してそう言えるのか明らかではない。『真空地帯』や『雲の墓標』などを調べてみたがはっきりしない。今後の宿題である。(下線(原文では縦書きのため傍線)ママ。445-446)

しかし、鈴木はこの後鈴木(1996)でこの時期の“全然”の用法に再度言及しているが、この「宿題」に関してはまったく触れていない。その後の著作でも、管見の限り同様である。この後の“全然”+肯定に関する研究の進展により、「もう解く必要はない」と判断したということであろうか。また鈴木(1993)はその後の多くの文献で参照されているが、やはり管見の限りこの「宿題」に言及したものはない。

しかし、本稿は、鈴木に代わり、あえてこの「宿題」を解いてみようとするものである。

筆者は、前掲のような“全然”をめぐる「迷信」の発生・浸透の時期について研究を行ってきた(新野(2011)、新野・橋本・梅林・島田(2011)など)。この問題を考えるうえで昭和20年代がひとつの重要な時期なのであるが、従来この時期の“全然”をめぐる言語(規範)意識を知るための文献は、用例から間接的に知るヒントとなるものは獅子文六『自由学校』や坂口安吾『安吾巷談』、『古川ロッパ昭和日記』が報告されているものの(松井1977、梅林2000・2012、など参照)、直接的な記述のあるものでは28～29年の雑誌『言語生活』が早いもので(新野2011:206-207参照)、20年代前半は資料の空白期間といえる。その意味で、新聞初出が22年で、なおかつ周知のように当時本も映画もヒットして多くの国民に親しまれた『青い山脈』に、“全然+肯定”に関する何らかの言語(規範)意識が直

接記述されているとすれば、それは貴重な資料である。以上から、鈴木（1993）の残した「宿題」は、20年の時を経て取り組んでみる意義があると考えるのである。

以下、引用中の下線、{ } 内は筆者による。傍点は原文のママである。漢字字体は現行のものに直した。

2 問題の場面

石坂洋次郎（1900～1986）の小説『青い山脈』の初出は、『朝日新聞』である（1947. 6. 9～10. 4 付に連載。全 117 回）。ある地方都市の私立高等女学校の若い英語教師島崎雪子と青年校医沼田玉雄は、志を同じくする教え子や高等学校の男子生徒たちとともに、学校や町にはびこる前時代的・封建的な考え方の勢力と戦い、勝利をおさめる。その後、沼田に求婚された雪子が、次々と「民主主義」的な結婚に関する自らの希望を突きつけ、沼田を圧倒したところで最終回（10. 4 付掲載分）を迎える。ここで、沼田が「女性に嫉妬深いから、慎んでほしい」と雪子に注文をつけると、雪子はかつて自分を深く愛した男がいたことを語る。そのリアルな描写に沼田が嫉妬で取り乱すと、「その男とは亡父のことだ」と雪子は落ちをつけ、「女より男のほうが嫉妬深いことが証拠立てられた」と沼田をやりこめるのである。その直後に問題のセリフはある。

[2] 「ねえ、シットというのは健康な人間の正常な心理ではございません？ただ、それをお互いに上手に処理していくことが大切なんだと思いますけど……」

「全然同意ですな——」

沼田は変な軍隊用語で、ポカンと気が抜けたように答えた。

「ああ、でも、ぼくは結婚前の男女の会話が、こんなに散文的なものだとは思いませんでしたよ」

そして物語はハッピーエンドとなる。

3 「同意です」について

[1] で、鈴木は「「全然」が肯定表現に係っている点なのか、「同意です」が軍隊用語なのか、どちらとも取れる」とする。「「全然」が肯定表現に係っている点」は明治から昭和戦前の日本語には広く見られた現象であり、「変」でもなければ軍隊で生まれたものでもないことはこれまでの研究から明らかである。では「同意です」が「軍隊用語」という可能性はどうか。『Google ブック検索』を「同意です」で検索してみる（2012. 8. 12）と、戦前から終戦直後にかけては、次のような例がある。[4] は 20 代の女性のセリフである。

[3] 「成程わたしも幽霊は、たゞ病人にだけ現はれるものだといふ説には同意です」（池島重信「哲学者としてのドストエフスキー」『思想』1933. 11：43。）

[4] 「今度来る時、母にもその話をしましたの。無論母も同意ですの。」（徳田秋声『仮装人物』：21-22。中央公論社・1938）

[5] 岡田老は永年のこの雑誌の愛読者で、旧い巻から完本を蔵していただける由で、石原

案に同意でした。(小泉丹「慶祝と希望」『科学』1951.4:47)

また、そもそも当時軍隊用語として認識されるなら、語尾は「です」ではなく「であります」のはずである。「同意です」が軍隊用語という可能性は小さい。

そうすると、[1]で鈴木が提示した二つの可能性はいずれも否定されることになる。それなら、いったい何が「軍隊用語」なのであろうか。

4 「全然同意」について

4-1 もうひとつの石坂作品

筆者は、「宿題」を解くヒントが得られないかと、石坂の戦中から終戦直後の作品を調べてみた。すると、注目すべき作品が見つかった。石坂は戦時中二度にわたりフィリピンで従軍しており(その経緯については館田(1998)に詳しい)、その一度目(1941年11~1942年12月)におけるルソン島での宣撫活動の記録である「マヨンの煙—南部ルソン宣撫行」を雑誌『主婦之友』の1943年4~11月号に発表している。その11月号掲載分に次のような場面がある。

宣撫活動の合間の休息中に、石坂の所属する小隊の長である人見中尉が、石坂に中国人とフィリピン人の民族性の違いを語る。それに対し、石坂はしばし考えをめぐらせた後、次のように答える。

[6]「小隊長の御意見には全然同意です」と私は軍人用語を用ひながら云つた。(53)

ここで「全然同意」に傍点があるということは、この四文字で書かれた部分が「軍人用語」ということであろう。この「全然同意」が昭和戦前から終戦直後にかけてどう使われていたのかを見ていく必要がある。

4-2 「軍隊用語」としての例

陸軍予備士官学校、さらに広島・京都の部隊での生活を経験している堀井令以知(1925~2013)は、次のように述べている。

[7] 変わったところでは、太平洋戦争中の軍隊では「全然同意」という四字熟語が使われていた。筆者自身の軍隊日誌にも査読した上官がそのように記した箇所があり、口頭でも耳にしたことがある。「全然」に続く場合は否定の語句を用いるというのは文法家の説であるが、明治時代の文豪が肯定で表現した例もあり、「全然同意」のような表現は少なくとも戦中からあった。動いている日本語をどうとらえるかという、言語観にも関わってくる問題だろう。(堀井 2005:88)

堀井の言うように「全然同意」という表現が軍隊で使われていたことは、以下のような資料からわかる。

[8] 其処で私は、我海軍航空も須く勘飛行を脱却して計器飛行を尊重する様進めねば行詰る、それにはこれこれの対策を執らねばならぬと言ふ意味で一文を草して武官{=山本}に差出した。武官は一読されて、『其の通りだ、僕も全然同意だ。一寸貸せ、少しなほしてやる』とて、結論の所を、注意を喚起する為にか大分激しい論法になほさ

れた。(阿川弘之『山本五十六』80。1965・新潮社)

これは山本の部下であった人物の回想記の一節で、山本が滞米していた1927～1928年の間にあったエピソードである。なお阿川も山本と同じく海軍生活を経験している。

『Google ブック 検索』では、「全然同意」で検索する(2012.8.12)と200件以上がヒットするが、その中に次のような例がある。

〔9〕『其れを具体的に話して御覧』

と將軍は四辺をチラと見た。中佐は一段声を低うして、

『大事の前に行ふべき小事です。F光線と爆弾投下の威力とを实地に応用することを覚悟するまでです』というた。

『承知ッ、其れは儂も^{ぜんぜんどうい}全然同意です。』(原田政右衛門『露独の来襲』27。1915・新潮社)

この資料は、ロシアとドイツが手を組んで日本と戦う、という架空戦記小説で、著者の肩書は「陸軍歩兵中尉」となっている。

〔10〕河原委員長も^{ぜんぜんどうい}全然同意を表した。(小笠原長生編『愛国読本』150。1932・実業之日本社)

〔11〕丁提督も頻りに首肯て、^{ぜんぜんどうい}全然同意を表したさうな。(同226)

この資料は東郷平八郎に関する逸話を、海軍でその側近であった小笠原が記録したものである。

また次の3例は、1933年、当時陸軍中佐であった鈴木貞一の日記²に見られるものである。

〔12〕対米モ亦^{ぜんぜんどうい}全然同意ニシテ何ントカ大ナ手ヲ打タントス。(9.29分。71)

〔13〕同氏モ之ニ^{ぜんぜんどうい}全然同意セリ。(9.30分。同)

〔14〕広田外相ハ対米「ミツシヨン」派遣ノ件ハ^{ぜんぜんどうい}全然同意。(10.2分。72)

次の〔15〕は2.26事件の際に決起将校が発した檄文の一節、〔16〕は1944年の特攻隊の編成に関する会議での話である。

〔15〕皇軍と名のつく軍隊が我が義軍を討てる道理がない。大御心を奉戴せる軍隊は我が義軍に対して^{ぜんぜんどうい}全然同意同感し、我が義軍を激励しつつある。(太平洋戦争研究会編著『2.26事件の衝撃』120-121。2010・PHP研究所)

〔16〕航空総監は、戦果が挙がらないのは航空がだらしなからだという発想のようですが、私は装備と用兵の問題だと主張したのです。そうしたら石川少佐が立ち上って、「内藤少佐の意見に^{ぜんぜんどうい}全然同意」と言ったため、総監の命でこの会議はなかったことにせよ、御破算だということになりました。(田中耕二・河内山譲・生田惇編『日本陸軍航空秘話』249。1981・原書房)

米川(2009:460)に

〔17〕一般社会と隔絶するために衣服をすっかり着替えるだけでなく、ことばもまったく言い換えた。その中には難しい漢語もどきも多くあった。

とあるように、旧日本軍の用語には一般的な日本語では使わないような特殊な語や表現が

様々あったことは周知の事実であるが、「全然同意」もそのひとつであったのか。

4-3 軍隊とは直接関係ない例

ここでは、戦前～終戦直後の資料のデータベースを用いて当時の「全然同意」の使用実態を調べてみる³。明治後期～大正期の総合雑誌本文を収めた『太陽コーパス』（国立国語研究所）では「全然同一」7例、「全然同様」「全然同轍」各1例が得られるが「全然同意」は1例もヒットしない。

しかし、神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ『新聞記事文庫』（2012.7.2 検索）では「全然同意」は69件の記事に計72例ヒットする。そのうち日本軍に直接関係する記事は

〔18〕なお出先武官の今次の声明は我々{＝陸軍}も全然同意してゐるところである（『大阪朝日新聞』1935.11.10）

〔19〕陸軍としても国防上の見地から燃料国策樹立に大なる関心を有し液体燃料政策の強化充実に全然同意を表してをり、（『大阪毎日新聞』1936.8.15）

など3件程度であり、以下のような軍事とは直接関係ない経済関係の記事が大部分を占める。

〔20〕{鉄道院の}古川副総裁は北海道鉄道の速成計画には全然同意なり唯資金問題の解決を得べきや否やが問題なりと言明せり（『東京朝日新聞』1916.8.31）

〔21〕大統領ウイルソン氏は巴里会議に対して未だ全然同意せざるも連合国は敵に原料品を与ふるを拒み常に優先権を占めざるべからずとの点に同意すべしと解せらる（『国民新聞』1918.2.12）

〔22〕内田通信次官は予も又貴下の意見に全然同意也帰国の暁は各社外船主を懲遡して本問題を実現せんことを期すべしと述べて立ち別れたり（『神戸新聞』1919.3.13）

〔23〕此二つの理由に依り露国との通商開始に就ては最初から全然同意であり（『東京日日新聞』1920.12.16）

そもそもこの記事データベースは経済関係の記事を収録したものであるが、そこでこれだけ使われているということは、軍隊でだけ使われた特殊な表現とは考えられない。

『Google ブック検索』では、軍隊とは無関係の学術関係の文章でも次のような例が得られる。

〔24〕吾人は我が法律案が、次の如き諸種の規定を設けたるに対しては、全然同意を表せざるを得ざるなり。（稲垣末松訳『世界各国最近の商業教育』101.1907・文美堂）

〔25〕けれども中年のマルクス、国際協会時代のマルクスは、最も穏和な宗教批評家の一人となり、総ての宗教の根本的道德原理に全然同意した。（石川三四郎『訂補 西洋社会運動史』955.1927・大鐙閣）

〔26〕今日の京城標準語に於て、ㄷに上述の如き二種の発音上の区別の存することは、其の後の諸家も認める所であつて、私も全然同意である。（小倉進平「朝鮮語母音の記号表記法に就いて」『音声の研究』4:142.1931・音声学協会）

〔27〕この意味に於いて私は九鬼周造氏が『いきの構造』に於いてこれを「民族存在の

解釈学」として取扱はうとした志向に全然同意する。(阿部次郎「国文学と美学」『文学』2(10):162。1934・岩波書店)

また、軍人以外の日記にも見られる。官僚出身で戦中は内大臣を務めた木戸幸一の日記⁴の1937～1941年の分には、次のような例がある。

〔28〕近衛公は余の意見に全然同意せられ(1937.8.10分。上584)

〔29〕若槻男の意見に全然同意なり。(1940.7.17分。下806)

次に終戦直後の状況を見てみる。『帝国議会議録検索システム』によれば、1945・1946年の帝国議会議録には次に挙げる〔30〕～〔32〕など4例の「全然同意」が見られる。

〔30〕私も「偏狭」と「偏執」の意味の違いは鈴木さんに全然同意でございます(第90回衆議院帝国憲法改正案委員小委員会2回、1946.7.26)

〔31〕さう云ふ試みは改正の趣旨を没却することになるのであつて、全然同意出来ないと云ふ態度を政府は持続されたのでありました、(第90回貴族院本会議39号、1946.10.5)

〔32〕物価庁長官から、それに付て全然同意である、物価を基準にしてやると云ふ答弁があつたのであります(第91回貴族院本会議2号、1946.11.28)

また『国会議会議録検索システム』では、1950年までの間に〔33〕～〔35〕など9例が見られる。

〔33〕先の委員の御意見に、全然同意をする次第であります(第2回衆議院財政及び金融委員会6号、1948.2.3)

〔34〕只今藤森委員から第八條ノ五、第八條ノ七についての修正の御動議が出ました。私はこの修正御意見には全然同意を表する者であります。(第2回参議院厚生委員会17号、1948.6.26)

〔35〕しかし閣議の国策というものについては全然同意をいたしまして、あの法案ができたような次第であります。(第5回衆議院予算委員会7号、1949.4.8)

以上から、「全然同意」はやや格式ばった固い表現ではあるが、戦前・戦中でも軍隊でしか使わない「一般社会と隔絶」した表現ではなく、さまざまな場で使われていたことがわかる。戦後も国会では使われており、同時代人にとり「変」と感じられるような表現ではなかったと考えてよい。

つまり「全然同意」は軍隊で使われていたことは間違いないが、「変」という烙印を押されるべきものではなかった、ということである。結局、「変な軍隊用語」とは何を指すのかという問いへの答えは、いまだに見つからない。

5 「ですな」について

ここで、「全然同意」という表現だけでなく、これが含まれたセリフ全体を見てみよう。

〔1〕で鈴木は「全然同意です」という言い方の、どんな点が「変な軍隊用語」なのか明らかにできないとする。しかし、『マヨンの煙』の「全然同意です」は、自己の所属する組織

の長に対するセリフであるから、軍隊用語として「変」な要素はないはずである。このセリフと『青い山脈』の沼田のセリフを比べると、文末の「な」の有無、つまり「ですな」か「です」か、という点が違っている。鈴木はこの点にはまったく注目していない。しかし、「どんな点が「変な軍隊用語」なのか」を考えるべきなのは、「全然同意です」ではなく、「全然同意ですな」についてであったのではないか。

「ですな」のような「丁寧体＋な」の使用者について先行文献では、「男性の、しかもある程度の年齢の人」（伊豆原 1996：74）、「話し手の性別（男性）と年齢層（比較的年配）を連想させるニュアンスが存在する」（秋山 1998：17）、「男性語的であることは明らかであり、また、老年層の口振りであるように感じられる」（宮崎 2002：7）、「まったく不可能というわけではないが、使用者がおもに年配の男性に限られるという点で、一般性を欠いた表現である」（日本語記述文法研究会編 2003：261）、「社会的に地位の高い中高年の男性」が想定されるだろう」（加藤 2010：184）とする。また話し手と聞き手の関係については「使われる相手は対等か目下のものに限られる」（伊豆原 1996：75）、「話し手が対話相手との待遇的意味での上下関係において、優位性を表す」（秋山 1998：18）とする。

さらに尾崎（2009：35）では、「「～ですなあ」「～ますなあ」のような丁寧語と終助詞「なあ」（あるいは長呼しない「な」）を述部に同時に含む表現」を、「共通語ではこれらの表現の使用者が中高年の男性に限定される傾向が強いこと、さらに言えばそれを使う男性であっても若年層のうちは使わず中高年になってから使い始める傾向があること」から「おじさん言葉」と呼ぶ。そして「こうした表現を使い始めるのは 30～40 代頃のようにだ」（53）としたうえで、次のように述べる。

[36] こうした表現を使う男性であっても、誰に対してもいつでも使うというわけではない。距離は置けけれども近しさも同時に表現したい相手や場面において使うようである。つまり、へだてと近しさ・日常性（ぞんざいさ）を両立させた表現、「隔てつつ近づく」表現だと言える。これをもう少し言葉寄りに表現するならば、「です／ます」による丁寧さと終助詞「なあ」によるぞんざいさを両立させた表現だということになる。若いうちは丁寧に接すべき相手に対し姿勢をくずすことは許されにくい、ある程度の年齢に達するとそれが許される。加齢変化が認められるのはこうした事情によるものと考えられる。（53）

とはいえ尾崎の分析は 1997 年以降の調査に基づくものであり、その半世紀前の『青い山脈』にただちに当てはめられるとは限らない。より時代の近い松下（1930：56-57）では、次のように述べる。

[37] 「なあ」「ねえ」は自己と聴者との了解の共鳴又はその予想を表す詞である。{中略} 相手の了解を容易と見て簡単に予想する場合は肯き悟る意になり、「ねえ」「なあ」が短く「ね」「な」となる。{中略}「なあ」は「善うございますなあ」などの様に鄭重語（です、ます）の下へ使へば男子用の快濶性を帯びた最も丁寧な語になる。女子には殆ど使へない。

ここで、『青い山脈』を調査すると、「ですな」は問題の「全然同意ですな」を含み17例、「ですなあ」が1例、「でしょうな」が8例、「でしたな」が2例ある。計28例を話し手と聞き手に注目して分類すると、教職員→教職員 16例（沼田（「三十二三歳」）→島崎（「まだ若い英語の先生」）3例、教頭→島崎 7例、田中（「まだ若い体操の教師」）→島崎 4例、沼田→田中、岡本（「老教師」）→沼田各1例）、保護者→理事会出席者全体 8例、校長→理事会出席者全体、岡本→理事会出席者全体、田中→理事会出席者全体、下宿主人→島崎各1例となっている。いくつか例を挙げる。（ ）内は掲載の日付と、話し手→聞き手である。[39]は、有名な「変すい変すい……」という偽ラブレターが読み上げられた場面の後のセリフである。

[38]「いや、もう、外国人と話してるようなもんですな」（8.5。田中→島崎）

[39]「しかし、あれですなあ。恋という字も知らないなんて、戦時中に勉強が出来なかったせいもあるでしょうが、まず、心細い話ですな——」（第63回。柳屋（保護者。「しょう油屋の主人」）→理事会出席者全体）

[40]「じっさい、年ごろの女の子つて仕方がないもんですな、島崎さん……」（9.7。教頭→島崎）

確かに女性や男子生徒は使わず、使用者は社会人の男性に限られる。沼田や田中は「中年」かという問題もあるが、沼田は30代に達しており「市会議員を一期間勤めた」とある。田中の年齢は明示されていないが（沼田と「沼田さん」「田中君」と呼びあう場面があるので、沼田よりは年下と思われる）、「戦争中の一期間、陸軍少尉の資格で華北に従軍していた」とある。さらに当時の医者や教師という社会的地位（終戦直後のしかも地方都市となれば、今日よりも明らかに高かったはずである）を考慮すれば、両者は今日の同年代よりも「おじさん」的立場であったといえよう。そして、教職員間でも、年齢はともかく、自分より役職が上の者に対しては使っていない。地方都市の高等女学校においては、教職員間はもちろん、理事会出席者（教職員及び保護者）間も、好悪の感情はともかく、「近しさ・日常性」のある関係である。尾崎（2009）の分析はおおむね『青い山脈』にも当てはまるといえる。

6 「宿題」へのひとまずの解答

阪倉篤義（1917～1994）は、自らの軍隊経験（糸井編（1995：24）には「中国へ、長沙にて終戦」とある）に基づき、次のように述べている。

[41] 初年兵のころ、野外演習に出て、射撃目標のことで、上等兵殿に「一町ほど先に一軒家が見えるでしょう」といおうとしたが、これがどうしてもいい表わせない。{中略}「見えるでしょう」というところが、例の「であります」ことばではなんとしてもいえないのである。「見えますか」ではもちろんなく、「見えましょう」では軍隊ことばになりそうにない。どうにもじれったくて、いろいろ考えたあとで、やっと気がついたことは、けっきょく、軍隊ことばの文体では、こういう、相手の共感を求めるようななれな

れしい表現というものが、そもそも不可能なのだ、ということだった。つまりあの「であります」というのは一種の切り口上のいいかたなのであって、要するに下級者一般から上級者一般に対する型にはまったものいいなのであり、話し手個人と聞き手個人との間の個別的な対人関係を構成することはできないものなのであった。ということは、あの軍隊というものが、本来、上級者と下級者との間にそういう相手個人を強く意識したなれなれしい関係の存在することを許さない社会なのであった、ということにほかならない。「でしょう」に当る表現が軍隊ことばに見出せないのは、むしろ当然のことだったのである。(阪倉 1956 : 190-191)

これに対し、「北中国から東部ニューギニア戦線に身を置いた」という尾川正二(1917～2009)は、

[42]「ありがとう」ということばは、軍隊にはない。感情の染みついた語を避けようとする。したがって、勧誘・共感を促す言い方、情緒を伝えることばはない。「～でしょう?」「～しませんか」などと言えない。「自分は～と思うのであります。いかかでありますか」と、二文にするほかはない。そういう枠から、ある程度自由になったのは、戦場においてだった。

もちろん、公式の報告や申告は、四角な軍隊語でやる。野戦に行って一年足らずで、あまり親しけれない中隊長に向かって、「どうもあの辺りが怪しいですね。一発撃ってみましょうか」と言えるようになる。階級の意識は消えない。だが、もっと近接した間柄になってきているのである。(尾川 2003 : 38-39)

と、阪倉と同様の見解を述べながらも、文字通り運命共同体であることを強く意識する戦場においてはある種の「個別的な対人関係」が形成されるケースがあることも述べる。とはいうものの、旧日本軍が基本的に上下関係のきわめて厳しい階級社会であったことは間違いない。

こう考えていくと、今回の「宿題」に対する解答は、ひとまず次のようにまとめることができる。

○「変な軍隊用語」とされているのは「全然同意ですな」というセリフである。その理由は、石坂が「軍隊(軍人)用語」と考える「全然同意」に、「なれなれしい関係の存在することを許さない」(阪倉)・「勧誘・共感を促す言い方、情緒を伝えることばはない」(尾川) 軍隊にはふさわしくない、「丁寧に接すべき相手に対し姿勢をくずす」(尾崎)・「快濶性を帯びた」(松下) 表現である「ですな」が下接した、木に竹を接いだようなセリフになっていることである。

7 単行本本文について

ところが、まだ問題は完全に解決したとは言えない。『青い山脈』は、新聞連載の後、同じ 1947 年の 12 月に加筆のうえ単行本化された(新潮社刊)。この単行本では、初出本文のさきに引いた[2]に該当する部分は、以下のように変わっている。

[43]「それあ男が女であり得ないように、女も男であり得ない、両性のそれ\／＼の先天的な特質はありますけど、それは男も女もそれ\／＼にいたわつていかなければならない大切な特質ですし、またそのために男女が一对の夫婦になつて、お互いの足りない所を補い合つて、人格を発展させ、充実させていく必要があるのじゃないでしょうか……」

「全然同意ですな……」

沼田は変な軍隊用語で、ポカンと気が抜けたように答えた。雪子はクスリと笑つた。

「ねえ、貴方、お医者さんでしょう？ シットというのは、結局、健康な人間の、正常な心理ではございません？ たゞ、それを、お互いに上手に処理していくことが大切なんだと思いますけど……」

「ごもっともです……」

沼田は、まだ変な言葉遣いをする虚脱状態から脱けきれないもののようだった。何度——皮膚がむけるかと思われるほど、額の汗をしきりにこすりとつたあとで、うめくように、

「あゝ。でも、ぼくは結婚前の男女の会話が、こんなに散文的なものだとは思いませんでしたよ」(339-340)

初出と比べると、沼田の「全然同意ですな」とそのあとの一文は同じであるが、その前後は大きく変わっている。「全然同意ですな」の直前の雪子のセリフは男女同権を説くものになり、初出でそこにあった「シットというのは～」というセリフは直後に回っている⁵。そして、それを受けた沼田が「ごもっともです……」と言い、そのセリフについて「沼田は、まだ変な言葉遣いをする虚脱状態から脱けきれないもののようだった」と説明を加えるというくだりが、増補されている。ここの「まだ」という副詞から、これに先立つ「全然同意ですな」の際も、沼田は同じ「変な言葉遣いをする虚脱状態」にあったということになる。つまり「ごもっともです」を受けての「変な言葉遣い」の「変」と、「変な軍隊用語」の「変」とは、同じ意味であるということになる。当時の「ごもっともです」について見ていく必要がある。

『Google ブック 検索』(2012. 12. 26)、『新聞記事文庫』(2013. 1. 31)を再度利用し、昭和10年代～20年代の資料・記事に見られる、相手のセリフへの返答に使われた「ごもっともです」を検索した(「ごもっともです」「御もっともです」「御尤もです」「ご尤もです」の4種類の表記のキーで検索)。その一部を挙げる。各例のあとに、誰から誰へのセリフかを示した。

[44]「あまり急なお話しなので、どうも速急にはお返事が出来かねますが。」

「御尤もです。やはり身分が不釣り合ひでございませうか。」{中略}

「それに僕の方としまして、いよいよ結婚の相手を決めるとなると、僕の存ではありません。父があり、親族があり、同族の監督省もありまして、ますます躊躇せざるを得ない立場にあつたのです。」通弘は慎重らしい口調で言つて、右手の指

で髭をなでた。

「御尤もです。」{中略}

「だが、はつきりしたお返事を申上げる前に、一応父に相談して承諾を得ておきたいと考へます。」

「御尤もです。私の方も是非さうして戴きたいと思つてゐます。」(林房雄『大陸の花嫁』180-181。1939・第一書房。2004・ゆまに書房復刻) ○娘を持つ男→男が娘と結婚させたい青年

[45]「ト、飛んでもない。貴下だから助けたんぢやあ有りません。日本人は誰でも、弱者に味方する正義の士ですよ……」

「御もつとも、御もつともです。」(城戸礼「拳骨行進曲」『新青年』1939.4:234) ○アメリカの会社の支配人→その支配人にクビを告げられたものの、その危機を救った元社員の日本人青年

[46] 津田氏 国策で極めたといふものだけは自由に行きたいと思ひます

蔵相 御もつともです (『大阪毎日新聞』1939.4.9) ○大蔵大臣→鐘紡社長

[47] 小松 日満支の運賃をその有機的な連関性から言つて根本的に改正して合理化することが必要ではないでせうか

下津 御尤もです、(『満州日日新聞』1940.3.2) ○北京鉄路局長→記者

[48] 松沢さん お米の混合率がいつも変つてゐるのは不便です、きまつてみると水加減も楽ですし節米についても考えやうがございます

手納氏 ご尤もです、(『大阪朝日新聞』1940.10.25) ○神戸米穀同業組合長→主婦代表

[49] そして紳士のいふ『これ以上の貯蓄は無理だ』といふ言葉に一応ごもつともですと深くうなづいたうへ、さて頭取はこゝで手際よく話題をくると転じた(『大阪朝日新聞』1941.11.28) ○銀行頭取→顧客の紳士

[50]「やっぱり、同じ人間が使用中だったんですか。」

「そないなことは、わしは知らへん。」

「ごもつともですとも。」(源氏鶏太『三等重役』11。1951・毎日新聞社) ○人事課長→社長

[51]「わたしとしては、広子さんにお目にかかつてからでない」と

「ええ、御もつともです。是非ともお目にかかつてやつて下さい」(武田泰淳「美貌の信徒」『中央公論』1952.2:180) ○遊び人の夫→その夫から妻を預かってくれと頼まれている修道女

[52] しかし、私たちの伝統は、ただチャーミングであるばかりではこまります。これからは、民族としての自信の源、また新しい創造発展への動力になるものでなければならぬと思います。

ナッグ ごもつともです。国の伝統はそういうものでなければならぬと、私も思

います。(対談「アジアの平和と文化」『中央公論』1954.7:65) ○インド上院議員→作家阿部知二

[53] こんなことは以前から実行されている当り前のことに違いないが、リーガル・マインドの養成にはやはり必要なことだと思いますね。

宮沢 ごもつともですね。(座談会「公務員にはどのような法律知識が要求されるか」『ジュリスト』1954.8.15 号:14) ○宮沢俊義(東大教授)→佐藤達夫(法制局長官)

これだけの例がある以上、昭和10年代から20年代にかけ「ごもつともです」は、日常の言語生活で相手の言い分を認める姿勢を示す際には広く使われるセリフであり、個別の言語形式としては「変」ではないということになる。

しかし、もう一度[44]～[53]の例をよく読むと、話者にとりある程度距離のある相手を立てる意図で、その意見を(ひとまず)認めるようにする際に使うセリフと感じられる。次のような指摘もある。

[54] 前田{陽一＝東京大学助教授}たとえば、議論している場合、相手に真つ向から反対して「ノー」と云う人は少い、たいてい「ごもつともです」と云っている、しかしその「ごもつとも」という云い方に依つて、どの程度の「ごもつとも」であるかを互に聞き分けているということがあてられるでしょう。(座談会「被占領心理」『展望』1950.8:50)

そうすると、前述のように「隔てつつ近づく」表現である「ですな」と、同じ場面で同じ沼田が同じ雪子に対し使うのは、いささか不自然といえる。さらに、これから「民主主義」的な、互いの人格を尊重した男女同権の家庭を作ろうとする若い世代同士のプロポーズの場にはふさわしくない、ということもできよう。つまり「ごもつともです」という言語形式自体が「変な言葉遣い」なのではなく、この場面・状況、話し手と聞き手の関係にふさわしくない言語形式である、という運用の点で「変な言葉遣い」とされている、ということである。

とすれば、「変な軍隊用語」についても、同じように考えるべきではないか。個別の形式自体についてではなく、「学校や町に残る戦前・戦中の価値観と戦ってきて、これから「民主主義」的な家庭を築こうという若い世代同士のプロポーズの場面に、前時代的で封建臭が強い軍隊用語はふさわしくない、変な言語スタイルである」ということを言いたくて、「変な軍隊用語」という言い回しを用いた、という解釈ができるのである。

8 おわりに

『青い山脈』の「変な軍隊用語」とは何を指すのか、という鈴木(1993)の残した「宿題」について、本稿では二つの考え方を提示した。

- ① 「全然同意ですな」という個別の形式が「変な軍隊用語」である。その理由は、石坂が「軍隊用語」と考える「全然同意」に、軍隊にはふさわしくない「丁寧に接すべき

相手に対し姿勢をくずす」表現である「ですな」が下接した、木に竹を接いだようなセリフになっていることである。

②個別の形式がどうこうではなく、「軍隊用語」という言語スタイルそのものが「変」だということである。その理由は、「民主主義」的な若い世代同士のプロポーズの場面にふさわしくない、前時代的で封建臭が強い言語スタイルであるからである。

連体修飾においては、いわゆる限定用法と非限定用法があるが(金水(1986)、益岡(1995)など参照)、「変な軍隊用語」は①の場合は前者(「軍隊用語」という名詞の指示対象はそのうちの特定のもの(「全然同意ですな」)に限定される)、②の場合は後者(「軍隊用語」という名詞の指示対象は特定のものに限定されず、この語で表される概念全体である)ということになる。

果たしてどちらの解釈が妥当なのか。筆者には、「ごもつともです」とそれに関する記述のない初出本文を読む限りでは①の方が妥当に思えるが、その部分が増補された後の単行本本文を読むと、②の方がふさわしく思える。あるいは石坂は初出本文に加筆して単行本本文にする際に、「変な」の意味するところを①から②へ改めたのかもしれない。

結局、本稿では「宿題」の回答を一つに絞ることはできなかった。この点については新たな「宿題」が残ったということになる。ただ、初出・単行本いずれの本文においても石坂は、この箇所において、「全然同意ですな」でなく「全然同意」については、「軍隊用語」である、という以上の言語意識は示していないということに変わりはない。したがって、鈴木(1993)が問題にしたこの箇所が「“全然”＋肯定」に関する言語(規範)意識研究の資料となるかどうかという本稿の最大の関心事については、「この箇所は“全然”＋肯定」一般に対する石坂の何らかの言語(規範)意識が現れたものではない、と考えるべきである⁶⁾という結論を示すことができるのである。

注

- 1 筆者は、新野(1997: 278-279)で述べたとおり、特別な場合を除いて、昭和後期すなわち戦後の肯定表現と結びつく“全然”が<非常に>という意味を表すことはない、と考える。
- 2 伊藤隆・佐々木隆(1978)「鈴木貞一日記一昭和八年」『史学雑誌』87(1): 68-95。史学会による。
- 3 本稿では「全然同意」が一語化、あるいは一単位化しているのかどうか、という点には踏み込まない。あくまで“全然”と“同意”という二語が連続して用いられている例を問題とする。

[51] 斯くの如きは只人心を惑はすに過ぎざるを以て将来共断じて採用す可からずとの一委員の説明に対し政府も全然同意の旨言明せられ(『樺太日日新聞』1914. 1. 10)

[52] 全然同意に決定 公正会緊急総会(『大阪朝日新聞』1924. 7. 16)

[53] 「金」擁護問題につき財人慎重に考慮 蔵相の説明に全然同意の人々も最悪の場合

を準備（『神戸又新日報』1931. 10. 14）

これらの場合は一単位化していると見られるが〔52〕〔53〕は見出しであることを考慮するべきである。

一方「全然同意を表す」のような場合は、「同意を表す」という例も少なからずあるので、「全然・同意を表す」と「全然同意・を表す」の両方があるといえる。「全然同意」の否定の場合も、「全然」が「ない」「ず」にかかる＜100%同意しない。全面的に不同意である＞という場合と、「同意」にかかる＜100%は同意しない。同意する部分と不同意の部分とがある＞という場合の両方がある。本文中の例でいえば、〔21〕は＜100%は同意しない＞、〔31〕は＜100%同意できない＞と解するべきである。

- 4 木戸日記研究会校訂（1966）『木戸幸一日記 上・下』東京大学出版会による。
- 5 鈴木（1993）では『青い山脈』の引用元テキストは示されていないが、所在ページが示されていること、最後が「——」でなく「……」であることから、新聞初出本文ではないことは間違いない。
- 6 石坂自身の“全然”の用法を見ておく。まず『青い山脈』では、否定（新野（2011:118-123）の分類に従う。以下同）を伴う例が

〔54〕興奮のあまり、富永の言葉など全然耳に入らなかつたのか（地の文。8. 16）

の1例、肯定を伴う例は〔2〕以外に以下の例がある。

〔55〕「それとも手紙の件は、ぜんぜん私の邪推で、みなさんには覚えがないことだつたかしら？」（島崎の詞。6. 23）

〔56〕「本日の理事会は全然無効に終るものかと思います」（田中の詞。8. 21）

ほかの作品として、昭和20年代の『山のかなたに』・『丘は花ざかり』（『昭和文学全集 56 続石坂洋次郎集』（1955・角川書店）を用い、新聞初出本文（『山のかなたに』は『読売新聞』1949. 6. 15～12. 9付、『丘は花ざかり』は『朝日新聞』1952. 1. 1～7. 15付）で確認）・『石中先生行状記』（新潮文庫 1～3・完（1953～56）を用い、雑誌初出本文（『小説新潮』など）で確認）を調査した。その結果否定を伴う例は7例、肯定を伴う例が以下の4例得られた。いずれも掲げたのは初出の本文である。

まず『山のかなたに』は次の1例がある。

〔57〕「チエ！ ぜんぜん可笑しいや。自分の面をみ顔だなんて、言葉遣いが間違つてらあ」（9. 26）

『丘は花ざかり』も次の1例である。

〔58〕「自分が{妻に}もらうということになれば、見方が全然ちがうよ」（5. 31）

『石中先生行状記』では、次の2例である。

〔59〕「お前さん達には子供も生れてをらんのに、ボツコ夫人のお乳を揉むなんて、全然エロぢやないかね」（「根ツ子町の巻」『小説新潮』1948. 10：39）

〔60〕「それでは{タヌキの焼き物に供え物をするのを} 全然止めたのかなと喜んでみると、次の朝は線香がくすぶつてる」（「タヌキ騒動の巻」同 1949. 3：42）

「全然同意」のような「否定的意味・マイナス評価でない語」を伴う例は得られなかったが、それが、彼が当時“全然”がそのような語を伴うことを認めていなかったことの積極的な証拠にはならない。なお昭和 35～36 年発表の『あいつと私』には、「美男美女が三人ずつで、ぜんぜんご機嫌だよ」という例がある(新野 2011 : 135-136 参照)。

参考文献

- 秋山学 (1998) 「終助詞「な」の機能—発話様式の適切さに関する諸要素から見た一考察」『日本語と日本文学』26 : 10-22。筑波大学国語国文学会
- 伊豆原英子 (1996) 「終助詞「な(なあ)」の一考察—聞き手に何を伝えているのか」『名古屋大学日本語・日本文化論集』4 : 65-82。名古屋大学留学生センター
- 糸井通浩編 (1995) 「阪倉篤義博士年譜及び著述目録」『国語学』180 : 24-32。国語学会
- 梅林博人 (2000) 「流行語批判とその背景—「全然」の場合について」『相模国文』27 : 57-70。相模女子大学国文研究会
- 梅林博人 (2012) 「『古川ロッパ昭和日記』における副詞「全然」の用法—言語変化の過渡期における個人の使用実態」『表現研究』96 : 44-53。表現学会
- 尾川正二 (2003) 『帝国陸軍の教育と機構』新風舎
- 尾崎喜光 (2009) 「第 4 章 「おじさん言葉」および「親言葉」」尾崎喜光研究代表『平成 18 年度—20 年度科学研究費補助金(萌芽研究)研究成果報告書 加齢による社会活動の変化にともなう言語使用の変化に関する研究』35-54。
- 加藤淳 (2010) 「「です・ます」+終助詞「よ／ね／な／か」の機能—場面条件と言語形式における「聞手の存在」」『名古屋大学国語国文学』103 : 194-178。名古屋大学国語国文学会
- 金水敏 (1986) 「連体修飾成分の機能」松村明教授古稀記念会編『松村明教授古稀記念国語研究論集』602-624。明治書院
- 阪倉篤義 (1956) 「日本語のスタイル」柴田武著者代表『ことばの講座 1 世界のことば・日本のことば』183-204。東京創元社
- 鈴木英夫 (1993) 「新漢語の受け入れについて—「全然」を例として」松村明先生喜寿記念会編『国語研究』428-449。明治書院
- 鈴木英夫 (1996) 「「全く」の用法の推移と副詞としての特性について」山口明穂教授還暦記念会編『山口明穂教授還暦記念国語学論集』: 458-484。明治書院
- 館田勝弘 (1998) 「石坂洋次郎のフィリピン従軍体験」『郷土作家研究』25 : 10-19。青森県郷土作家研究会
- 新野直哉 (1997) 「「“全然”+肯定」について」佐藤喜代治編『国語論究 6 近代語の研究』258-286。明治書院*新野直哉 (2011) に収録
- 新野直哉 (2011) 「「“全然”+肯定」をめぐる研究」『ひつじ研究叢書〈言語編〉93 現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に』111-215。

ひつじ書房

新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子（2011）「言語の規範意識と使用実態—副詞“全然”の「迷信」をめぐる」『日本語学会 2011 年度秋季大会予稿集』183-188。日本語学会

日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 モダリティ』くろしお出版

堀井令以知（2005）『岩波新書新赤版 941 ことばの由来』岩波書店

益岡隆志（1995）「連体節の表現と主名詞の主題性」益岡隆志・野田尚史・沼田善子編『日本語の主題と取り立て』139-153。くろしお出版＊益岡隆志（1997）『新日本語文法選書 2 複文』くろしお出版に収録

松井栄一（1977）「近代口語文における程度副詞の消長—程度の甚だしさを表す場合」松村明教授還暦記念会編『松村明教授還暦記念国語学と国語史』737-758。明治書院

松下大三郎（1930）『標準日本口語法』中文館書店

宮崎和人（2002）「終助辞「ネ」と「ナ」」『阪大日本語研究』14：1-19。大阪大学大学院文学研究科日本語学講座

米川明彦（2009）『集団語の研究 上』東京堂書店

【付記】

本稿は、本プロジェクトの第 5 回研究発表会（2012 年 8 月 28 日）、さらに第 301 回日本近代語研究会（2013 年 2 月 23 日）の発表内容を再構成しまとめたものである。多くの方からご意見をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

【追記】

本稿の校正刷りの段階で、馬上駿兵（2014）『新典社新書 64 文豪たちの「？」な言葉』（新典社）が刊行された（2014 年 2 月）。同書は「名作の中から現代の基準では「？」と思われるような言葉を拾い上げ」（カバーより）たもので、新野（2011）で扱った“全然”・“役不足”も取り上げている。そして“全然”について論じる中で、本稿が目した『青い山脈』の「全然同意ですな」を挙げ（単行本版の本文）、次のように述べる。

〔61〕この会話文は、「変な」と評されていますが、変なのは、「全然」の使い方ではなくて、ふつうにはあまり使われない、軍隊で使うような言葉ということで、「同意です」に対して言っているのでしょう。（22）

本稿で述べたとおり、筆者の見解はこれとは異なる。なお馬上（2014）では「おわりに」の末尾（119）に「附記」として、新野（2011）について「ほぼ書き了える頃になって」知った、と記している。

1 はじめに

戦前の「全然+肯定」（例「全然新しい世界」芥川『河童』第九節、昭2）を知る人々は、戦後、「下に必ず打ち消しを伴なう」（三省堂『辞海』昭27）という語史と一致しない規範のもとで、副詞「全然」をどのように用いていたのであろうか。

こうした疑問と、先行研究では個人の経年的な用法調査が手薄であるという理由から、筆者は、梅林（2012.10）で『古川ロッパ昭和日記』（戦前篇、戦中篇、戦後篇、晩年篇。2007年新装復刊、晶文社）の「全然」の使用実態を調査し、結論として、ロッパの場合には「全然」の使用に際して遲疑逡巡や規範への追従も在った可能性が高いことを述べた。

しかし、従来、「下に必ず打消を伴なう」といった規範意識によって物議を醸した副詞は、「全然」のみではない。たとえば、「とても」は、「全然」よりも早い時期に否定呼応があいまいになった類例として度々引き合いに出されている。また、「断然」「てんで」「絶対」なども、「全然」と似た時期にやはり否定呼応があいまいになっていたという言及がなされている（言及については後掲する）。

そして、ここでも気になるのが、否定呼応のあいまい化を感じた人々は、当時それぞれの副詞をどのように用いていたのかという点である。物議の以前と以後で用い方を変えたのかどうか、否定呼応の「否定」にどのような語句を用いたのか、呼応のあいまい化によって肯定呼応が圧倒的に多くなってしまったのか等々、具体的な使用実態はどのようなものであったのだろうか。

このように考えてみると、副詞の呼応についての言及は、どのような使用状況を反映しているのかが明らかではないと気づかされ、ことによると、自身や他人の印象論を妄信しているのではないかと反省もさせられる。

そこで、今回、従来の言及で「全然」と共に引き合いに出されることのある「とても」「断然」「てんで」「絶対」の使用実態を『古川ロッパ昭和日記』で調査し、その結果を梅林（2012.10）でやはり同日記を用いて調査した「全然」の使用実態と比較して、それぞれの副詞について気づく点を述べてみることにしたい。

2 副詞の呼応に関する諸言及

前章で述べたように、まず、「とても」「断然」「てんで」「絶対」が、従来どのように記されているのかを諸言及であらためて確認してみたい。

2-1 浅野信の言及

副詞に関する浅野信（1905～1984〈明38～昭59〉）の言及はいくつかあり、それについ

ては、新野（2013）、新野・橋本・梅林・島田・鳴海（2013）に詳しい。ここでは、「断然」についての早い時期の記述である浅野（1933〈昭8〉）と、「“全然”の呼応に関する意識が直接示された嚆矢であり」（新野2013、6頁）、「とても」「断然」についてもふれている浅野（1943〈昭18〉）を取り上げる。

①断然……元来否定的語、それが肯定的になった。しかもかなり頹乱性をもつてゐる。
（浅野（1933）160頁）

②「とても」が余りにその一語に感情の凝集が甚だしかつたために、その呼応性を振り棄てたのと反対に「決して」が下に否定の語を呼応せしめるに至つたことは面白い現象である。（中略）今日これらの中間にあるものが「全然」であり「断然」である。これらは、前記語の否定語に対して、半ば消極語をも取るのである。（浅野（1943）40～41頁）

2-2 小堀杏奴の言及

小堀杏奴（1909～1998〈明42～平10〉）の言及については、戦後発生 of 流行語「全然+肯定」への非難が直接示された嚆矢と目される小堀（1953〈昭28〉）を取り上げる。なお、文中の「女学校時代」は大正末期～昭和初期と考えられる。

③近頃気になるのはよく、／「全然よく出来るの。」／式の言葉を使ふ事である。「全然」とは否定の意味であつて、「全然出来ない。」とか、「全然駄目だ。」と云ふのならわかるが、これでは意味をなさない。／考えてみると、私が女学校時代「とても」と云ふ言葉が流行し、「とても綺麗」などと今でも平気で使ふが、「とても」は考えると否定の意味である。／こんな事では「とても駄目」だ。

2-3 『言語生活』の座談会における言及

『言語生活』には前出③や後出⑤を含め様々な情報が載るが、ここでは、1953年の座談会を取り上げる。

④浅沼 「断然」なんて言葉は、その次に否定の言葉がくるのが普通でしょう。／丸野 普通はそうでしょう。／浅沼 ところが「断然やる」とか……。／編集部 「全然」というのが、今は肯定になっておるでしょう。／堀川 「まるでおもしろい」もそうですね。（座談会「マス・コミュニケーションと日本語」『言語生活』21、1953年6月号。＊丸野（不二男）＝毎日新聞社紙面審査室／浅沼（博）＝日本放送協会報道局取材部長）

なお、③④⑤はいずれも昭和28年の発信であるが、その時期は戦後の「コトバ・ブーム」のただ中にあたる。「この時期のコトバ・ブームの背景には、相次いで強行された、当用漢字・現代仮名遣いや、アメリカ英語の氾濫など、身近なところで、コトバの状況が急激に変化したことがある。その困惑ないしは混乱に、専門的な説明が求められた」（田中（2007）まえがき）という時代背景は承知しておいてよいことかと思われる。

2-4 岩淵悦太郎の言及

岩淵悦太郎（1905～1978〈明38～昭53〉）の言及については、「てんで」にふれる岩淵（1953〈昭28〉）と、「とても」についてやや詳しく触れる岩淵（1959〈昭34〉）を取り上げる。

⑤「てんで好きだ」「てんでいい」のような「てんで」の用法、「全然好きだ」「全然いい」のような「全然」の用法、なかなか意表に出た表現が少ないが、大体において、流行語は、名前通り一時の流行に過ぎず、生命力ははかないようである。（岩淵（1953））

⑥私自身の記憶から言っても、大正期には、少なくとも若い年齢層では、この「とても」の用法（肯定呼応の用法—引用者補）はもうあたりまえになっていたのではないかと思われる。というのは、私は、小学校・中学校・高等学校を大正期に過したのであるが、「とても」のこの用法を特に耳新しいものと感じた記憶はない。幼い時からずっと使っていたような感じを、この「とても」の用法に対して持っている。少しも「とても」のこの用法を怪んだ記憶がないのである。（中略）／戦争後に気の付いたことであるが、若い層で、しきりに／てんでおもしろい。／全然うれしい。／のような言いかたをする。この「てんで」「全然」は、言うまでもなく／てんで出来ない。／てんで見向きもしない。／全然知らない。／全然興味がない。／のように、否定表現を伴うのが普通である。それを肯定表現に使うのであるから、これはちょうど、「とても」の場合と同じといってよい。（岩淵（1959））

2-5 田中章夫の言及

他の副詞とは異なり、「絶対」が「全然」と関わって取り上げられることは少なく、筆者自身も、戦中や戦後まもない時期の言及については見出せていない。しかしながら、最近の田中（2012〈平24〉）に次のような興味深い言及が見られる。

⑦（「全然～肯定形」「とても～肯定形」をあげた—補引用者）ついでに、もう一つ。昭和の二〇年代のことだが、教室の黒板の端に「〇〇部員は、昼休み、絶対に部室に集合せよ」と書いてあるのをご覧になった、文法学の岩井良雄先生が、「この“絶対に”はオカシイ」と指摘なさった。いうまでもなく、「絶対に」なら「集合するな」でなくてはオカシイというわけだ。当時、学生たちの意見は、オカシイ／オカシクナイ、半々だったように記憶する。現在では「絶対に見に行く」にも「絶対に賛成しよう」にも、あまり違和感を感じられないが、こうした用法のハシリは、どうも終戦直後の若い世代だったのではないかと思うが、どうだろうか。（188頁）

また、同じく最近の工藤（2013）も、「全然」の肯定呼応、否定呼応の論述に続けて「このたぐいの語は、ほかにも「多分」「一向に」「絶対」などがある。漢語由来の副詞にはこの傾向が強い。」と「絶対」をあげている。こうしたことから、今回、「絶対」も調査対象語に加えることとした。

2-6 副詞の呼応に関する言及の略年表

副詞の呼応に関する言及は、上記以外にもあり、稿末に示す先行研究にはその情報が記されている。そこで、それらをここに「副詞の呼応に関する言及の略年表」の形に整理してみることにする。

副詞の呼応に関する言及の略年表

年次	【言及対象の語】	資料名
1923(大12)	【とても】	坪内逍遙『所謂漢字節減案の分析的批判』
1924(大13)	【とても】	芥川龍之介『澄江堂雑記』
1927(昭2)	【とても】	新村出「山言葉」『京都帝大新聞』(7/1)「とても補講」『藝文』(10月)
1933(昭8)	【断然】	浅野信『巷間の言語省察』
1935(昭10)	【断然・旧全然】	浅野信『国語の匂いと韻』
1935(昭10)	【断然】	萩原朔太郎「新しい言葉は何処にあるか 日本語の未来」『作品』6-10
1937(昭12)	【とても】	里見弴『文章の話』
1943(昭18)	【とても・決して・断然・旧全然】	浅野信『俗語の考察』
1947(昭22)	【断然】	塩田まさる『恋愛モダン語隠語辞典』
《(昭25)	坂口安吾『安吾巷談』用例「全然エライよ」等。獅子文六『自由学校』用例「全然肉体派ね」等》	
1953(昭28)	【全然・とても】	小堀杏奴「思ひ出」『言語生活』18
1953(昭28)	【断然・全然・まるで】	座談会「マスコミュニケーションと日本語」『言語生活』21
1953(昭28)	【てんで・全然】	岩淵悦太郎「言語時評—流行語」『言語生活』27
1959(昭34)	【とても・てんで・全然】	岩淵悦太郎「ことばの変化」『世界』165

* 播磨（1993）、吉井（1993）、梅林（1995）、同（2000）、新野（1997）、同（2011）、新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子・鳴海伸一（2013）を参考として作成。

* 本表は、新野・橋本・梅林・島田・鳴海（2013）の発表当日資料を加筆修正したものである。

2-7 副詞の呼応に関する諸言及のまとめ

これまでのところからは、次のようなことが推察されよう。

(イ) 梅林（2000）などで「全然+肯定」批判が目立ち始めたのは昭和20年代後半であることを示したが、その時期にはすでに「とても」は否定呼応ではないと意識されている。

(ロ) 新野・橋本・梅林・島田・鳴海（2013）で橋本氏は「断然」の受容の詳細を示し、呼応のあいまい化に関する言及についても、「▲古くは昭和初期から例が見られる。」（222頁）と指摘したが、その情報と上記略年表とを併せて考えると、「断然」は、「と

ても」よりも後、「全然」よりも前の時期に否定呼応のあいまい化を生じた考えられる。

(ハ)「てんで」「絶対」については情報が少ないが、逆に見れば、両副詞とも戦前の様子を語るものがないことから(略年表)、「てんで」「絶対」の否定呼応のあいまい化は「全然」とほぼ同時期、戦後のことなのではないかと推察される。

さらに(イ)～(ハ)を総じて言えば、呼応の副詞における否定呼応のあいまい化は、大正半ば～昭和20年代の50年に満たない期間に【「とても」―「断然」―「全然／てんで／絶対」】の順で時間差的に次々と発生した可能性があるということになる(時間差的発生は、「差」が短ければ、連続的、さらには同時並行的になるということでもある)。

したがって、この期間のどの時点に注目して否定呼応のあいまい化を語るかによって、内容が違って来る。たとえば、昭和戦前で語れば、「とても」はかつて否定呼応であった、「断然」は最近呼応が乱れている、「全然」は否定呼応するのが普通である」となるであろうし、昭和戦後で語れば、「とても」「断然」はかつて否定呼応であった、「全然」は最近呼応が乱れている」となるであろう。

そう考えると、おのずと次の(i)(ii)が考えられてくる。

(i) 大正期～昭和30年代(先の⑥言及が昭和34年であることを考慮)においては各副詞の呼応の実態は数年の単位で刻々と変化している可能性がある。したがって、その時期の使用実態調査が必要となる。

(ii) 比較的速いとも思われる変化に、個々人はどのように対応して各副詞を用いていたのか。困惑はなかったのか。それを見るためには個人の経年的な用法調査が必要となる。

今回、こうした(i)(ii)から、『古川ロッパ昭和日記』の「とても」「断然」「てんで」「絶対」について調査を行った。その結果と考察を以下に記すが、それに先だって、次章では古川ロッパの略歴と『古川ロッパ昭和日記』の研究資料としての適性について確認しておくことにしたい。

3 古川ロッパの略歴および『古川ロッパ昭和日記』の研究資料としての適性

3-1 古川ロッパの略歴

古川ロッパの略歴は以下の通りである。

喜劇俳優。本名郁郎。東京都出身。映画雑誌の記者から俳優に転じ、ロッパ一座を結成してエノケン(榎本健一)と並ぶ人気者となった。脚本、随筆など著作も多い。

明治三六～昭和三六年(一九〇三～六一)。(小学館『日本国語大辞典 第二版』)

ここで注目すべきことは、ロッパの生年が前出の浅野氏(1905～1984)、小堀氏(1909～1998)、岩淵氏(1905～1978)と近く、四人はほぼ同世代であるという点である。したがって、ロッパも三人と同様に戦後のさまざまな流行語にふれていたと考えられる。

また、「俳優」「記者」「著作も多い」などの経歴から言語に対する意識の高いことも容易に想像される。事実、『古川ロッパ昭和日記』には発音や文法、言葉遣い、流行語等に関する記述が散見する。その詳細は梅林（2012.10）で記したので、ここでは割愛する。

3-2 『古川ロッパ昭和日記』の研究資料としての適性

次に、『古川ロッパ昭和日記』（著者：古川ロッパ、監修者：滝大作、全四巻、2007年新装復刊、晶文社）の研究資料としての適性を見るが、まず、日記各巻の時期と分量を以下に記す。

- ・戦前篇：昭和9-15年 日記頁量794頁（昭和10年の日記が欠損）
- ・戦中篇：昭和16-20年 日記頁量887頁
- ・戦後篇：昭和20-27年 日記頁量918頁
- ・晩年篇：昭和28-35年 日記頁量908頁

いずれの巻もA5判二段組みの体裁となっている。こうした配分とロッパ自身が記した日記の全分量との関係については、監修者の滝大作が次のように述べている。

全体の量は、お二人の試算によると、四百字原稿用紙で優に三万枚を越えるという。／これを丸ごと出版すると、A5判、二段組み五百ページの本がおおよそ二十冊になる。常識的に考えて、相当読書好きの方でも容易に読み切れる分量ではない。／相談の結果、清氏の了解を得て、凡例に示した原則によって、（引用者中略）三分冊にまとめることになった（「戦前篇」「解説」806頁。文中の「お二人」は晶文社の津野海太郎氏、村上鏡子氏。「清氏」はロッパの長男古川清氏）

また、「戦後篇」の「解説」（929～932頁）には、最終的に上記の全四巻となったいきさつが記されている。

こうした体裁をふまえたうえで、『古川ロッパ昭和日記』の研究資料としての適性を考えてみるならば、まず、同日記が言語量の面から見て十分なものであることは明らかである。そして、これに小学館『日本国語大辞典 第二版』の用例採取資料であるという実績を加味すると、今回の調査資料として、同日記は適切であると考えられる。

4 調査方法および調査結果の提示

今回の調査では、機械検索と素読による用例確認を併用した（注1）。そして、採集された用例を、新野（2011）の第2部第3章に載る表1～4の分類項目にしたがって用法分類し、その結果を、【図表1A、1B】【図表2A、2B】【図表3A、3B】【図表4A、4B】にまとめた。また、比較のために、以前に調査した同日記の「全然」の使用実態を示す図表を【図表5A、5B】として添えた。

なお、本稿では、新野氏の分類が先行研究中でもっとも詳細と考えられることから、氏の分類を踏襲した。また、今回は機械検索による調査も利用したわけであるが、用法の解釈、判定のために、『日記』については広範に目を通したことを付言しておく。

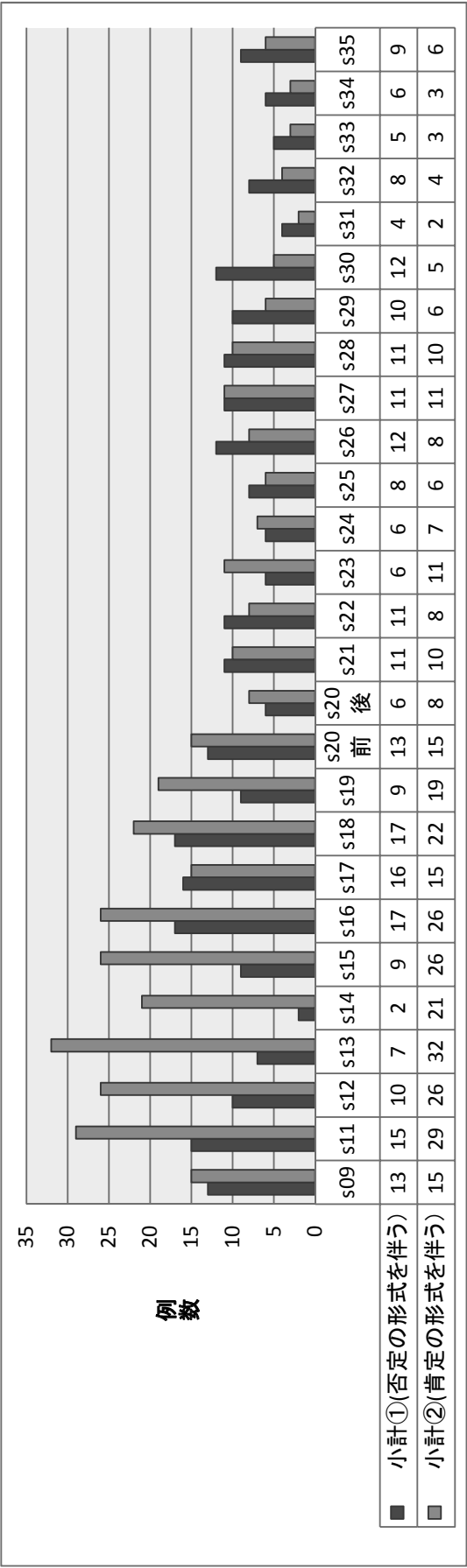
【図表1A】『古川ロッパ昭和日記』の「とても」の使用実態

分類		年代																													
① 否定の形式を伴う	形容詞「ナイ」	s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35	計		
	助動詞「ナイ」「ズ」「マイ」	1	2	0	2	1	1	3	1	0	1	2	0	3	1	0	2	2	0	0	1	2	2	1	0	0	1	1	30例(4.79%)		
		12	13	10	5	1	8	14	15	17	8	11	6	8	10	6	4	6	12	11	10	8	10	3	8	5	5	8	234例(37.38%)		
	小計①	13	15	10	7	2	9	17	16	17	9	13	6	11	11	6	6	8	12	11	11	10	12	4	8	5	6	9	264例(42.17%)		
	A否定の意の接頭語を含む語	0	0	0	0	2	1	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	2	1	0	1	0	0	0	0	11例(1.76%)		
② 肯定の形式を伴う	B二つ以上の物事の差異を表す語	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例(0.16%)		
	C否定的な意味の語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例(0%)		
	Dマイナスの価値評価を表す語	9	11	10	6	5	13	12	8	9	9	6	4	5	3	8	1	4	5	8	4	4	3	1	3	3	2	6	162例(25.88%)		
	E否定的意味やマイナス評価でない語	6	18	16	26	14	12	13	7	11	10	9	4	5	4	2	6	2	3	1	5	2	1	1	1	0	1	0	180例(28.75%)		
	小計②	15	29	26	32	21	26	26	15	22	19	15	8	10	8	11	7	6	8	11	10	6	5	2	4	3	3	6	354例(56.55%)		
③ その他の	呼応部分の省略	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	6例(0.96%)		
	連体(「ーの～」「ーな」)	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2例(0.32%)			
	小計③	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	8例(1.28%)		
	計 (小計①+②+③)	28	45	36	40	23	36	43	31	39	28	29	14	22	19	17	13	14	20	22	22	16	18	6	12	8	10	15	626例(100.00%)		

* 数字は例数。右端欄百分率は少数第3位で四捨五入。最上段年代欄の「s」は昭和の略記。「s10」は日記欠損。「s20前」「s20後」は20年の戦前、「s20後」は20年の戦後。

* 分類項目は、新野(2011)第3章の表を踏襲し並行的に見られるようにした。ただし項目名については若干表現の変更をした。

【図表1B】否定の形式を伴う「とても」と肯定の形式を伴う「とても」の年代別使用状況 (表1Aの小計①欄と小計②欄のグラフ化)



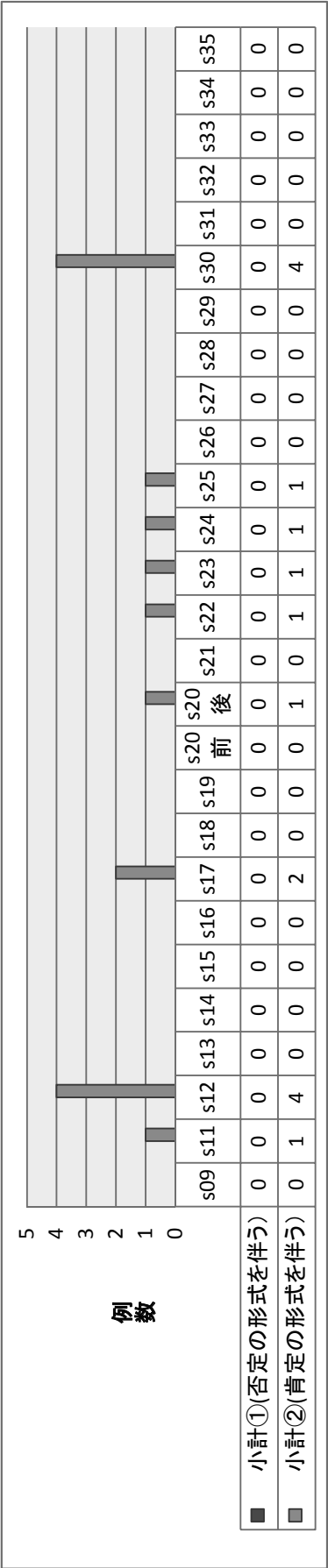
【図表2A】『古川ロッパ昭和日記』の「断然」の使用実態

分類	年代	s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35	計
①肯定の形式を伴う	形容詞「ナイ」	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例(0.00%)
	助動詞「ナイ」「ズ」	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例(0.00%)
	小計①	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例(0.00%)
②肯定の形式を伴う	A否定の意の接頭辞を含む語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例(0.00%)
	B二つ以上の物事の差異を表す語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例(0.00%)
	C否定的な意味の語	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	4例(23.53%)
	Dマイナスの価値評価を表す語	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2例(11.76%)
	E否定的意味やマイナス評価でない語	0	1	3	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	10例(58.82%)
③その他	小計②	0	1	4	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	16例(94.12%)
	呼応部分の省略	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例(0.00%)
	連体(「ーたる」)	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例(5.88%)
	小計③	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例(5.88%)
	計(小計①+②+③)	0	1	5	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	17例(100.00%)

*数字は例数。右端欄百分率は少数第3位で四捨五入。最上段年代欄の「s」は昭和の略記。「s10」は日記欠損。「s20前」「s20後」は20年の戦前、「s20後」は20年の戦後。

*分類項目は、新野(2011)第3章の各表を踏襲し並行的に見られるようにした。ただし項目名については若干表現の変更をした。

【図表2B】否定の形式を伴う「断然」と肯定の形式を伴う「断然」の年代別使用状況（表2Aの小計①欄と小計②欄のグラフ化）



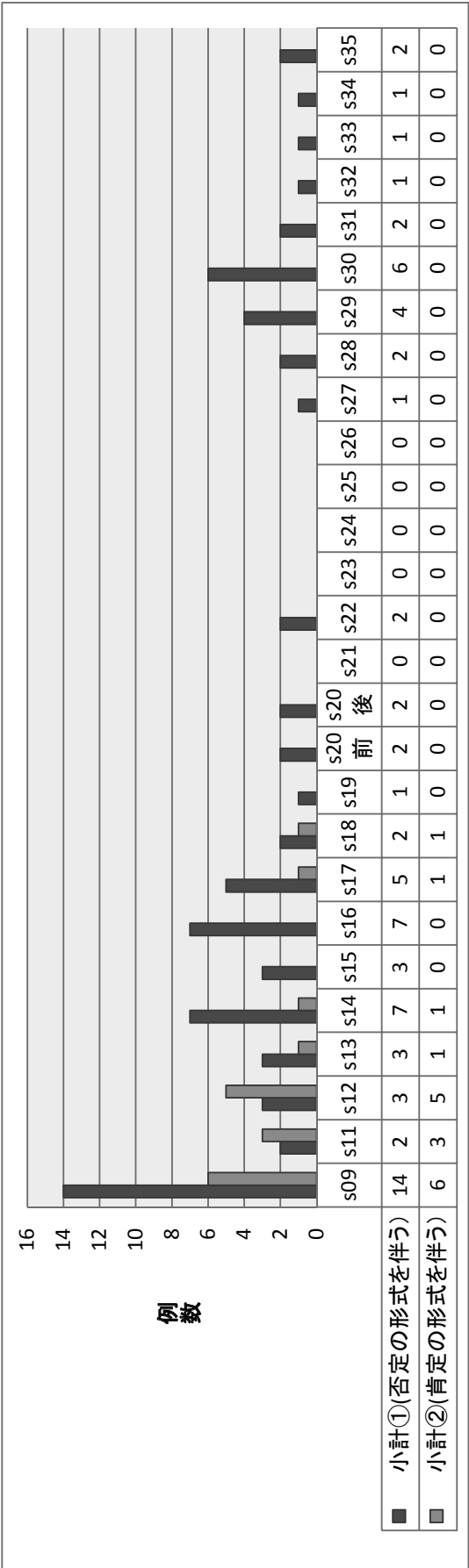
【図表3A】『古川ロッパ昭和日記』の「てんで」の使用実態

分類	年代																											計
	s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35	
① 否定の形式を伴う	形容詞「ナイ」																											8例(8.79%)
	助動詞「ナイ」「ズ」																											65例(71.43%)
② 肯定の形式を伴う	小計①																											73例(80.22%)
	A否定の意の接頭辞を含む語																											0例(0%)
	B二つ以上の物事の差異を表す語																											0例(0%)
	C否定的な意味の語																											0例(0%)
	Dマイナスの価値評価を表す語																											18例(19.78%)
	E否定的意味やマイナス評価でない語																											0例(0%)
③ その他	小計②																											18例(19.78%)
	呼応部分の省略																											0例(0%)
	連体(「ーの～」)																											0例(0%)
	小計③																											0例(0%)
	計 (小計①+②+③)																											91例(100.00%)

* 数字は例数。右端欄百分率は少数第3位で四捨五入。最上段年代欄の「s」は昭和の略記。「s10」は日記欠損。「s20前」は20年の戦前、「s20後」は20年の戦後。

* 分類項目は、新野(2011)第3章の各表を踏襲し並行的に見られるようにした。ただし項目名については若干表現の変更をした。

【図表3B】否定の形式を伴う「てんで」と肯定の形式を伴う「てんで」の年代別使用状況 (表3Aの小計①欄と小計②欄のグラフ化)



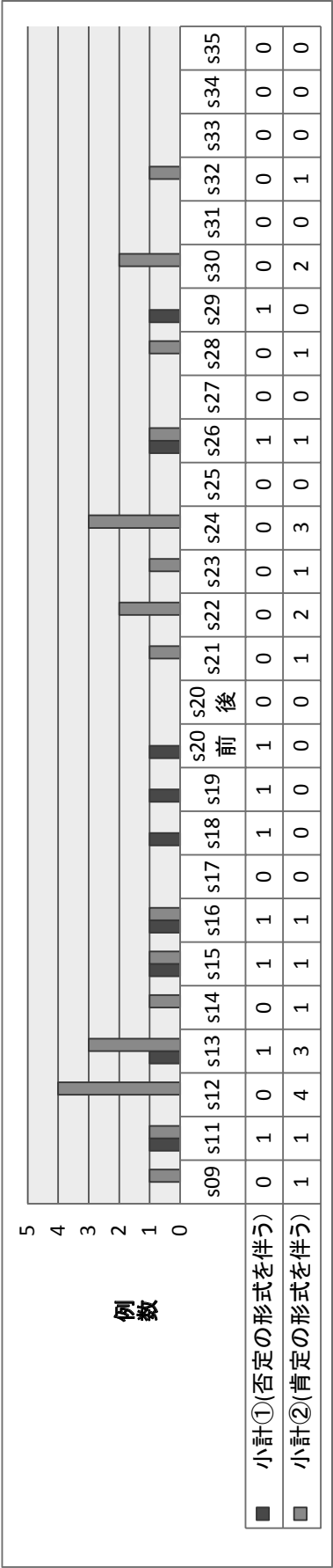
【図表4A】『古川ロッパ昭和日記』の「絶対」の使用実態

分類	年代	s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35	計	
① 否定の形式を伴う	形容詞「ナイ」	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例(1.82%)	
	助動詞「ナイ」「ズ」	0	1	0	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	7例(12.73%)	
	助詞「ナ」(禁止)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例(1.82%)	
	小計①	0	1	0	1	0	1	1	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	9例(16.36%)	
② 肯定の形式を伴う	A否定の意の接頭辞を含む語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例(0.00%)	
	B二つ以上の物事の差異を表す語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例(0.00%)	
	C否定的な意味の語	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5例(9.09%)	
	Dマイナスの価値評価を表す語	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0例(0.00%)	
	E否定的意味やマイナス評価でない語	0	1	3	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	1	0	1	0	2	0	1	0	0	19例(34.55%)	
③ その他	小計②	1	1	4	3	1	1	1	0	0	0	0	0	1	2	1	3	0	1	0	1	0	1	0	2	0	1	0	0	24例(43.64%)
	呼応部分の省略、述語用法	0	0	0	2	1	1	4	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	13例(23.66%)	
	連体(「ーの～」 「ーな・なる」)	1	0	1	2	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	9例(16.36%)	
	小計③	1	0	1	4	3	2	5	0	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	1	22例(40.00%)	
	計 (小計①+②+③)	2	2	5	8	4	4	7	0	2	2	2	0	1	2	1	3	0	2	0	1	1	3	1	1	1	0	1	55例(100.00%)	

* 数字は例数。右端欄百分率は少数第3位で四捨五入。最上段年代欄の「s」は昭和の略記。「s10」は日記欠損。「s20前」は20年の戦前、「s20後」は20年の戦後。

* 分類項目は、新野(2011)第3章の各表を踏襲し並行的に見られるようにした。ただし項目名については若干表現の変更をした。

【図表4B】 否定の形式を伴う「絶対」と肯定の形式を伴う「絶対」の年代別使用状況 (図表4Aの小計①欄と小計②欄のグラフ化)

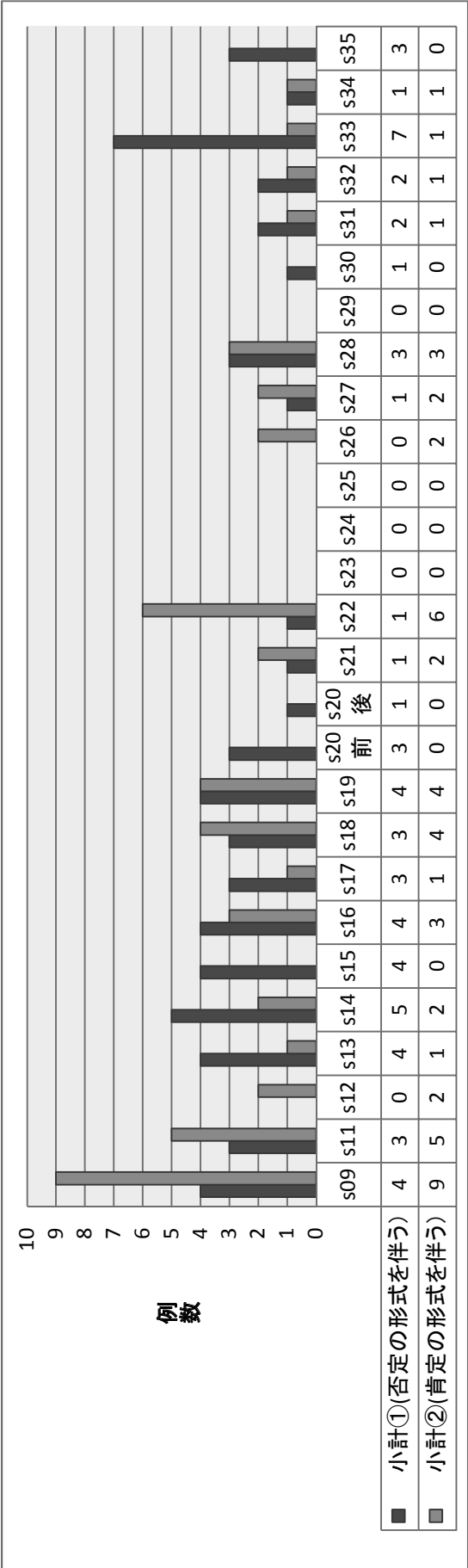


【図表5A】『古川ロッパ昭和日記』の「全然」の使用実態

分類	年代	s09	s11	s12	s13	s14	s15	s16	s17	s18	s19	s20前	s20後	s21	s22	s23	s24	s25	s26	s27	s28	s29	s30	s31	s32	s33	s34	s35	計
① 否定の形式を伴う	形容詞「ナイ」	1	0	0	1	4	0	0	2	1	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	2	0	0	18例(16.07%)
	助動詞「ナイ」「ズ」	3	3	0	3	1	4	4	1	2	2	2	0	1	1	0	0	0	0	1	2	0	1	1	1	5	1	3	42例(37.50%)
小計①		4	3	0	4	5	4	4	3	3	4	3	1	1	1	0	0	0	0	1	3	0	1	2	2	7	1	3	60例(53.57%)
② 肯定の形式を伴う	A 否定の意の接頭辞を含む語	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4例(3.57%)
	B二つ以上の物事の差異を表す語	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5例(4.46%)
	C 否定的な意味の語	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4例(3.57%)
	D マイナスの価値評価を表す語	8	3	0	1	1	0	1	0	0	1	0	0	1	2	0	0	0	1	1	1	1	0	0	1	0	1	0	23例(20.54%)
	E 否定的意味やマイナス評価でない語	0	1	2	0	1	0	1	0	4	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	14例(12.50%)
小計②		9	5	2	1	2	0	3	1	4	4	0	0	2	6	0	0	0	2	2	3	0	1	1	1	1	1	0	50例(44.64%)
③ その他	呼応部分の省略	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例(0.89%)
	連体(「ーの～」)	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1例(0.89%)
		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2例(1.79%)
小計③		13	8	2	5	7	4	8	4	7	9	3	1	3	7	0	0	0	2	3	6	0	1	3	3	8	2	3	112例(100.00%)
計 (小計①+②+③)																													

* 数字は例数。右端欄百分率は少数第3位で四捨五入。最上段年代欄の「s」は昭和の略記。「s10」は日記欠損。「s20前」「s20後」は20年の戦前、「s20後」は20年の戦後。
* 分類項目は、新野(2011)第3章の各表を踏襲し並行的に見られるようにした。ただし項目名については若干表現の変更をした。

【図表5B】否定の形式を伴う「全然」と肯定の形式を伴う「全然」の年代別使用状況（表5Aの小計①欄と小計②欄のグラフ化）



5 調査結果についての考察

5-1 「とても」について

岩淵（1959、先掲⑥）は、大正期には「とても+肯定」が「もうあたりまえになっていたのではないかと思われる」と述べるが、ロッパの使用実態もそれを示していると考えられる。【図表1 B】を見ると昭和9～35年に渡って、肯定呼応、否定呼応を併用しており、特に否定呼応を意識している様子うかがわれない。一個人の使用実態であることを考慮して慎重を期す場合には、少なくともロッパは、「とても」を否定呼応の副詞とは捉えていないということになる。そして、岩淵とロッパの見解を支えに明言するならば、昭和においては「とても」は否定呼応と意識されていないとなる。

しかし、「とても+肯定」が圧倒的なのかとなるとそうとまでは言えない。肯定呼応：否定呼応＝約6：4である（【図表1 A】で否定呼応は約42%〈小計②右端〉、肯定呼応は約56%〈小計②右端〉）。「とても」は確かに肯定呼応もするが、いっぽうで、否定呼応もまだ4割強見られる、つまり、厳密には、「とても」は肯定呼応もするようになり、その頻度が増したと言うべきである。

従来は、この点への言及が不足していたと言える。たとえば、小堀（1953、先掲③）は、「とても綺麗」などと今でも平気で使ふ」と言うが、そのような肯定呼応を圧倒的な比率で使うようになったのか、五分五分程度に使うようになったのか、それともそれ以下なのか、それがまったく分からなかったわけである。

また、ここで、具体的に6：4という数字が出たわけであるが、これは、人が、どの程度の使用率で主流、非主流を感じるのかといったことの目安にもなろう。4割は少ないとは言にくい微妙な数字だけに、この数値は判断の際の拠り所になりそうである。

5-2 「断然」について

『言語生活』1953年の座談会（先掲④）は「断然」は「その次に否定の言葉がくるのが普通」とするが、ことロッパに関しては、これはまったくあてはまらない。17例中、連体用法（「断然たる」）1例を除く16例が否定呼応ではない。用例の一部を示す。

⑧ スープは断然ホテルよりよし。（昭和11年5月21日）

⑨ 幸にも淋しさを知らぬ家庭あり、断然帰った。（昭和12年1月29日）

⑩ 僕らの分が断然いゝ。（昭和12年5月14日）

⑪ 「ロッパ戦はゞ」のみは断然受ける（昭和12年11月14日）

⑧～⑪以外の用例の呼応部分を記すと、「食はれてゐる」「一位」「ことはって」「第一（2例）」「ことはる」「引きはなす」「やられつゞけて」「うまかった」「続けてゐる」「禁煙に入らう」「禁煙するさうだ」となっている。

たとえば、「やられつゞけて」は否定的内容であると見て、座談会の「否定の言葉がくるのが普通」を擁護することもできるが、そうした解釈には苦しさを感じる。

むしろ、【図表 2 A、2 B】のロッパの使用実態、浅野（1933、先掲①）、2-6で示した「副詞の呼応に関する言及の略年表」等の資料から、「断然」の否定呼応のあいまい化は、昭和戦前の段階でかなり進んでおり、座談会の行われた戦後では、もはや否定呼応は「普通」ではなくなっていると考えerほうが素直である。座談会の言及は実態を反映しているというよりも印象論に陥っていると言えはしないだろうか。

また、ロッパの使用実態でもう一つ目立つのは、「断然」では肯定呼応の使用率が圧倒的になっている点である。「とても」は肯定呼応が約6割であったが、「断然」はそれを遥かにしのいでいる($16 \div 17 \times 100 = 94.12\%$)。個人の実態とはいえ、否定呼応がこれほどまでにあいまい化(というよりも衰退)する過程はどのようなものであろうか。この探究には、今度は複数の話者の使用実態をみる必要があるゆえ、今後の課題である。

5-3 「てんで」について

岩淵（1959、先掲⑥）は、「てんで」は「否定表現を伴うのが普通」と述べる。ロッパの使用実態も否定呼応が約80%（【図表 3 A】小計①右端欄）となっていて、それにたがわぬ様相を示している。先の5-1で6割という数値が一つの目安になりそうであることを見たが、ここでは8割であるから、⑥の言及とロッパの実態はまさに一致していると言えよう。

また、岩淵（1953、先掲⑤）では、「てんで+肯定」について、その「生命力ははかない」と述べるが、この様相もロッパの使用実態に現れている。【図 3 B】のグラフを見ると、戦前の昭和9、11、12年にかけて6例、3例、5例と存在した「てんで+肯定」は、以後、数を減じ、戦後には皆無となる。「生命力ははかない」の言葉そのものである。

このように、「てんで」の呼応の様子は岩淵の言及にあてはまるものばかりである。が、しかし、その状況に懸念がないわけではない。

【図 3 B】に見られる昭和20年代の空白と戦後の「てんで+否定」一辺倒の使用状況は、いわば、出来過ぎている印象がある。そして、空白期間が、先の2-3であげた戦後の「コトバブーム」と一致することを考慮すると、戦後の「てんで+否定」は、「否定表現を伴うのが普通」という世論に追従し、自らの用法を矯正した可能性があるのではないかという懸念も生じてくるのである。

というのも、昭和20年代に使用が一時的に見られなくなるという現象は、じつは「全然」にも見られるのである（【図表 5 B】の昭和20年代の空白を参照）。梅林（2012.10）では、この時期を「混乱困惑期」と名づけ、言語主体に遅疑逡巡があった時期ではないかと述べた。「てんで」の【図表 3 B】と「全然」の【図表 5 B】を見比べてみると、昭和20年代の前半に空白期間があり、その後、否定呼応が増えるという様子が似ているように見えることから、「てんで」の場合にも同様に迷いがあり、それを経て用法の矯正をしたのではないかと考えられもするのである。

そして、もしそうであるならば、こと副詞の呼応に関しては、言語形成期を含む若年期

に身につけた用法を矯正する可能性があるということになり、それはたいへん興味深いことと考えられる。我々は、出身地や言語形成期の居住地によって言葉遣いを判断することがあるが、それについても注意が必要ということになるかも知れない。

これについての検討もやはりさらに資料が必要であることから、ここでは保留とする。

5-4 「絶対」について

「絶対」は、他の副詞と異なって言及が少ないのであるが、ロッパの使用実態でも、他の副詞と様相が異なっている。

まず、【図表4A】を見ると、他の副詞に比べ、連体用法と呼応部分の省略用法（又は述語用法、「～は絶対（だ）。」の類）が目立つ。次に【図表4B】を見ると、否定呼応が目立つとは言い難く、さりとて、肯定呼応に偏っているかとなると、その明言も躊躇する。肯定呼応率も約43%と微妙な数字である（小計②右端欄）。

以上をまとめてみると、「絶対」は、まず呼応の副詞なのかどうかという点から確認してみる必要がある。事例も必要であるが、それと併せて、辞書、文法書などの確認が必要である。

6 おわりに

冒頭および2-7の（i）（ii）で示したような動機から、呼応の副詞が引き起こす否定呼応のあいまい化についての言及を整理し、また、『古川ロッパ昭和日記』を資料としてロッパ個人の「とても」「断然」「てんで」「絶対」の使用実態を調査・考察した。その結果、以下の具体的な内容を示すことになったと思われる。

○呼応の副詞における否定呼応のあいまい化は、大正半ば～昭和20年代の50年に満たない期間に【「とても」―「断然」―「全然／てんで／絶対」】の順で時間差的に次々と発生した可能性があるということになる（時間差的発生は、「差」が短ければ、連続的、さらには同時並行的になるということでもある）。(2-7)

○『古川ロッパ昭和日記』の言語資料としての有用性

○ロッパ個人の「とても」「断然」「てんで」「絶対」の使用実態（図表及び5章）

しかしながら、その一方で、「副詞Xは以前は否定呼応であったが、最近では呼応があいまいとなり肯定呼応となっている」といった素朴な言及に潜む多くの問題を、課題として残してしまいもした。「以前」「最近」とはいつなのか、「否定」「肯定」に当たる表現は具体的に何か（副詞によりそれらが異なっている様子も垣間見える）、あいまい化の過程や速度はどのようなものであるのか、あいまい化の原因は何か、あいまい化に際して人はなぜ過去の用法を忘れるのか等。

残る課題は多いが、ただ、今回、複数の副詞の使用実態を見たことで、こうした課題に向き合うに当たっては、一つの副詞に執着し過ぎないことが必要であるように思われた。否定呼応のあいまい化は、「全然」ばかりにではなく、いくつかの副詞に時間差をもって

生じている。その点に注目し、呼応の副詞群における変化という見方をすることによって問題を整理することができるのではないかとも思われた。今後につなげたい。

【注】

(1) 調査に関しては橋本行洋氏（花園大学）にご教示いただいた。記してお礼申し上げます。

【参考文献】

- 浅野信（1933）『巷間の言語省察』中文館書店
- 浅野信（1943）『俗語の考察』三省堂
- 岩淵悦太郎（1953）「言語時評—流行語」『言語生活』27 筑摩書房
- 岩淵悦太郎（1959）「ことばの変化」『世界』165 岩波書店
- 梅林博人（1995）「全然の用法に関する規範意識について」『人文学報』266 東京都立大学人文学部
- 梅林博人（2000）「流行語批判とその背景—「全然」の場合について—」『相模国文』27 相模女子大学国文研究会
- 梅林博人（2012.3）「「全然」再考—迷信、アプレ、前提の否定など—」『相模国文』39 相模女子大学国文研究会
- 梅林博人（2012.10）「『古川ロッパ昭和日記』における副詞「全然」の用法—言語変化の過渡期における個人の使用実態—」『表現研究』第96号 表現学会
- 工藤力男（2013）「陳述のゆくえ—辞苑閑話・三—」『成城文藝』225 成城大学文芸学部
- 小堀杏奴（1953）「思ひ出」『言語生活』18 昭28.3 筑摩書房
- 田中章夫（2007）『揺れ動くニホン語』 東京堂出版
- 田中章夫（2012）『日本語雑記帳』 岩波書店
- 中尾比早子（2005）「副詞「とても」について—陳述副詞から程度副詞への変遷—」国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』博文館新社
- 新野直哉（1997）「「全然＋肯定」について」佐藤喜代治編『国語論究6—近代語の研究』明治書院
- 新野直哉（2011）『現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に』第2部「「全然」＋肯定」をめぐる研究」ひつじ書房
- 新野直哉（2013）「「全然」に関する国語学者浅野信の言語規範意識—昭和10年代を中心に—」『表現研究』第97号 表現学会
- 新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子・鳴海伸一（2013）「漢語副詞の受容と展開—〈漢語の和化〉と否定との呼応—」『日本語学会2013年度秋季大会予稿集』日本語学会

播磨桂子（1993）「「とても」「全然」などに見られる副詞の用法変遷の一類型」『語文研究』第75号 九州大学国語国文学会
吉井健（1993）「国語副詞の史的研究—『とても』の語史—」『文林』27号 神戸松蔭女子学院大学 濱田敦ほか（2003）『国語副詞の史的研究 増補版』所収。後者使用。

【付記】

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト第7回研究発表会発表資料《梅林博人（2013）「否定呼応と言われた副詞の実態—古川ロッパの「とても」「てんで」を中心に—」2013年6月23日、於相模原ユニコムプラザ》と、新野直哉・橋本行洋・梅林博人・島田泰子・鳴海伸一（2013）「漢語副詞の受容と展開—〈漢語の和化〉と否定との呼応—」『日本語学会2013年度秋季大会予稿集』によるブース発表で当日示した資料（文責梅林）とをもとにして、あらたに稿を成したものである。各発表でのご教示にお礼を申し上げる。

〈何事かをなし得た人〉に見る、言語変化の一兆候

— 補助動詞〈～得る〉の意味変化 —

島田 泰子

はじめに：「言語変化の先端（的な兆候）を捉えること」をめぐる

まずは、本稿の筆者（以下、稿者）が参加した国立国語研究所の共同研究プロジェクト「近現代日本語における新語・新用法の研究」（以下、本プロジェクト）の研究期間終了にあたり、個人的総括としての振り返りと、いささかの問題提起を行いたい。

期間中、本プロジェクトにおいて稿者が主に手がけた研究は、

- ① 広告表現等に観察される、私に^{わたくし}「終止形準体法」と名付けた文法現象とその表現
- ② 若年層における格表示の変異のうち、特に二格表現の移行・衰退現象

の2点をテーマとするものであった。いずれも、今日的な動向を捉えて記述しつつ、その歴史的背景を視野に入れて、目の前で起こりつつある変化を大局的な日本語史の一角に位置付けようとするものであった。現代語研究は、古典語研究（歴史的研究）と対比的にのみ扱われるものではない。過去に（歴史上のある時点で）日本語に起こった言語変化も、現在進行中の変化も、等しく総体としての「日本語の歴史」を形成するものである、という意味において、上記2点のテーマで行った稿者の試みもまた、現代語の問題（現象）を取り上げてはいるものの「日本語史」研究の一環である、という認識でいる。

ところで、若年層における最先端の変化は、旧来の言語規範にのっとりた推敲や校正を経て世に出る類の資料には現れづらい。口頭の発話においても、目上の相手など聞き手との関係性によっては、よそ行きにかしこまったもの言いがなされることで、先端的な変化の動向は観察されにくくなる。当然のこととして、若年層における先端的な変化（の、水面下における動向）は、アンダーグラウンドな媒体や内輪向けの発信など位相を限って行われはじめる傾向にある。新しい世代による新しい意味・用法や表現様式が、俗語やいわゆる若者ことばなどといった、規範性から自由に発せられたもの言いにおいて散々多用されたのちに、書きことばなどのより公的な資料・文脈にまで顔を出すようになった頃には、それらはすでにある程度の一般化や定着が進んでいる¹。使われ始めから時間的にも隔たりが生じてしまえば、変化の発端や経緯などは辿りづらくなる。

しかしながら、変化の発端を担う当事者としての若年層は、それが最先端の変化であることについて自覚的でない場合もまた多い。ある語や表現について、その意味・用法が変化しつつあると気付く（つまり「そのような使い方は以前にはなかった（はずだ）が」と実感す

る)のは、旧来の使い方を知らない若年層には困難なことであり、当然、「新用法」と称される現象の発生は、旧来の用法を知る中高年層において、特に気付かれやすい問題となる。(学術的な文脈に限らず)何らかのメタ的な言及がなされることで、問題の所在が共有されれば、若年層(の研究者)にも、新用法に関する観察や分析の機会は等しく与えられることになるだろうが、少なくとも発端としての、現象への気付きやいち早い指摘といった問題提起については、中高年層(の研究者)が自覚的に、積極的に担わざるを得ない、という実情はあるだろう。そのような役割を担うべき中高年層(の、特に研究者)が、どこまで若年層における日本語使用の生々しい実態(先に述べたアングラな内輪向けのことはば遣い)に立ち会えるかという問題は、いわゆる気付かれない・気付かれにくい言語変化の兆候を捉えることの難しさと連動する。

インターネット上のブログ・質問掲示板・各種 SNS 等への書き込みなどによって誰もが発信者たり得る昨今、旧来の規範を逸脱した日本語の使用例は、より得られやすくなっている。また、BCCWJ(現代日本語書き言葉均衡コーパス)のようなデータの位相的な均衡性を謳うコーパスには、逸脱的な日本語の使用例があえて収められていることから、変化の兆候を観察するのに適した用例が収集しやすくなっている。そういった資料群から得られた用例に、どのような代表性を認めるかの判断には、慎重を期す必要はあるものの²⁾、最先端の動向を扱う新語・新用法研究に資するところはやはり大きいと言えよう。

以上、言語変化の兆候をいち早く捉えて記述することの重要性と、それに伴われる課題、資料の特性と注意すべき点、の3つについて述べた。本稿が以下に取り上げる問題も、変化のいまだ兆候にすぎない動向かもしれない、示そうとする事例にも(取り扱いにさまざまな難点のある)インターネット上の用例を多く用いるが、脱規範的な位相で先行的に進行している先端的な言語変化の事例として、やはりここに書き留めておこうとするものである。

1. 「何かをなし得た人」の違和感とその正体

本題に入りたい。昨今、インターネット上でやや定型的な表現のように用いられる「(何かを) なし得た○○」なる表現やその類例がしばしば目にとまる。それらは、以下のように連体修飾部分に多く用いられており、また「なし得る」が完了その他のアスペクト表現「た」((1)(2))・「ている」(後出の(5))・「てきた」(3)や希望・願望の「たい」(4)を伴うなど、旧来の意味では出現しにくい形式を取るものも見受けられ、稿者はこれらに少なからぬ違和感を覚える。まずは事例を示す。

以下、用例の該当部分に下線を施し、被修飾語を二重下線で示した(傍点と波線部分については後述)。「/」で示した箇所には、原文では改行がある(「/」は、二重改行による段落分け)。なお、出典として示したurlは、本稿の脱稿時(2014年1月末)にリンク切れを起こしていないものである。

- (1) 人は自分の生まれた意味を求めたり／また何のために生まれてきたのかとか／そんなことに悩む人が多々いる・・・《略》もし意味があるとすれば／自分が生まれた事ではなく／自分自身がどう生きたかで／その人の生きた証や／意味を見いだせるのではないだろうか？／／何かを成し得た人だけが／生まれた意味を持つのではなく／また広い世界で人の生死は等しく起こる 《略》 でも全く知らない人が生き／何かを成し得た時／それが小さな事であっても／変わる事があるものだ・・・

(個人発信のブログ 記事公開は 2013 年 4 月 14 日)

<http://ameblo.jp/pandemic8888/entry-11510859662.html>

- (2) なし得たように見える写真を撮る

事業に成功した人、結婚した人、家を建てた人などを成し得た人と言う。この成し得た数が多い人が、いわゆる「勝ち組」というやつで、周りから羨望の眼差しを送られるわけだ。／しかし何者でもない僕らが、そう簡単に何かを成し得ることはまずない。家も建てなければ、事業で成功もしない。そこで、成し得たように見える写真を撮ってみようと思う。

(実験的企画サイト「デイリーポータル」 記事公開は 2012 年 8 月 11 日)

http://portal.nifty.com/kiji/120809156856_1.htm

- (3) ウイルスの流入の繰り返しでDNAの進化をなし得てきた人類をサポートする「宇宙と火山」(1) (個人発信のブログ、記事表題 記事公開は 2012 年 9 月 23 日)

<http://oka-jp.seesaa.net/article/293815497.html>

- (4) あなたの「自分の全存在をかけてでも成し得たいこと」／はなんですか。／ドキッとしませんか。これ。／先日の『100 分 de 名著』で特集していた／『星の王子様』のテーマです。／《略》／自分の全存在をかけて／成し得たいそれは／子ども時代に自分が知っていたもの。／それは／そのまま自分が生まれた意味、／生きる意味なのかもしれません。

(個人発信のブログ 記事公開は 2012 年 12 月 17 日)

<http://d.hatena.ne.jp/ruribyaku/20121217/1355749051>

(1)に対する違和感の理由として考えられるのは、この実現が可能であることについて言う〈動詞連用形+得る〉と、それがすでに実現・成立したことを示す完了の「た」、その組み合わせ「なし得た」による名詞「人」「時」への限定修飾、かと思えば個別の具体的な事例に言及するのでもなく、「何かを」と不定のマーカーを添えて一般論として述べる、そのいずれもがチグハグでそぐわない、ということであろう。可能を大きく2種類に分類する渋谷(1993b)の術語に即して言うなら、〈動詞連用形+得る〉の持つ「潜在系

（potential）の可能」の意味が、「た」を伴い完成相として「実現系（actual）の可能」に転じるものの、実現系可能がその意味特徴から通常表すはずの「一回的な動作の実現」を表さず、むしろ潜在系可能が帯びるはずの「状態的な意味の様相」が含まれる、その入れ替わりに近い混乱が、これらの用例に対する違和感の原因ということになる。(2)は、具体例を並べる点で、実現系可能の用例らしく一回性のことがらについて言うかに見えるものの、枚挙的に「数」の問題に言及し、やはり「何かを」を伴った一般論に終始する点で、(この「なし得る」を旧来の意味に取る限り、) 奇妙な違和感を拭えない。

可能表現が(3)のように「～てきた」というアスペクチュアルな形式で使われるのは、可能動詞における「書けるようになった」(渋谷(1993b)に言う「潜在可能獲得」の完成相形式)と同義の、「(読解力の弱い読み手が、テキストを繰り返し吟味することで) だいぶ本文が読めてきた」「(建前ばかりで本音が見えづらい相手と向き合うことで) 真意がようやく掴めてきた」(ともに稿者による作例) のようなものであるから、「(「ウイルスの流入の繰り返し」という要因によって) 次第に進化が可能となってくる」話ではない(3)には、稿者はやはり違和感を禁じ得ない。また(4)のような、可能を表す〈動詞連用形＋得る〉と希望表現「～たい」との共起は、「～(することが) 出来たい」や〈可能動詞＋たい〉などと同様、本来は非文に相当する不整合のはずである。

前後の文脈から判断して、これらの下線部における「なし得る」は、ほとんど「なしとげる」と同義と見られる。(2)は、冒頭に具体例が3つ示されており、さらにこの後は(5)のように続く。この記事の記者³にとっての「なし得る」が、すでに可能表現ではなく(「～ことはできない」との重複的な共起が成立するのはその証左)、さまざまな困難を克服して何らかの成果を上げ、欲しいものを手に入れることを表す語となっていることが知られるが、この新しい語義を周辺的に支える構成要素である、困難の克服や努力の果ての達成(感)といった文脈的条件は、「生まれてきた意味」や「生きた証」などに関連付けて語られる(1)(4)においても同じく認められる。

(5) 成し得るとは？

たとえば何かの競技で金メダルを取ったとする。その金メダルまでには様々な物語があったと思う。休む暇なく練習しただろうし、ケガに苦しめられたこともあっただろう。そんな苦しみに耐えた結果、金メダルを手に入れ成し得た人になったわけだ。

しかし、多くの人がそんな苦しみには立ち向かわず、金メダルを取ることもないだろう。それに練習すれば必ず取れるものでもない。周りに勝たなければならない。つまりそう簡単に成し得ることはできないのだ。そこで、成し得たように見える写真である。

《稿者注：競技場で模造品の金メダルを自慢げに見せてポーズを取る写真を示し、》
どうだろう。成し得ている。この写真をパッと見せられればどう思うだろうか。金

メダルを取ったんだ、と誰もが思うだろう。夏の太陽のように眩しい笑顔にスポーツドリンク、そしてバックは陸上競技場。金メダルを取ったことを疑う余地がない写真だ。 《以下略》 (2)のつづき)

(5)に続く部分では、さらに、他人の家（新築一戸建て）の前で記念撮影を気取り、まるでマイホームの夢を叶えたかのような写真を撮ってみたり、高級ブランド店の前で紙袋を掲げいかにも高価な商品を買ったような写真を撮ってみたりと、闊達なおふざけが続く。本来、何らかの努力や犠牲と引き替えにようやく成しとげるはずのことがらを、いともたやすく実現した（かのような）気分になってみる、という遊びであるが（「デیلیーポータル」は、その手の自由な発想と実験性に満ちた遊びを展開して楽しむ企画サイトであり、その理念に基づき記者たちがそれぞれのアイデアを競って写真入りで報告を行うものである）、このお気楽な安直さがエンターテイメントとしてある種のおかしみを醸すのは、彼らにとっての「なし得る（＝なしとげる）」が、場合によっては(4)「自分の全存在をかけて」という悲壮な決意や鬼気迫る覚悟のもとになされるものとの認識があるからに他ならない。

2. 「なし得る」を使いたがる人たち

前節で観察したとおり、ものごとを行う意の動詞「なす」と、それが可能である意を表す「～得る」の複合である「なし得る」（することができる）は、新たな用法を獲得して使われている。そもそも「なし得る」という表現がどのような位相的特性を有するものであるか、ここで少し検討を加えておきたい。

まずは、「なし得る」が文章語的なもの言いであって、印象としてお堅い、あるいは、ものものしい、もったいぶった響きを伴うものである、という性質について、指摘する必要がある。あえて古めかしい表現を借りれば「こばした表現」ということになるだろうか。

「こばす」とは、古く日葡辞書にも「Cobaxi, su, aita」とある動詞で、仮名草子や咄本にも例が見られるなど、近世期まで口頭語で用いられていた。その語義は以下のとおりである。

知ったかぶりをする。古語、漢語などを用いて、きどった言い方をする。わざとむずかしい言い方をする。きどる。てらう。 （日本国語大辞典 第二版）

動作や行為を全般的に表す動詞の最も今日的な口頭表現は、「する」「やる」であるから、これを「なす」で表そうとすることじたい、ある種の「こばし」である（これを中・近世語「こばす」を使って「こばし」と呼ぼうとすることじたいも、まさに典型的な「こばし」と言えよう）。また、可能表現として用いるものについても、口頭では今日「～（ことが）できる」や可能動詞がより一般的に行われ、相対的に「～得る」のほうは文語的表現の文章

語的残存という位置付けで捉えてよい^{*4}。口頭における〈動詞連用形＋得る〉は、例えば「言い得る」「探し得る」なら、可能動詞「言える」「探せる」や「言うことができる」「探すことができる」の、それぞれ「こぼした表現」と言うことになる。

同じ意味を担う複数の表現形式（あるいは複数の同義語）が選択肢として存在し、それらの間に通時的な新旧の関係が存在すれば、古いほうの表現が、口頭において行われ（ることの少）ない「文章語」的な位置付けに追いやられ、その結果、自ずと「雅語」的な位相を帯びる。一般的な語彙の消長のありようの中にしばしば観察されるこの構図は、事例に事欠かない。例えば、下二段動詞が一段化する過程で「書きことばに於いて」行われる「与ふる」「加ふる」などの二段形を、「上品であって従ってまた力のある」語形としたロドリゲス日本大文典の記述（「動詞の活用に就いて」附則二）などは、そのあたりの事情を反映していよう^{*5}。橋本（1990）が示す「よごる・よごす」と「けがる・けがす」における今日的な表現差（抽象度の違いなどを含む意味差）の事例も、新旧ではなく和漢の文体差に端を発する点がやや異なるものの、漢文訓読調から文語調へと転じた後者（けがる・けがす）が前者（よごる・よごす）の「こぼした表現」に相当する点で、類例に数えられる。

「なす」にも「～得る」にもある種の「こぼし」が含まれる「なし得る」は、学術論文の標題において頻繁に用いられている。国立情報学研究所の論文検索ツールCiNii Articlesで検索したところ、「なし得る」61件^{*6}、「なし得た」23件^{*7}のヒットがあった（2014年1月末現在）。学術論文における「なし得る」の使用には、「気取り」や「知ったかぶり」だけではなく、ある種の「改まり」とも呼ぶべき「位相的なふさわしさへの配慮」があると見られるが、それも含めて、こぼしたものの言いとしての「なし得る」の印象や味わいは、十分に注意されてよい。

そのような「なし得る」が、（学術的な文脈ではなく）実業界での啓発的な文脈にも多用されることは、注目される現象である。以下は事例の一部、(6)は実学系大学に付属の実業系研究所が「法人のお客様」向けページに設けた連載コラム（ビジネスパーソンを対象とする通信研修講座の広報を兼ねる）のプロローグ「連載開始にあたって」に見えるもの、(7)は、転職求人情報サイトで「会社じゃ教えてくれないココロの扱い方」と題して連載中のコラムに見られるもの（第44回の表題部分）である。

(6) リーダーシップ「第8の習慣 (R)」 ～いま、求められるリーダーシップとは？

《前略》 「偉大さ」とは何でしょうか。／「偉大な人物」「偉大な記録」「偉大な功績」といった言い方をするように、ここでは “その人だけにしか成し得ない卓越したこと” といった意味で使われています。

（産業能率大学 総合研究所 連載コラムより。 公開日不明、2012年末頃か^{*8}）

<http://www.hj.sanno.ac.jp/cp/page/8946>

(7) 【人が何を成し得たかは、他の人の心に何を残したかで、測るべき。】

気高く生きたい。／気高く歩みたい。／／そんなことを今日も、／冬の空気は、突き刺さる陽射しと共に教えてくれます。

／12月になりました。／／ここからもあつという間です。／／時の流れは速くなるばかりです。／／密度はどんどん濃くなっていき、／一つの終着駅を迎える。／／頂上から見える景色を登山口に変えるために。

／熱く、熱く、生きましょう。

／満月が詩をくれました。／／今回も唐突に詩を一句。 《以下略》

(転職サイト PROSEEK 連載コラム^{*9} より。記事公開は 2010 年 12 月 1 日^{*10})

http://www.proseek.co.jp/pb/contents/column/satouyoshiaki_101201.html

これらの用例に代表される、「偉業の達成」を意味する「なし得る」のビジネス的文脈における多用（流行とも呼べるかもしれない）には、先に記述したような、「なし得る」にまつわる位相的な特性とそれに基づく表現性が大きく関わっていると考えてよいだろう。

「なし得る」は、ロドリゲスが言うところの「上品であって従ってまた力のある」もの言いとして、平たく言えば「格調高く、ありがたい」訓示の類になじむ、ということである^{*11}。

インターネット上の記述に限らず、達成することをこぼして「なし得る」と表現することが、会社などの組織において口頭でも行われているであろうことは、想像に難くない。時期的に相前後する(8)(9)のような記述は、その想像の一助となろう。

(8) 成し得る【なしえる・なしうる】なし得る

物事を達成・遂行することが可能である、といった意味の表現。

(「実用日本語表現辞典」 記事公開は 2011 年 7 月 9 日)

http://www.practical-japanese.com/2011/07/blog-post_4992.html

(9) 質問：「なし得た」と「 《略》 」という意味は何ですか

《略》 中国人だから、分からない、お願いします

回答：ここでの「なしえた」は「成功した」という意味で使われています。

(Yahoo!知恵袋より。「日本語」カテゴリへの質問 書き込みは 2011 年 5 月 23 日)

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1362901003

(8)は、インターネット上に設けられた用語解説サイトの類（開設者の素性は不明）であるが、「実用的で現代的な日本語の表現について解説する辞書・辞典サイト。ビジネスの現場や電子メール、あるいは職場の上司などから聞いたような、現代的な日本語の中で、特に実用的な場面で利用される言葉を解説します。」（注目部分への破線は稿者）と謳われたこのサイトに取り上げられる見出し語の中に、「なし得る」が含まれているのが興味深い。

「ビジネスの現場」で「職場の上司」から聞いたことばが理解できず困った外国人（日本語非ネイティブ）の就労者が発した質問が(9)だと見るならば、先の想像も「ビジネスの現場」の実態に遠からず、ということになる。

(6)に代表される、ビジネスシーンでの「なし得る」は、偉業の達成に憧れ、それを目指す文脈において、自他を叱咤し鼓舞する際のキーワードとして定着している、と記述できる。「叱咤」のトーンを和らげるための「ポエム化^{*12}」を経た、「激励」や「慰撫^{*13}」の定型表現として用いられたのが(7)や前節の(1)(4)であり、先の(2)(5)は、そういった価値観や風潮への揶揄的なパロディとして位置付けられよう。

ちなみに、こういった新用法での「なし得る」多用とその背景にある風潮は、ビジネスシーンに留まるものではなく、若年層が好んで聴く、いわゆるJ-POPと呼ばれるジャンルの音楽で展開される感動系応援ソングの類に見られる激励調の歌詞にも確認できる。

(10)(11)は、単独の動詞「成す」では名詞「夢」を対格に取りづらい（「夢をなす」という共起関係は、日常的な慣例として存在しない）点で、「なし得る」を、動詞「なす」の可能表現ではなく、「達成」を表す動詞と見るべきであろう。特に(11)「夢を成しえられない」は、(5)「簡単に成し得ることはできない」同様、可能表現の重複を許容している点が、語義変化を裏付ける指標となる。

(10) 僕は期待に応えたい ここで勝たなきゃ未来は貰えない／Runnin' on Runnin' on my way／これからもずっと壊れるまで／Runnin' on Runnin' on my way／やさしさはいらない 欲しいのは結果だけ／《略》／明日は勝つぞ 成しえなかったあの夢を／切り裂く風を追い越して 才能よ今こそ目覚めよ／なんでこの世に生まれたか その答えはラインの向こう側

(SEAMO with BENNIE K「Runnin'^{*14}」 CD シングルは2005年10月12日発表)

(11) 砂をかむような思いで 道を踏みしめてきた人に／乗り越えていかなくちやならぬ壁は訪れる／《略》／誰も一人きりで生きる事などできはしないだろう／誰も一人ぼっちで夢を成しえられない／／倒れそうな時に 手をのばして支えてくれた／だから いつかこの姿が 誰かのチカラになればいいな／あの日のように

(SHACHI「VOICE^{*15}」 収録アルバム「Get the Dr.Martens!!」は2007年8月発表)

孤高のアスリートのように「これからもずっと壊れるまで」走り続け（Runnin' on）で「勝つぞ」、と宣言する(10)は、(2)の「勝ち組」や(5)の「周りに勝つ」に通じ、いささか強迫的に自らを鼓舞するトーンは、今日的な世相（長引く平成不況とそれに由来する雇用不振に基づく、旧来の社会機構の変容や崩壊）に裏付けられた、人生の苛烈な競争のイメージを想起させる。それを和らげる「ポエム化」の例と位置付けられる(11)は、やはり(1)(7)に連

続している。波線部についても同様に、(11)「誰かのチカラになれる」自分（の探求）というモチーフは、他者への（ささやかな）貢献で自身の存在価値をはかろうとする(7)の発想と同じであり、(10)「なんでこの世に生まれたか」という問いは、(1)(4)における「生まれてきた意味」や「生きた証」と同一のテーマである。

3. 「なし得る」「なし得た」はなぜ誤解されたか

行為全般の成立や実現が可能であることを表す「なし得る」が、可能の意味でも目標や偉業の（努力の結果としての）「達成・遂行」(8)に関して言うものと解釈されたり、「なし得た」という完了形式が「成功した」(9)の意とされたりするのは、現にそのような意味で多用される現状から帰納してのことと考えられる。逆に、そのような用例が蔓延したのは、「なし得る」の語義に対してなされた新たな解釈（平たく言えば誤解）の演繹的な実践によるものであるから、両者は循環的である。この循環の契機や発端は、どこに求められるだろうか。

新旧の用法を仲介するかのような用例も見られる。(12)(13)は、後述する条件句との共起など、用法において旧来の規範から特に逸脱しているとは認められないが、上に示した用例群と同じく「達成」の意味に近い解釈は可能であり、文脈的にも、(12)「戦う」「勝つ」というキーワードに見られる発想（その「ポエム化」が(13)）や、波線部「私の存在価値」「(誰かに必要とされる)自分」の探求というモチーフまで、(10)(11)にそっくりである。

(12) ここで今は勝たなきゃいけない 戦おう

この手にしてきたもの 努力なしじゃ成し得ない／私の存在価値 私自身が証明
(加藤ミリヤ「My Soul」^{*16} 収録アルバム「Diamond Princess」は 2007 年 3 月発表)

(13) 探し物は見つかったの？／《略》／信じていれば夢は叶うだなんて 口が裂けても
言えない／だけど信じてなければ成し得ないことが／きっと何処かで僕らの訪れを待
っている／《略》／長いこと続いた自分探しの旅も／この辺で終わりにしようか／
明日こそ 誰かに必要とされる／自分を見つけない

(Mr.Children「Prelude」^{*17} 収録アルバム「SENSE」は 2010 年 12 月発表)

こういった用例を介して「なし得る」の語義は誤解された、と推定することは出来よう。その間の背景や事情として容易に想像されるのは、以下のようなことであろう。

「なし得る」と「なしとげる」は、共通する「なす」を複合動詞の前項に持つ（そしてともに下一段に活用する動詞である）ことによって、音の響きという表層的な類似性を持つ。こぼした表現である「なし得る」に日常的になじんでおらず、旧来の語義を明確に認識し

ていない・正確に理解していない層は、音の類似から意味を類推することになる。これが、両者の意味を混同させる要因となった。「なす」じたいが、先にも述べたとおり、「なせばなる、なさねばならぬ」などのことわざにかたがつ残存する程度で、日常的には行われない）文語調の語であること、またそれと連動して「なし得る」「なしとげる」以外に動詞「なす」を前項に持つ複合動詞がほとんど存在しない^{*18} ことも影響を及ぼしたと見られる。あるいは、「成し得る」という漢字表記を目にすることで生じる、「成功」への類推（当然その逆もまた考えられよう、「成功」の意であるとの類推的な誤解による「成し」表記、そして、それらの循環による誤解の再生産）も関係すると考えられよう。

しかし、そのように推定してもなお、以下のような疑問は残る。(12)(13)のような例は文脈的な類似性において新旧の用法を仲介するかに見えるが、これらの「なし得る」をそのまま「なしとげる」に置き換えるならば、(12)「努力なしじゃ なしとげない」、(13)「信じてなければなしとげない」であり、「否定を伴う条件下における、帰結としての不可能」を意味する類型としては、十全ではない。「～しなければ（条件）～できない（帰結）」という呼応における可能表現に該当する傍点部分を欠くからである。「成立」や「達成」に語義を転じて、なお、条件句との呼応では、やはり

(5)「苦しみに立ち向かわず」して（条件）－「簡単に成し得ることはできない」（帰結）

(11)（他者の支えなくして）「一人ぼっちで（は）」（条件）－「夢を成しえられない」（帰結）
のように、やはり可能表現が要求され（新たに補われ）る以上、そこには飛躍があると言える。この飛躍を超えて語義が誤解される事情は、どのように考えられるだろうか。

先に、「なし得る」の語になじんでおらず旧来の語義を明確に認識していない・正確に理解していない層、というものを想定したが、それは、「なし得る」に限らず文語調の「～得る」全般にあまり縁のない非教養層、なかんずく若年層のことである。類例として、同じ層において観察される「あり得ない」の意味変化が、ここに関連付けられよう。

未実現のことがらについて言う「あるはずがない」（「存在・出来・実現するはずがない」）という可能性の否定に用いられる「あり得ない」は、若年層を中心とした世代では、実際に出来・実現した事態について「受け入れがたい」「許容したくない」「拒絶したい」に近い、情緒寄りの評価的な用法で多用されている。新旧の用法をつなぐのは、「（本来ならば）あるはずのない」「（通常状況下では）起こるはずのなかった」、信じがたい・あつてはならないことがらについて批判的に述べるという、文脈的な共通性に基づく含意である。

ここにも、以下のような条件句との呼応が構成されている（ただし、「肯定の条件下における、帰結としての不可能」という点で、条件句が否定を伴う「なし得る」の呼応とは異なる）。

「本来ならば」（条件）－「あるはずがない」（帰結）

「通常状況下では」（条件）－「起こるはずがなかった」（帰結）

このことは、「可能」という意味のありかたそのものにまつわる本質的な構造に関わることとして説明される。森山（2002）は、「あり得る」「起こり得る」などの「～得る」について、以下のように分析している。

(14) 「～得る」も、本来「可能」を表すものが、「可能性」を表すようになったと言えそうである。この共通義としては、当該事態が潜在的に存在するということがあると言える。すなわち、「ある事態が成立しないとは言えない（場合によっては成立することもある）」という表示が「可能性」であるが、「潜在可能」は、「動作主にとってある事態が成立するための能力や状況があり、必要な場合にはその事態が成立する（不可能の場合には必要なのに成立しない）」という意味であり、この両者には連続性がある（可能が述語レベルなのに対し可能性は事態レベルという違いはある）。さらに、いわゆる「実現可能」は、その潜在的な成立可能性が実際に実現するという意味にスライドした意味となっていて、「動作主にとってある事態の成立が必要であり、かつ、能力や状況といった外的条件が関わるために成立するかどうかわからないなかで、実際に成立する」という意味になっている。つまり、「潜在可能」を中央に位置づければ、実際の成立を見る点では「実現可能」へと連続するのだが、一方で、広義の事態成立条件への言及をなくし、事態を全体として問題にするならば「可能性」へと意味拡張しているのである。

この記述を、いま私に^{わたくし}整理して表にするなら、(15)のようになろう。最上段に示した「可能性」の表現は、森山（2002）が言うとおりの、通常は「広義の事態成立条件への言及をなくし」（このため表の左側2つは空欄「－」となる）、「事態を全体として問題に」した上で「あり得る」か「あり得ない」かを述べるものである。しかし先に述べた、特殊な条件下で出来た異常な事態に対しては、それが通常の可能性に反して実現済みである以上、事態成立の可能性に関わる背景的な部分に言及せざるを得ない。それが、「あり得ない」の前に「本来ならば……」「通常の状況下では……」と置かれる（はずの）条件句部分であり、その前置きを欠いて用いられる「あり得ないことが起こってしまった！」「あり得ない頼みごと（をしてくる相手の厚かましさに、腹が立った）」「なにそれ。あり得ないよ」などの用法から、「信じがたい・あってはならない」の含意を介して「受け入れがたい」「許容したくない」「拒絶したい」という新たな語義が成立したと考えられる。

(15)

	ある事態が成立するための能力や状況	成立の必要	事態の成立
可能性	－（不問）	－（不問）	「成立しないとは言えない」 ＝場合によっては○（有）
潜在可能	○（有）	○（有）	○（有） ※ ここ↑が×（無）だと「不可能」
実現可能	？（不明）	○（有）	○（有）

本稿が問題とする「なし得る／なし得ない」（可能性～潜在系可能）や「なし得た／なし得なかった」（実現系可能）についても、いま述べた「あり得る／あり得ない」同様、語義のズレや誤解の背景として、条件句の欠落という契機を想定することは可能であろう。

とりわけ、特段の条件下において行為の実現がかなった、という実現済みの事態について述べる場合（完了の「た」が伴われるもの）には、事態成立の要因である「特段の条件」の明示を伴う〈「～によって」「～からこそ」－「なし得た」〉という〈条件－帰結〉の構造^{*19}とそれに基づく共起関係が生じることになり、「少納言」経由で検索した BCCWJ の用例にも、それは見いだせる（新たな語義を生じていないと見られる年代・世代の例^{*20}を以下に示す）。(18)は、(16)(17)とは逆に、特段の条件下においてかなわなかった場合である。

この条件句(16)「～の故に、」(17)「～により、」等を落としたかたちで、つまり後半部分の「なし得た」のみがこぼした表現として印象に残り、文脈から「なしとげた」の意に解釈され直したものが、新たな用法の発端となった、と考えられるのではないか。

(16) 中宗は必ずしも立派な皇帝とはいえないが、あの太宗ですら、さまざまな欠点があり、それでいながら、直言を喜ぶという度量の広さの故に、あの「貞観の治」をなし得たのだということを示し、中宗にもそのようであってほしいという願いが込められていたのである。（『貞観政要』の読み方^{*21}』日本経済新聞社、2001年）

(17) わが国は、国民の英知と努力の結集により、経済力の増大は言うまでもなく、国民生活の面でも大きな向上をなし得ました。また、社会保障の面におきましても、医療保険、年金保険制度を初め、いずれも西欧先進諸国に比して遜色のない水準に達しております。（国会会議録 第91回国会、1980年 野呂国務大臣の発言）

(18) といふのは、國の危機を察知し、その原因を知り、對策を考へるものなら、如何に、「新論」が必要かといふことを十分に了解してゐるのであります。しかしその危機を痛感しつつも「新論」の如き言論機關を創設するといふことともなれば、その構想と計畫の大きさのために、誰一人としてこれをなし得なかつたのであります。

（『保田与重郎^{*22}全集』別巻1 講談社、1989年）

「なしとげる」が偉業やそれに近い行為について述べる動詞である以上、それと同義に解釈された段階で、相応の努力や苦勞などといった文脈的背景が含意されるのは十分考えられることであるが、「なし得る」はまた、行為の実現について最大の可能性を有する主格を示した上で、それでも不可能であったと述べる類型を持つ。その場合、次に示す例のように、その行為は(19)「天皇家の外戚になる」ことや(20)「禁欲的倫理の復活」など、決して卑小なものではない。このあたりの用法は、「なし得る」が新たに獲得した「偉業の達成」という意味へつながっていると見られる。

- (19) 平清盛の故事に倣って、信長も秀吉もなし得なかった天皇家の外戚になることを、徳川氏が果たしたかったのだと思う。

(田中澄江 著『人物日本の女性史』第5巻 集英社、1977)

- (20) この二〇年間、古い価値の擁護者、宗教関係者、道徳論者が全力をもってしてもなし得なかった禁欲的倫理の復活を、エイズは短期間にもたらしたのである。

(ホーン川嶋瑤子 著『女たちが変えるアメリカ』岩波書店、1988)

4. 「なし得た」を誤解した人たち

「あり得る」「なし得る」をはじめとする「～得る」全般に縁のない非教養層・若年層に属する日本語の使用者によって、前節に述べたような経緯で語義の新解釈（誤解）が成立したとするなら、構文上の重要な要素である条件句を脱落することを許容する、さらなる事情が考察されなければなるまい。

構文全体への厳密な意識が保持されれば脱落は起こりにくいはずであるが、「なし得る」を新たな意味で用いた例をつぶさに検討すると、そもそも文面全体が相当ゆるやかな規範意識に従ってなされたものであるのに気付かれる。

言うまでもなく、インターネット上で行われる日本語表現は、オンライン公開された学術資料や報道などの分野における情報^{*23}を除いては、刊行物などの活字資料に見られる、旧来の規範に従った日本語表現とは、位相を大きく異にする。(1)を例として具体的な指標を示すなら、三点リーダー1つ分をナカグロ3つで代用する習慣や、文中での頻繁な改行による「ポエム」ふうの表示（文末ごとにダブル改行コードを挿入して段落を改める）など、ある層に特有の典型的な流儀（ケータイ小説などではそれが主流）である。

こういった表層的な表記の次元に観察される特徴と、その書き手の日本語の運用能力とに、どこまで関連性を見いだすかについては、なお十全な検討が待たれよう。しかし少なくとも引用冒頭における非文めいた構文のねじれ^{*24}に見られるように、(1)は一定以上の鍛錬を経た書き手や校正者により意識的に推敲された「整った」日本語文とは隔たりの感じられるものである。同様のことは、限定の助詞が「だけ」「しか」と重複する(6)「その人だけにしか成し得ない卓越したこと」や、(7)にも言えよう。(7)において「冬の空気」が「(突き刺さる陽射しと共に) 教えてくれ」るものが「気高く生きたい。気高く歩みたい。」というモダリティ形式を伴った自身の願望である、という微妙な不整合、あるいはコラムの末尾に引用される自作の詩が「一句」と数えられること^{*25}など、旧来の規範を厳格に適用すれば気になりだしてやまない細部の一々から、これらの日本語表現が踏まえる規範意識の大らかさ、あるいは書き手の日本語運用の（水準的）実情が看取される。こういった

ありようが、構文における文法的な整合性を求めず、先に推定したように条件句を欠落させ、後半部分の「なし得た」のみを切り取って使うようになる動向へ荷担している、と考えるのは、十分に肯われる話であろう。

最後になお付け加えることとして、「なし得る」の新用法の蔓延と、社会の「ポエム化」との関連について、さらなる注記を残したい。

小田嶋（2013）は、報道や行政などあらゆる分野において進行しつつある「ポエム化」（注 12 参照）を、「ある場面には説明放棄であり、別の場面では、幼児退行ということでもある」と捉えて、強い危惧を表明している（第 1 部第 2 章「ポエム化する日本」）。また、この指摘を受けて、NHK 総合テレビの時事問題を取り上げる番組でも「社会のポエム化」に関する特集が組まれて、話題となった（「クローズアップ現代」2014 年 1 月 14 日放送^{*26}）。

小田嶋（2013）の定義によれば、「ポエム」とは「詩になりそこねた何か」「詩の残骸」ではあるが、本来「詩」が内包する「情報を伝達するための言葉ではない」という特性、つまり散文における言語の論理性と対比されるありようを、その特徴としている。(7)が、コラムの終盤に自作の詩を「唐突に」掲げたり、詩の部分以外においても小田嶋（2013）の言う「猛烈にエモーショナルな」「感情過多」の「ポエム」（ただし「詩ではない何か」）ふうの文面を持つのは、自ら「心深き詩を贈ることで人の心を癒し、自分と向き合うことを支援する情熱の詩人カウンセラー」を名乗る^{*27}、すなわち小田嶋（2013）の言う「ポエマー」（poem + -er の構造による和製英語）であることとの関連において理解されるが、そういった細部に実現するようなある種の超論理（もしくは脱理論）性が、「ポエム」の特徴のひとつであり、その「ポエム」なるジャンルにおいて、「なし得る」「なし得た」が先に見たとおり激励や鼓舞のキーワードとして好まれ多用される現状は、言語変化の遠因とも関連付けられる背景的事実として、やはり特筆に値すると言えよう。

おわりに

本稿では、「何事かをなし得た人」なる表現への違和感に端を発しつつ、「なし得る」の新たな意味用法が、位相を限定しながらも広がりつつある実態について記述し、その変化の背景や経緯などについて考察を試みた。「なし得る」における「～得る」は、可能の意味を失って、完遂や達成を表すものと理解されはじめている。位相を限るという点ではこれを一般的な変化とすることは出来ず、いまだ変化の完了を見ないものではあるが、長い日本語史の一局面における変化の兆候として記述することは出来よう。「あり得る」の変化とあわせて〈動詞連用形＋得る〉という表現様式の変容を捉える本稿の記述は、可能表現の大局的な変遷史の一角に位置付けられるはずである。

冒頭に前置きとして述べたとおり、規範性の確かな資料には実例が求めづらいことから、

本稿では、インターネット上の使用実態やコーパスから得られた用例を積極的に用いたが、可能な限り、用例の使用者のプロフィールや表現が行われた時期を確認して明示に努めた。また、当該部分以外の文面に見える位相的な特徴にも十分な注意を払おうと努めた。ことばの側に求められる（本質的な特性や論理的な構造に即して解明されるべき）言語変化の契機とはまた別に、ことばを運用する側の問題に属する（規範意識や運用スタイルの）問題、あるいは変化が起こる時期の時代的特性（世相・社会風潮）などといったことが、変化の背景や経緯として記述できるのは、同時代においてなされる研究ならではの利点である、と考えるからである。全ては、本プロジェクトの総括を兼ねつつ、今後のさまざまな「新語・新用法」研究に向けた覚え書きとしたい。

*1 一例を示せば、上一段活用動詞における五段化の動向など。少なくとも「用いる」の語については、五段動詞化は相当進行しているものと見られる（具体例等については【補注】を参照）。

また、「報いる」を五段に活用させた例として、新しいところで以下のようなものがある。

(21) マルクス／レーニン以降の経済学／社会主義思想を学んだ彼は、日本という国家の構造が許せなくなり、権力の手先である警察に一矢報いるうとするのである。

（音楽雑誌『レコード・コレクターズ』2014年2月号、p.99。2014.1.15 発売）

この評論記事の書き手である和久井光司は 1958 年生まれ。稿者が機会を得て直接本人に確認できたところでは、いわゆるうっかりミスか誤植に近い例に当たるもののようであるが、校正の段階でも気付かれず見落とされたい。掲載誌は、1969 年創刊の『ミュージック・マガジン』の別冊として 1982 年から刊行され、爾来 30 余年の実績を積む、当該分野では権威と信用のある刊行物であるが、編集部による点検（4 人がかりで入念に行う由）をもすり抜けて五段化した語形が活字になったことは、この語形に対する今日的な違和感の希薄さを反映している。「用いる」「報いる」の 2 語が、口頭では行われなくなっている文章語的・雅語的な語彙であること（「用いる」よりは「使う」が、「報いる」よりは「応える」「リベンジする」などの語が、今日ではより日常的な表現である）も、少なからず影響していると見られよう。

*2 BCCWJ から得られた、位相的な特殊性を有する用例、なかんずく孤例に近いものを取り上げ、そのみを根拠として論の根幹に関わる解釈や仮説を示そうとする共時論的研究を見かけたこともあるが、データの「均衡」性と「均質」性（両者は正反対のものである）を取り違えた事例であろう。さまざまな種類の資料に見られるさまざまな日本語をバランス良く（balanced な状態で）コーパスに収めるのは、「位相の異なり」に応じた「ことばのふるまいの異なり」を観察するためであって、出典の位相性は無頓着なまま得られた全ての用例を等しく扱うことは、危険である。特に、コーパスの均衡性ゆえ排除されずデータに含まれる質的・量的アノマリーに対する扱いの留意点については、balanced corpus（均衡コーパス）利用の基礎的な知識としてもう少し共有されてよいのでは、と思われる。

- *3 公開されたプロフィールによれば 1985 年生まれとのこと。
- *4 早く万葉集に仮名書きの確例が見られる〈動詞連用形+得^う〉は、「少なくとも中古から中世まで、様々な動詞に後接して可能その他の意味を広範囲に表していた」（渋谷 1993a）が、近世以降に文章語化しつつ意味領域を縮小した。近世後期の江戸語ではなお滑稽本などの会話中にもまれに使用が見られるものの、他の可能形式に取って代わられるように口語においては衰退した（渋谷 1993b）。明治初頭には、すでに文語文で行われる表現となつて、口語（口頭語）的なものではなくなっていた（渋谷（1993b）、小椋・小木曾・近藤（2002）、小木曾（2012）の各調査による）。渋谷（1993b）では、「補助動詞ウル・エルは、現在では口頭語からはほぼ姿を消し、文章語として用いられる程度にすぎない」とされている。なお、渋谷（1993a）は、中古から中世までの使用において「可能の用例には、実現系の可能を表しているものが多い」ことを明らかにし、現代語における「蓋然性」の意を表す用法を「明治期に新たに生じたか」としている。（仁田（1981）によれば、「可能性」は「蓋然性」に比べて「客体性、素材性が高く、作用性や陳述性が低い」もの、とされている。）
- *5 「～得る」の読みとしても、ウルとエルの両様がお併存するが、一段化しない語形で「言いウル」「探しウル」と読めば、「言いエル」「探しエル」と読む以上に、輪を掛けてこぼしたものの言いとなろう。
- *6 そのうち 35 件が、「文学は（化学は／学校は）何をなし得るか」のような問題提起のスタイルを取るものであった。
- *7 そのうち 17 件は、医学分野での臨床報告の類である。
- *8 公開日等については記載がないため不明であるが、通信研修講座の初回が 2013 年 1 月 9 日であることから判断した。
- *9 書き手の佐藤由明は、公開されたプロフィールによれば、1981 年生まれの産業カウンセラー・心理相談員とのことである（http://www.proseek.co.jp/pb/contents/column/s_profile.html）。
- *10 当該コラムそのものに更新日などの記載は一切ないが、書き手の個人サイトにおける「最近の活動」欄（トップページ）に、このコラムの更新を日付入りで告知する記述があったのを確認した（<http://satoyoshiaki.com/>）。
- *11 格言やことわざなどにおける文語調のもの言いが、印象としての格調の高さと連動して、ビジネスの現場においても説得力やありがたみを持つらしいことは、いわゆる「意識の高い」系の起業家が著名人の名言や古今東西の格言などを引用するのを好む傾向とあわせて理解される。もちろん、そのような名言や格言をたくさん知っていて、場面に応じて口にのぼすことじたいが、当人の人間的な価値や評価にも関わる、という考えが強いこと（敬語の種類にたとえば「美化語」的効果とでも呼べる効能に対する意識）にも、あわせて注意される。
- *12 小田嶋（2013）は、一見、文芸ジャンルとしての「詩」に似た様式を備え「受け手の感情を煽る狙いを持って」発せられる「エモーショナルな」「感情過多」の言語表現を、「ポエム」（あるいは「ぼえむ」）と呼び、それが報道や行政など「本来なら硬質の文体を持ちこたえていてしかるべきテキスト」にまで及びつつある現状を「ポエム化」と捉え論じている。

- *13 必ずしも「卓越した」偉業でなくてもよいという譲歩的な目標設定、自分なりのささやかな達成でよいのだとする目標の矮小化などを含む点で、ある種の「慰撫」めいたメッセージとなっている、との分析が可能である。
- *14 作詞者の Naoki Takada (SEAMO) は、公開されているプロフィールによれば 1975 年生まれ。
- *15 作詞者の HIDEITA は、公開されているプロフィールによれば 1975 年生まれ。
- *16 作詞者の Miliyah (加藤ミリヤ) は、公開されているプロフィールによれば 1988 年生まれ。
- *17 作詞者の桜井和寿は、公開されているプロフィールによれば 1970 年生まれ。
- *18 国立国語研究所の「Web データに基づく複合動詞用例データベース/日本語複合動詞リスト」に収められている語も、「なし遂げる」「なし崩す」の 2 語のみ (2014 年 1 月末現在)。なお、「なし崩す」の前項「済す」は、厳密には「成す」とは別語である。
- *19 これが二重否定の姿を取れば〈「～なしには」「～なければ」－「なし得ない」「なし得なかった」〉となり、先の (12) (13) がこれに該当する。この二重否定の構造を取る場合の用法が「なしとげる」への誤解と転義にあまり関与しなかったのではないかと考えられることは、先に示したとおり。
- *20 使用された時期 (1980 年代のもの)、あるいは使用者の世代 ((注 21) (注 22) を参照) を基準として判断した。
- *21 BCCWJ における当該部分の実著者情報は、山本七平・1920 年生まれとなっている。
- *22 BCCWJ における当該部分の実著者情報は、保田与重郎・1910 年生まれとなっている。
- *23 これらの分野のものについては、インターネット上での公開は、既存の媒体に対する代替手段として選択的に取られた情報伝達方法のひとつに過ぎず、そこで使用される日本語表現に、刊行物などとの位相的な同一性は保たれている。
- *24 「～たり」でつながられた一文中に、主文の主語「人は…」と重複する主格表示「人が」が出現する構造 (または、「人は」に対応する述語動詞「求めたり」と、これに呼応しない「いる」との並列)。
- *25 伝統的な規範にのっとりなら、詩を数える単位は「一編」である。
- *26 平易で取っつきやすいが曖昧で具体性を欠いたキャッチフレーズ、あるいは歯が浮くような甘く優しいことばによる過剰な鼓舞や慰撫の風潮が世間に氾濫している現状は、小田嶋 (2013) の言う社会の「ボエム化」に当たる。商用の宣伝のための広告表現はさておいて、違法紛いの過重労働を強いる企業が社員に向けて示す、あるいは増税を訴える自治体が市民に向けて発するスローガンの類に「ボエム化」が見られることは、労働条件や政策における不条理などの問題を見えづらくする点で危険である、との趣旨で「問題視」されていた。
- *27 公開されたプロフィール (注 9 参照) の記述による。

【補注】稿者が動詞「用いる」の五段化という動向に気付いたのは、ゼミ生の卒論指導を通じてであるが、提出させた卒業論文の草稿に「これこれの文脈では〇〇の語を用いらず、××を用いり…」 「これこれの意味では用いらない。」などと書いてくるゼミ生が現れはじめたのは、現在の勤務先に赴任した 2006 年以降、特にここ数年のことである。前任校で見かけなかったのは、学生の学力水準の問題もあろうが、時期的なことも関係するかもしれない。インターネット上のブログや質問掲示板等に見られる、この問題に関する記述のうち早いものも、おおよそその時期が一致する（以下は一例。(22) (23) は個人発信のブログ、(24) は質問掲示板に、それぞれ見えるもの）。

(22) 質問：「用いらない」って使いませんか？ (2005.12.5)

<http://blogs.yahoo.co.jp/teijisei2005/archive/2005/12/13>

(23) 今日も、「用いる」は五段活用に「用いります」って用いらないんですか？ (2008.5.28)

<http://jl-seminar.cocolog-nifty.com/blog/2008/05/>

(24) 日本語の質問です。「用い」と「用いり」の違いを教えてください (2012.7.18)

http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1090893250

参考文献

小木曾智信 (2012) 明治期国定『高等小学読本』の可能表現形式 (成蹊国文 45)

小椋秀樹・小木曾智信・近藤明日子 (2002)

「太陽コーパス」を使った近代語表現の通時的研究 ―口語文体・可能表現・待遇表現について― (国語学会 2002 年度春季大会予稿集)

小田嶋 隆 (2013) 『ポエムに万歳！』 (新潮社)

渋谷 勝己 (1993a) 意味の縮小と文体差 ―可能の補助動詞エルをめぐって― (『近代語研究第九集』武蔵野書院)

渋谷 勝己 (1993b) 日本語可能表現の諸相と発展 (大阪大学文学部紀要 33-1)

仁田 義雄 (1981) 可能性・蓋然性を表す疑似ムード (国語と国文学 58-5)

橋本 行洋 (1990) “けがる、けがす”と“よごる、よごす”：文体差から意味差へ (待兼山論叢 文学篇 25)

森山 卓郎 (2002) 可能性とその周辺 ―「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の迂言的表現と「かもしれない」― (日本語学 21-02)

※ J-POP の歌詞本文については、歌詞検索サービス「歌詞 GET」 (<http://www.kget.jp/>)

ならびに「うたまっぷ」 (<http://www.utamap.com/indexkasi.html>) を利用した。

漢語形容動詞・副詞の品詞性と用法変化 —通時的観点からみた近現代の特徴—

鳴海 伸一

1. はじめに

漢語は、日本語の中で様々な品詞で使われる。それらの用法の中には、通時的に変化してきたものも少なからずある。特に、形容動詞・副詞として使用される漢語には、他品詞から転成したものや、用法に変化のあるものが多い。

そして、通時的な変化は、全く個々別々に変化するのではなく、変化に一定のまとまった方向性があると考えられる。また、時代によって、変化の方向性やその傾向に特徴がある可能性も考えられる。

そこで本稿では、漢語の形容動詞・副詞をとりあげ、通時的な出現と継承の動向を捉え、どのように新語・新用法が発生し、変化してきたかを考察する。その上で、近現代に起こっている変化の具体例を示し、それらが歴史的な変化のあり方の中でどのように位置づけられるかを考察する。

まず2節では漢語の受容史とそこでの形容動詞・副詞の位置付けを概観する。続く3節では現代語における漢語形容動詞・副詞の用法を、品詞性に着目して論じる。それを踏まえ4節では、副詞を中心に形容動詞的用法との関わりも視野に入れながら、通時的な変化の方向性を考察する。4-1では、通時的観点から漢語単独の副詞用法の位置付けを論じ、4-2・4-3ではそれぞれ「程度副詞化」「注釈副詞化」した副詞をとりあげ、漢語単独用法の発生に注目して、近現代の位置付けを考察する。

2. 漢語の受容と形容動詞・副詞

中国大陆で使用され、漢字表記される語である漢語は、古くから日本語の中に大量に受け入れられ、日本語の語彙・文法体系の中に広く浸透していった。さらに、それとともに、それぞれの漢語の意味・用法もさまざまに変化・変遷を経てきた。本節では、漢語が日本語の中に受け入れられ、用法を広げたり変化させたりしていくことと、そうした中での、形容動詞・副詞の特徴を述べる。

漢語を受容するということは、日本語の中に、別の言語体系である中国語の語彙を受け入れるということである。しかも、長年月にわたって、大量にかつ体系的に受け入れてきている。そこには、日本語内への漢語の体系的な浸透の過程があり、また一方では、和語にはない漢語特有の性格・性質を利用した語彙の再生産の過程があるともいえる。また、発音の面からみても、中国語の発音と全く同じ発音を日本語の音韻・音声体系の中ですることはできないので、受け入れ側の日本語の体系に合わせて、それに近い音で代用したり、音を挿入・削除するなどして規則的な改変を加えて使用することになる。また、外来の思

想・概念をそのままの意味で使用することはできなくても、日本人にも、あるいは日本語の中でも理解できるような意味に近づけて受け入れるということも起こる。あるいは、一旦外来の思想をそのまままたはそれに近い形で受け入れたあとで、より日本語の中で使いやすい意味に変えて使用していくということもおこると考えられる。

さて、そもそも漢語はどのような用法で受容されはじめたのだろうか。漢語受容に際しては、もっとも取り入れやすいものは体言的なものであろう。そのような概念・思想を表す体言的なものをいわば生の外来語として受け入れたのが初めであると考えられる。しかし、漢語というものに馴染み、漢語の受容・使用に習熟していくと、日本語の体系に合わせて動詞・形容動詞などの用言的な使用ができるような仕組みを作り出すということがおこる。また、従来からあった和語と混ざって新たな語を作り出すということも行なわれるようになる。

ここまで述べてきたような、漢語の受容について、「漢語の国語化（日本語化）」という用語で説明されることが従来からある。大きく言えば、漢語を日本語の中に取り入れ、それらが日本語の語彙・音韻体系の中に馴染み、同化することや、馴染み同化していく過程をさすものと考えられる。このように漢語が用法を拡大していく点は、趙英姫（2002）が「和語語基より文のいろんな成分に自由に転成できる漢語語基の性質」と述べるように、漢語に特有の特徴と考えられる。

その中で、形容動詞として使用されるものというのは、漢語に「なり」「たり」を付して、ナリ・タリ活用形容動詞とするものである。副詞として使用されるものというのは、漢語に「に」「と」などを付した形のものや、何もつかず漢語単独で副詞とするものである。「に」「と」を付して副詞として使用される漢語副詞は、それらがナリ・タリ活用形容動詞の連用形と同形であることから、漢語形容動詞と関連させて考える必要があるといえる。

しかし、「に」等のつかない、漢語単独の形で副詞用法を持つものは、形容動詞のように接辞を付して規則的に語形を作り出せるものとは若干異質である。確かに、形容動詞連用形語尾の「に」を付して「漢語＋に」の形にしたものは連用修飾用法を持つ。したがって、漢語ナリ・タリ活用形容動詞として使用されるものは、理論上は、「漢語＋に」の連用修飾用法をもつことになる。しかしその場合でも、のちに「に」が取れて漢語単独で副詞用法を獲得するに至るものや、「に」の付いた形のままでありながら、漢語の原義から離れて一語の副詞として発展する場合がある。そのようなものは、「漢語＋に」という形で一語の副詞としてより熟したものになっていると考えられる。

なお、そのような副詞用法に注目して述べたものに、前田富祺（1983）がある。前田は「漢語副詞は漢語の国語化の現象の一つとして考えられる」とし、時代ごとに漢語副詞を列举している。しかしこれは、網羅的かつ大局的な研究であり、それぞれの漢語の用法変化と、その時代ごとの傾向などの点で、さらなる考察の余地がある。そこで、4 節で漢語単独用法の発生に注目して通時的な考察を行うために、次の3 節では、現代語をもとに漢語形容動詞・副詞の用法を、整理する。

3. 現代日本語における漢語形容動詞・副詞

本節では、現代日本語における漢語形容動詞・副詞の代表的な語例を挙げ、どのような用法を持っているか、その品詞性を整理する。

3-1. 漢語形容動詞・副詞の種類

現代日本語の漢語には、形容動詞や副詞として使用されるものがある。以下のようなものがその例として挙げられる^{注1}。

- ・形容動詞…安全、意外、快適、確実、格好、可能、完全、簡単、共通、強力、綺麗、経済、元気、健康、豪華、高級、最高、最適、残念、自由、主要、重要、詳細、上手、新鮮、心配、正確、大事、大切、同様、独自、特殊、拔群、反対、非常、必要、不安、不思議、不足、不要、便利、豊富、満足、無理、有限、有効、有名
- ・副詞 …以上、一番、一切、一体、一杯、結局、事実、自体、実際、少々、絶対、是非、全然、全体、丁度、直接、通常、徹底、突然、不断、普段、本来
- ・形容動詞／副詞両用法を持つもの

…結構、自然、十分、相当、大丈夫、大変、当然、特別、普通、本当
形容動詞は、「意外な」「同様の」「快適なる」「格好たる」のように、「な」「の」や「なる」「たる」を付して連体修飾用法となったり、「重要だ」「新鮮だ」のように、「だ」を付して述語用法となったり、「確実に」「元気で」のように、「に」「で」を付して連用修飾用法となるものである。それぞれの用法を複数併せ持つ語もある。

副詞は、「全然」「突然」のように漢語単独で、または「絶対に」「自然と」のように、「に」「と」を付して連用修飾用法となるものである。「突然（に）」「絶対（に）」のようなものは、漢語単独でも、「に」を付した形でも使用されるものである。そのほか、「少々は」「当然にも」「突然ながら」のように、「は」「にも」「ながら」を付す用法を持つものもある。また、これらの中には、「一切の」「通常の」のように、「の」を付して連体修飾用法となったり、「事実だ」「普通です」のように、「だ」「です」を付して述語用法となるものもある。そしてこれらの用法を複数併せ持つものもある。

3-2. 品詞性の考察

こういった、漢語の形容動詞・副詞には、その文法的性質、特に品詞性に関する先行研究がある。それらには、形容動詞・副詞を含めたさまざまな品詞で使われている漢語というものが、日本語の中でどのように位置づけられるかということを論じたものや、漢語の品詞性に関わる事象を取り上げ通時的な変化を論じたもの、漢語の用法に関わる事象を取り上げて共時的な視点から諸種の資料・文献を用いて使用傾向をまとめたものや、意味・用法の違いを論じたもの、また、日本語教育の観点から、学習者の誤用例を取り上げるなどして日本語における漢語の用法・品詞性を論じたもの、などがある。

それらを踏まえて、以下では、形容動詞、副詞のそれぞれの品詞性を考察する。まず、形容動詞、副詞が、どのような形態で使用されるかということ进行分类し、それぞれの用法の特徴、用法間の共通点・相違点を考察するという形をとる。

形容動詞の用法は、漢語形容動詞語幹の後に、「な」「の」「だ」「に」といったどのような形式が付くかということによって、次のように、①連体修飾用法・②述語用法・③連用修飾用法の3種類に分けられる。

①「な」「の」を付して連体修飾用法となる

②「だ」を付して述語用法となる

③「に」を付して連用修飾用法となる

それぞれの用法には、どのような語例があるか。前項に挙げたものから例示すると、以下のようになる。

① 安全、意外、快適、確実、格好、可能、完全、簡単、共通、強力、綺麗、結構、元気、健康、豪華、高級、最高、最適、残念、自然、自由、主要、十分、重要、詳細、上手、新鮮、心配、正確、相当、大事、大丈夫、大切、大変、当然、同様、独自、特殊、特別、拔群、反対、必要、不安、不思議、不足、普通、不要、便利、豊富、本当、満足、無理、有限、有効、有名

② 安全、意外、快適、確実、格好、可能、完全、簡単、綺麗、共通、強力、結構、元気、健康、豪華、高級、最高、最適、残念、自然、自由、主要、十分、重要、詳細、上手、新鮮、心配、正確、相当、大事、大丈夫、大切、大変、当然、同様、独自、特殊、特別、拔群、反対、必要、不安、不思議、不足、普通、不要、便利、豊富、本当、満足、無理、有効、有限、有名

③ 安全、意外、快適、確実、完全、簡単、綺麗、共通、強力、経済、結構、元気、健康、豪華、最高、最適、自然、自由、十分、詳細、上手、正確、相当、大事、大切、大変、当然、同様、独自、特別、拔群、反対、非常、不思議、普通、豊富、本当、満足、無理、有効

このうち、①に分類したものについては、さらに、「な」「の」のいずれが付くかによって分けることが可能であるように思われる。つまり、①の語すべてに、「な」「の」の両方が付きうるわけではないのである。例えば、「意外」「重要」などは現代共通語においては通常「な」は付くが「の」は付かない。「同様」「詳細」などは「な」「の」いずれも付く。「不足」は「の」は付くのに対して、「な」は不可能ではないまでも不自然である。「な／の」選択については田野村忠温（2002）やスワン彰子（1994）などの研究もある。「な」が付くか「の」が付くか、「な」「の」両方が付くかということには、それらが指摘するような、両者の意味上の違いの他に、時代差、文体差、位相差、といったものがあり得ると考えられる。さらに「な／の」選択の判定には個人差もあるであろう。しかし、ここで挙げたような、基本的な漢語においては、「な」の付くものが大勢を占めるといってよいであろう。

①の連体修飾用法を持つものの中には、「重要 - (事項／案件／書類／性)」「自由 - (主義／貿易／行動／型)」といったように、合成語を作る前要素・語基として使用される形式となるものも多く存在する。こういった場合も、後接する他の語基や接辞に対して連体修飾的に機能しているといえる。さらに、「健康的 (な)」「共通的 (な)」といったように、「的」を付した形でも連体修飾用法となるものがある。

また、①の連体修飾用法と②の述語用法を持つものが漢語形容動詞の大半を占める。①②の用法を持つことが、漢語形容動詞にとって最も基本的な性質といえる。それに比べると、③の用法を持つものはやや少なくなる。③の用法を持たないものは、次に挙げるようなものである。

重要、新鮮、残念、可能、主要、特殊、必要、不安、不足、不要、便利、有限、有名、心配、高級、格好

これらは、①・②の用法を持つが、③の連用修飾用法を持たないものである。

なお、「非常」は「非常事態」などといった合成語を作る表現を除くと、「非常に」という形の程度副詞としての連用修飾用法が主であり、①連体修飾用法や②述語用法は一般的には持たないと思われる。「非常な努力」などといった表現が皆無ではないにしても、使用頻度という点で落ちるとと思われる。「経済」に関しても、①②の用法にあたる「経済な」「経済の」「経済だ」といった表現は、「経済的」に比べ、現代共通語ではあまり使われないものと思われる。こういった問題は、前述したように、時代差、文体差、位相差、個人差といったものがあり得ると考えられる。

また、形容動詞用法をもつ漢語には、名詞としての用法を兼ね有するものがある。例えば、「安全が最も大事」「健康を目指す」「自由が欲しい」などのようなものである。このような名詞的な使用について、村木新次郎 (2004) は、名詞的に使用されるような漢語には、表現上一定の制限があるとし、ある属性に対する、精神的な活動・言語活動・態度・程度に関わる動詞と結びつく場合に限られるとする。また、名詞の他に、形容動詞用法を持つ漢語には、「金額が不足する」「性質が共通する」「待遇に満足する」といったように、「する」を付した動詞としての用法を兼ね有するものもある。このように、同一の語が、複数の品詞にまたがって使用される事例が多いというのは、村木の指摘するように、漢語の持つ特徴といえる。

次に、副詞の用法には次のようなものがあると考えられる。こういった形式が後接するか、あるいは何も後接しないかによって4つに分類したが、いずれも連用修飾用法である。

- ① 漢語単独のもの
- ② 「に」を付すもの
- ③ 「と」を付すもの
- ④ 「は」「にも」「ながら」を付すもの

それぞれの語例には、どのようなものがあるか。ここでも、前項に挙げたものから例示すると、以下のようなものが挙げられる。

- ① 一番、一切、一体、一杯、結局、結構、事実、自然、実際、十分、少々、是非、絶対、全然、全体、相当、大変、丁度、直接、通常、当然、特別、突然、普段、普通、本当、本来
- ② 一杯、自然、実際、十分、是非、絶対、相当、大変、直接、当然、特別、突然、不断、普通、本当
- ③ 自然
- ④ 結局、実際、十分、少々、是非、通常、直接、当然、特別、突然、普段、普通、本当、本来

これらを見ると、①の漢語単独で連用修飾用法となるものが最も多い。②③④のように、「に」などの付くものよりも、漢語単独のものが、基本的な漢語に多いということがわかる。

「と」の付くものは「自然」のみであったが、「自然」は単独でも、「に」の付いた形でも使用され、意味・用法が必ずしも全同ではない。例えば、「怪我が自然に治る」「大人になれば自然とわかる」などの、「に」や「と」の付いたものは、〈ひとりでに、ほうっておいても〉といった意味であるが、それに対して、「証拠を突き合わせると、自然彼が犯人だとわかる」のように漢語単独で連用修飾用法で使用された場合には、〈当然のなりゆきとして〉といった意味になる。

このように、副詞の場合、「に」などの助詞が付くかどうか、あるいは何が付くかによって、意味・用法が異なるという場合がある。一般的に言って、漢語単独でも使用されるものは、より副詞として熟したものとすることができ、それらに「に」の付いたものは、その漢語のもともとの意味を残している、と考えられる。また、それに関連して、永澤済(2011)は、副詞の文法的・意味的变化について、同様の变化は和語や他言語にもみられるものであるが、漢語副詞に特徴的なのは、漢字の字義通りの意味から離れる方向に変化する点であり、そのことは、漢語が漢字という基盤への依存度を弱め、日本語の中に溶け込んだことの現れと見るができるとする。

また、これらの漢語副詞の中には、「の」を付して連体修飾用法となるものがある。次に挙げるようなものである。

突然、少々、以上、一切、通常、実際、絶対、直接、本来、一杯、不断、普段、一番、特別、十分、相当、当然、普通、本当

さらに、「だ」「です」を付して述語用法となるものもある。次に挙げるようなものである。

全然、突然、少々、丁度、事実、絶対、本来、一杯、一番、特別、十分、相当、当然、普通、結構、本当、自然

ただし、そのような連体修飾用法や述語用法で使用されることはあっても、そのような場合に、もとの副詞とは多かれ少なかれ意味が異なる場合がある。連体修飾用法や述語用法となるということは、それだけ形容動詞的性質に近付いているともいえ、また、それぞれの用法の有無の判定には個人差があると思われる。

4. 漢語副詞の用法

4-1. 単独用法発生についての一考察

前節で述べたように、漢語副詞の中には、「に」「と」などの助辞の付いた形で用いられるものが少なからずある。それらをそれぞれ「ニ型」「ト型」とし、そういった助辞の付かない漢語単独で用いられるものを「 ϕ 型」とする。すると、これまでの調査で、 ϕ 型とニ型の用法を併有するパターンが、その中でも最も多いようであるということが分かっている。さらに、その「に」「と」などのつく漢語副詞や副詞一般に関する歴史の変遷のパターンが、いくつか先行研究で提示されている。そこで本節では、漢語が単独で使用されているか、「に」「と」などが付いた形で使用されているか、といった観点から、通時的に変遷を見、先行研究における指摘等を検証しながら、その歴史的な消長を捉える。

漢語副詞の大まかな変遷、通時的傾向を述べる前田富祺(1983)には、次のようにある。

漢語が単独で副詞として用いられているものと、いわゆる混種語として副詞の役割を果たしているものとを対比すると、漢語が単独で使われているものが基本でそれに何かが加わって混種語となったと見たくなるが、漢語副詞の歴史から見るとむしろ逆に考えるべきである。特に、助詞の「に」のついた漢語副詞はもっとも基本的なものと考えられ、この「に」が落ちることによって、漢語副詞としてはもっとも副詞的である単独で副詞として用いられる形になったと考えた方が良いように思うのである。

また、副詞一般について「に」のつく副詞と「と」のつく副詞の用法を分類・整理し、通時変化についても言及のある小林幸江(1978)においては、「X自体に既に連用修飾機能の備わっている」ために「連用助詞 α 〔に、と〕の不要なもの」を「[X]型」、「 α の添加により、はじめて連用修飾機能を有するもの」を「[X α]型」、「X自体に既に連用修飾機能が備わっているが、 α が添加される場合もあるもの」を「[X α]型」とした上で、[X α →X]という通時変化のモデルを示し、さらに、「[X α]型の副詞は歴史の変遷の過渡期にある形態を示すものと言えよう」としている。

両者の見方を総合すると、もともと「に」「と」などの付いたものが副詞として基本的なものであって、それが歴史上のある時期に、「に」「と」などの付かない形でも使用され始め、両者が併用される過渡期を経た上で、完全に「に」「と」などの脱落した単独での用法になる、といった通時変化をたどることになる。おそらくこのような見方が一般的なものであるろうし、また、妥当性のある見解のようにも思われるが、果たして漢語副詞についてもこのような理解があてはまるか、漢語副詞についてもそのような変遷が見てとれるかということを、漢語副詞が発生、定着したとされる鎌倉時代から、江戸時代にかけての資料を対象に、調査することとする。調査対象は、 ϕ 型での使用が見られるものとする。その時代の資料に無くとも、後に ϕ 型の用例が見られるもの、現代では ϕ 型で使用されるものを含める。また、ニ型でも、漢語の原義から完全に離れ、「に」が付くことによって日本で独自に副詞として使用されていると思われるものは、単独用法が無くても参考のために掲げてある。

調査結果^{注2}は、以下のように表せる。「その他」に挙げたものの（ ）内には、漢語の前にどのような形の付くものが見られたかを示している。

《鎌倉時代に例の見えるもの》

φ型…一向、一切、一旦、一定、向後、結句、自今以後、始終、所詮、少々、真実、
随分、善悪、大抵、大略、都合、天性、内々

ニ型…一々、一々次第、一所、散々、次第、自然、遂、無下

《上の他、室町時代に例の見えるもの》

φ型…一、一倍、永々、永代、涯分、格別、元来、結局、堅固、再々、再三、至極、
悉皆、生得、済々、節々、善悪、総別、第一、多分、年中、莫大、拔群、万々、
必定、平生、勿論

ニ型…有無、散々、種々、切、沢山、逐一、頓、不断、別、本、微塵、無体

φ型・ニ型…最前、時々刻々、次第次第、連々

その他…一段（φ型・ト型）、極（ト型）、自然（φ型・ニ型・トシテ）、
真実（φ型・ニ型・カラ）、是非（φ型・ニ型・トモ）

《上の他、江戸時代に例の見えるもの》

φ型…古来、十分、常住、折角、大概、地体、畢竟、万一、密々

ニ型…急、大分、無性、無理矢理

その他…自然（φ型・ト型）、神（ゾ）、真実（φ型・ニ型・カラ）、
随分（φ型・ト型）、是非（φ型・ニ型・ナク・トモニ）、
段々（φ型・ニ型・ト型）、微塵（φ型・ニ型・モ）、楽々（ト型）

鎌倉時代のものは、φ型のみのもものとニ型のみのもものしかない。そして全てが、後代へと継承されている。なお、これ以前の平安時代に関しては、宮田裕行（1976）が、平安時代の和文を資料として、漢語を構成要素にもつ語彙について、漢語副詞も含めて調査している。そこで副詞として挙げられているのは、以下のものである。

A 漢語＋に

一向に、一心に、懸隔に、現に、自然に、随分に、不意に、不断に、別に

B 漢語＋と

掲焉と

C 漢語の疊語

少々、忽忽に、朦朦に

D 漢語＋して

総じて

これによると、鎌倉時代にφ型化して使用されている「一向」「随分」「不断」は、平安時代にはニ型として使用されていたということになる。しかし、それらの例というのは、以下に示すように、漢語の原義が残ったものであって、いまだ「漢語＋に」という感じの抜けきらないものである。

1 一向に仕うまつるべうなむ、心ざしを励まして (源氏物語、玉鬘)

2 「たゞ、うはべばかりの情に、手、はしり書き、をりふしのいらへ、心えて、うちしなどばかりは、随分によろしきも多かり」と見給ふれど、(源氏物語、簞木)

3 忠こそ阿闍梨も、大願を立てて、聖天の法を不断に行ひ、(宇津保物語、菊の宴)

1 の例は〈ひたすらに、一つに向かう〉といった意味であり、2 の例は〈分相応 (な分量) に〉の意味であり、3 の例は、〈絶えず、常に〉といった意味である。つまり、「漢語の原義」＋「〈そのような様子で〉」という意味である。仮にそのようなものを副詞として認めたとしても、そのような「二型」のものが全て ϕ 型化するわけではない。

室町時代に入ると、前代から ϕ 型のままで引き継ぐものが多いものの、新たに多彩な漢語副詞が現れる。また、ここに至って、鎌倉時代には無かった、 ϕ 型と二型が併用されるものも現れるのだが、注目されるのは、鎌倉時代に二型しかなかったものが、 ϕ 型と併用されていたり、鎌倉時代に ϕ 型しかなかったものが、二型でも用いられていた点である。

例えば「一々」は、鎌倉時代に二型しか無かったのが、室町時代に入って二型とともに ϕ 型も発生した例であるが、両者の間に明確な使い分けは見られない。「一向」「所詮」は反対に、鎌倉時代に「 ϕ 型」しかなかったものが、二型でも使われている例である。「一向」の場合は、先述の通り、平安時代にも二型が見られ、そこでの用法に近いものかとも思われるが、この語に関しては、さらに後の時代までも ϕ 型と二型の拮抗が続く、やや特殊な例と考えられる (その詳細は菊池由紀子 1983、原卓志 1992 など論じられている)。「所詮」の二型は、次の一例のみであり、存在が疑わしいが、やはり、副詞に「に」が付くものの多いことの影響かとも考えられる。

4 所詮に、あまくだりたまふ七星をまつり、しやうかう殿に宝をつみ、一時にやきすてて、災難のうたがひをとゞむべし」と (曾我物語、卷二)

また、「一段」に至っては、 ϕ 型とともにト型でも用いられている。

江戸時代に入ると、さらに多彩な漢語副詞が登場するとともに、「自然」「随分」「段々」などにおいても、 ϕ 型とともに、ト型の使用例が見られるようになっている。

このように見てくると、必ずしも前田らの指摘するように、二型から「に」が落ちることによってもっとも副詞的となるとは言えない可能性がある。確かに「に」の付いた連用修飾用法のものを漢語副詞と認めた場合に、数の上ではそのようなものが多い段階から ϕ 型の比較的多くなる段階へという変化があるように見られる。しかし、個別の語の副詞用法の発生を見た場合には、かならずしもそのような過程を経ているものは多くない。むしろ、 ϕ 型のみのもものが比較的早い段階から見られる点が注目される。

この点に関して、山田孝雄 (1940) には、漢語由来の副詞について、「元来外国語にても副詞たるものが入り来たりしものにしてそれらは専ら時間、程度を示すものなり。而してこれが帰化語たる場合には国語にても副詞として用ゐらる」とし、「元来 爾来 向後 一切 大抵 悉皆」の例を挙げる。

確かに、鎌倉時代に ϕ 型として用いられ、その後も比較的長い期間に渡って継承されるものには、時間を表すものが多い。漢語が副詞として使用されるようになり、なおかつ定着したのは、このことによるのではないか。尤も、その後の時代に新しく発生したものにも、同様に、時間を表すものは少なくないが、山田が挙げるもののほかにも、「昨夜」など「昨 -」の形のもの、「数度」など「数 -」の形のもの、その他、「先 -」「毎 -」「連 -」「明 -」など、時間や頻度を表す漢語は、「に」の付かない形で早い段階から見られる。

また、前述したように、平安時代から「ニ型」と思われる例は散見され、ニ型から ϕ 型が発生した、あるいは、全体としてニ型から ϕ 方へ、という流れがあるようにみえるかもしれないが、そのような平安時代の「ニ型」が全て後に ϕ 型化するわけではなく、また反対に、鎌倉時代に既に ϕ 型で使われていた副詞がいずれも、平安時代に「ニ型」で使われていたという事実も無いようである。

今回得られた漢語副詞の中で、ニ型から「に」が取れて ϕ 型になったとみなせるものは、「一々」「散々」「自然」のみである。むしろ、鎌倉時代に ϕ 型の用例のみでありながら、後にニ型も併用されるなどの例が、見られるほどである。これらは、副詞に「に」の付くものが多いことから、前述した「所詮」の例のように、もともと単独でも用いられるものにまで「に」を付けて使用されていると考えられるのではないだろうか。

室町時代以降には、 ϕ 型化した後にさらに「と」を取る「自然」「随分」「段々」のようなものも見られ、これらの ϕ 型とニ型の間に、明確な使い分けの無いものも多い。

この「ト型」に関して、小林幸江（1978）には次のような指摘もある。

「と」のつく副詞に関しては次のような変遷のパターンが考えられる。

$[X \text{ と} \rightarrow X \text{ と} \rightarrow X] \rightarrow X \text{ に}$

通時的変遷を経て、語的独立性を増してXとなった副詞は新たに「に」をも取りうるというパターンである。

小林（1978）は、何か具体的な調査資料やデータを示すものではないが、以上のようなパターンの例として「自然」「段々」を挙げている。しかし、「自然と」という形は室町時代以前には見られない。語的独立性を増した後に取りうるのは、今回の調査で見る限り、「に」ではなく「と」の方であり、ニ型の発生以前にト型の使用例の見られたものは無かった。

このように、通時的に漢語副詞を調査し、「に」の付いた、形容動詞と連続性のある用法と、単独用法との関わりを、個別の語の用法変化として捉えたと、必ずしも「に」の付いたものが本来の形で、そこから「に」が落ちて使用されるようになるといったパターンを、基本的なものとは考えられないことがわかる。一般的に考えられているような、「ニ型」から語的独立性を増して「 ϕ 型」ができるといったものは例が少なく、また、 ϕ 型になる前の過渡期的段階といったものも認められない。むしろ、早い時期に、中国語の原義のまま時間を表す副詞として ϕ 型が発生することで、 ϕ 型の漢語副詞が展開していったのではなかろうか。そしてその後、語的独立性を増した後で「に」「と」などを取った形でも使用されるものが現れ、中には、それらの間で用法に違いのあるものもある、ということになる。

用例を収集した資料の量は十分とは言えず、個別の語の調査をした場合にはまた違った結果が出る可能性も否定できないが、少なくとも漢語副詞の発生・展開を考える場合、近世までの範囲では、以上のような見方ができると考える。実際、前田（1983）でも、 ϕ 型化するのは、近代以降に多いという指摘がある。意味の変化、抽象化をあまり経ずに、漢語の原義そのままの意味をある程度保ちつつ、単純に「に」が取れた形で使われる「事実」「実際」「無事」「誠心誠意」などは、いずれも近代以降の例であり、今回の範囲である近世以前には「一々」など極少数あるのみである^{注3}。

5 自来無事悠々の間に平和なる歳月を送ればなり。（泉鏡花「愛と婚姻」）

6 徳島大尉は弘前の第三十一聯隊門間少佐あて、三本木に無事到着したことと、松尾伍長のことを打電した。（新田次郎「八甲田山死の彷徨」）

7 もし真に日本を愛するのがその論拠であるならば、愛する日本のあらゆる必要に応えて、誠心誠意動くことこそ本来の道ではなかろうか。

（宮本百合子「私たちの建設」）

8 できるだけ誠心誠意御説明申し上げながら、この解決の最も基本にある原点はまず資源の開発であるというところであったわけですが、（国会会議録、1977）
これらは、「無事」「誠心誠意」が「に」や「で」などの付かない単独の形で使用されたものである。

また、現代共通語において「と」の付いた形で使用されるものの中には、かつてはそのような形では使用されていなかったものもある。例えば、以下のような「意外（と）」「不思議（と）」が挙げられる。

9 ドラマのリハーサルというのは主役でなければ意外とヒマで、私は自分の出番でない時は、まわりの女優さんや男優さんを観察しているのが好きでした。

（うつみ宮土理「うつみ宮土理のカチンカチン体操」）

10 この実験もまた、サイモンの話と同じように、まったくナンセンスな途方もないお話をつくるのは意外と大変だということを示しています。

（ボイズ著、野口廣訳「シャボン玉の科学」）

11 今度徳富先生の御依頼で訳してみました。私の訳文は我ながら不思議とソノ何んだが、これでも原文はきわめておもしろいです。（二葉亭四迷「あひびき」）

12 あなたがお話しになるそのお祭り騒ぎ、行き過ぎという趣味は、不思議と外見からはとても地味なものに見えますね。

（フランソワーズ・サガン著、朝吹由紀子訳「愛と同じくらい孤独」）

9・10の「意外」は、「意外だ」「意外なこと」などのように形容動詞用法で使用されていたものであるが、このように、「と」と付した形で副詞的に使用される例が、現代では見られる^{注4}。11・12の「不思議」も、平安初期から用例の見られるものであるが、「と」の付いた副詞用法が見られるようになるのは、ここであげたように明治になってからのことである。

このように、「に」だけでなく「と」も、もともと付かなかったものに、あとから付くようになるということがおこるのであり、「と」の付くものが基本的な形とは限らないといえる。また、さらにその後、比較的最近の例であるが、「永遠」に「と」を付して副詞的に使用する例が見られる。

13 俺りえとこうして一緒に飯食ってるだけで本当に幸せやわなどと、こんなことを
永遠と話してるカップーたちがいましたが・・・ (Yahoo!ブログ、2008)

14 アニメやゲームの話を永遠とされるのはイヤです！ (Yahoo!知恵袋、2005)
〈延々と、いつまでも〉といった意味で使用されたものである。これは「延々(と)」の副詞用法をもとにして発生したものと考えられる。音が近い「延々」から別の漢語である「永遠」に引かれ、〈永遠〉と思われるほど〈いつ終わるとも知れず長い時間続く〉さまに使用されたものであろう。ただし、この例の場合は「と」の付かない漢語単独の形では使用されないことから、やや特殊な例といえる。

このように、近代以降に、急激な漢語の増加と共に、漢語副詞にも新たに大きな ϕ 型化の傾向があったのであり、そこに至って、二型・ト型から単純に「に」「と」の取れたものと考えられる ϕ 型の用例が急増するものと考えられる。前述した通り、漢語副詞がそもそも発生・展開していく段階では、二型・ト型から ϕ 型へという流れではなく、むしろ「 ϕ 型」が最も基本的なものであるとも考えられる。

次項からは、程度副詞・注釈副詞という、副詞の意味のまとまりについて、後接する形式の種類と有無に着目して通時的変化を考察し、近現代に特徴的な事象を考えていく。

4-2. 程度副詞化に関する一考察

副詞化のパターンの一つとして、程度副詞化ということが挙げられる。そしてそれは当然、漢語副詞についてもあてはまる。先述の山田孝雄の指摘においても、時間を表すものと並んで、程度を表すものが、漢語由来の副詞の一つの代表とされていた。そこで、本項では、今回得られた中世から近世までの漢語程度副詞の、歴史的変遷や特徴を探る。

今回得られた程度副詞は、以下のものである。

《鎌倉時代》

少々、真実、随分、無下(に)

《室町時代》

前代に用例の認められたもの…少々、真実、随分、無下(に)

前代に用例の認められないもの…一、一段(ϕ ・と)、一倍、格別、第一、沢山(に)、
莫大、万々、本(に)

《江戸時代》

前代までに用例の認められたもの…一倍、格別、少々、真実、随分、第一、万々、
本(に)、沢山(に)、無下(に)

前代までに用例の認められないもの…至極、大分、十分

鎌倉時代の程度副詞は、「少々」「真実」「随分」「無下（に）」の四語のみである。漢語副詞全体の数も少ないが、それにしてもあまり多くはない。漢語副詞の発生初期としては、程度副詞は、基本的なものではなかったと言える。

しかも、「少々」は、漢語の原義通りの程度副詞ではあるものの、程度の低いことを表すものである。「随分」も高度を表すものとは言えない。「真実」も漢語本来の意味を残して〈本当に〉といった程度のものである。「無下（に）」はこの中では高度を示すものであるが、『大漢和辞典』には漢籍の用例が示されておらず、和製漢語の疑いもある。その上「ニ型」であるため、鎌倉時代は、 ϕ 型で高度を示す漢語程度副詞は無いようである。但し中でも、「随分」「真実」については、鎌倉時代に ϕ 型と思われる例が見られる点については注意すべきである^{注5}。

室町時代に入ると、鎌倉時代の四語を受け継ぎつつも、一気に多くの漢語程度副詞が出現する。しかし、「一」「第一」「莫大」の三語は、次に挙げるような、キリシタン資料のみに用例の見られるものであり、後代に引き継がれているのは、現代でも使用される「至極」のみである。

15 七つのサカラメントを工み作らせられたこと、何よりも一勝れた御所作でござつた。
(コリヤード懺悔録)

16 かへつてそれをよろこび、なんぢは／人中にて第一よはくをとりたるものとおもひとるべし
(こんてむつすむん地、巻第三、第十八)

17 ぶるがたうりよにて／とがをくりをなさんよりも、げんぜにてほうぜん事はばくたいまされり
(こんてむつすむん地、巻第一、第二十二)

ここでは、高度の程度を表す副詞が登場してきたことが注目される。また、「一」「一段」「一倍」「第一」と「一」を含んだ漢語が多いことも興味深い。しかし、いずれも後代まで残り定着しているとは言い難い。むしろ鎌倉時代の「随分」「真実」などが現代でも使用されることを考えると、室町時代は、さまざまな漢語程度副詞が使用されていながら、後の時代へと定着させているとは言い難い。あるいは、それは程度表現の持つ性格であるのかもしれない。その時代時代で、より新鮮な響きのある程度表現を求めた結果とも考えられる。そのことは、いずれも高度の程度表現であることから裏付けられるだろう。前代からある「随分」「真実」などは高度の程度（のみ）を示すものとは必ずしも言えない。

そして江戸時代に入ると、新たに「至極」「大分」「十分」が現れるが、これらは現代にまで引き継がれている点が指摘できる。結局、鎌倉時代に用例のあった「少々」「随分」「真実」「無下に」が江戸時代まで引き継がれ、その後は、さまざまな程度副詞が現れては消えて行くという様子となっている。

しかし、ニ型であったのは、『大漢和辞典』に漢籍の用例が載っておらず和製漢語の疑いのある「沢山」「無下」と一字漢語である「本」のみであり、それ以外は、すべて ϕ 型の用例である。しかも興味深いことに、『大漢和辞典』による限り、漢籍に同様の程度副詞の用法の確認できるものは一つも無かった。このことから、程度副詞は、みな日本で独自に用

法を変化させてできたものということになる。その際、「随分」「真実」に見られるように、「 ϕ 型」の用法で使用するによって、あるいはそれに伴って、意味変化を生じたと考えられる。

「大変（に）」「十分（に）」などが、現代語のように「に」の付いた形でも付かない形でも程度副詞として用いられるようになったのは、以下に挙げるように、近代以降のことである。

18 斯ういう風に実例を眼前に見て、苦しいとか、楽しいとか云う事は、人によって
大変違う。 (二葉亭四迷「予が半生の懺悔」)

19 此男はいくら酔つても、中／＼平生を離れない事がある。かと思ふと、大変に元
気づいて、調子に一種の悦楽を帯びて来る。 (夏目漱石「それから」)

20 此地へ来るまでは、僕は十分信じてをつた、お前さんに限つてそんな了簡のある
べき筈は無いと。 (尾崎紅葉「金色夜叉」)

21 女子も立たねばならぬ、意志の力を十分に養わねばならぬとはかれの持論である。
(田山花袋「蒲団」)

このように、単独で程度副詞化したあとに「に」を付けることが可能になったものが多く、「に」の付いた形で程度副詞化したものが、そのまま「に」が脱落して ϕ 型となったものは、少なくとも近世中期までの資料には見当たらない。

しかし時代が下って現代には、それまで「に」のついた形で程度副詞として使用されていたものが、「に」の付かない形で使用されるようになるものが出てくる。

22 サイコー面白い！！ (Yahoo! 映画 より
<http://info.movies.yahoo.co.jp/userreview/tyem/id343809/rid28/p0/s0/c0/>)

23 はじめてたべたんですがごぼうチップスサイコーうまいっすね!!
(Yahoo! 知恵袋 より
http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13110573698)

これらは「最高」の例である。〈最高に、とても〉といった意味で使用されており、「に」の付かない形で「面白い」「うまい」といった形容詞を修飾する程度副詞となっている。また、次のような例もある。

24 こんなってない。カンペキおかしい。
(メグ・キャボット著、代田亜香子・金原瑞人訳「プリンセス・ダイアリー」)

25 「負けてるよなあ、カンペキ、負けてるって」 (重松清「口笛吹いて」)

これらは「完璧」の例である。〈完全に、疑う余地なく〉といった意味で使用されており、これも「に」の付かない形で「おかしい」「負けてる」を修飾している。

いずれの例も、漢字でなく仮名書きになっている点が注目できる。漢語としての原義を大きく離れているため、漢字表記すると意味にそぐわないという意識や、漢字表記された漢語に「に」などをはさまず直接に後の語をつなげると漢語単独で副詞用法であることが視覚的に分かりづらくなるという意識が働いた可能性を指摘できよう。

4-3. 注釈副詞化に関する一考察

近代における漢語副詞（漢語副用語）の通時的変遷を調査した趙英姫（2002）では、その一つの傾向として、近代語形成期から近代語完成期にかけて、以下のような注釈副詞が持続的に増えてきたという指摘がなされている。傍線を引いてあるのは完成期に新しく増えたものとされているものである。

案外、意外に、一般的に、元来、結局、事実、実は、所詮、当然、土台、普通（は）、本来、無論、勿論

そして、「全体的に見て注釈副詞は増えているし、両方に共通する注釈副詞の場合は述べ語数が増え使用頻度も高くなる傾向にある」としている。

しかし、具体的に数量的なデータを示しているわけではなく、また、挙げられているものを見てみると、その漢語副詞自体には、古くからあるものも含まれている。今回の調査の範囲からも、「元来」「結局」「所詮」「本来」「無論」といったものは、すでに中世までに用例が得られている。また、前述した、漢籍においてもともと副詞的用法を持つものは、日本においても比較的早くから「に」「と」などの付かない、漢語単独での用法が見られるということについては、注釈副詞に関しても、同様のことが言えると思われる。

そこで本項では、注釈副詞化という、用法の変化に主に着目して、趙の指摘する、漢語副詞における注釈副詞の増加の内実の一端を考察する。

趙（2002）では、注釈副詞の定義について、「渡辺実（1971）で定義されている誘導副詞から陳述副詞を除いたものに相当する」としている。ここではひとまず、特定の表現と呼応するものではなく、文全体にかかっていると思われるものを広く注釈副詞と認めることとする。

今回の調査から、注釈副詞とみなせるものを通時的に並べると、次のようになる。

《鎌倉時代》

一旦、向後、結句、自今以後、始終、所詮、大抵、大略、天性

《室町時代》

前代に用例の認められたもの…一旦、向後、結句、始終、所詮、大略

前代に用例の認められないもの…元来、結局、生得、総別、第一、勿論

《江戸時代》

前代までに用例の認められたもの…一旦、元来、向後、結句、始終、所詮、生得、
総別、第一、大抵、勿論

前代までに用例の認められないもの…古来、地体、常住、折角、大概、畢竟

時間や回数、頻度などを表すものまで範囲を広くとっているが、少なくとも趙の言うところの注釈副詞が、用法としては、近代にまで下らなくとも、近世以前にこれだけ見られ、各時代にコンスタントに生み出されていることはわかる。

そこでここでは、そのなかでも用法に変化があったと思われるものを三例あげ、その注釈副詞化の様子を見ていくことにする。

【第一】

「第一」には、鎌倉時代には以下のような用例しかない。

26 誠に無双の積徳、天下第一の高僧にておはしければ、君も臣もたッとみ、天王寺・六勝寺の別当をもかけ給へり。 (平家物語、巻二)

27 去る永萬には、第一の御子二条院崩御なりぬ。 (平家物語、巻六)

26 の例は、〈～の中では一番、～にかけては一番〉という意味のもの、27 の例は、単純な序数詞としてのものである。

ところが、室町時代に入って、キリシタン資料には、以下のような、程度副詞としての用例が現れる。

28 御主ご托胎の初めよりスピリツサント天降り給ふまでのミステリヨの内、第一すぐれたる理皆これにこもるもの也。 (ロザイロの観念)

29 又もろもろの人のうちに第一美しくまします御身を赤の裸になし奉り、面目なき御姿にて、 (ロザイロの観念)

30 ばんみんの中に第一あさましくふびんしごくなるわれ、 (こんてむつすむん地)

31 なんぢは人中にて第一よはくをとりたるものとおもひとるべし (こんてむつすむん地)

室町時代には、鎌倉時代までの用法をほぼ継承しつつ、これらのような、〈最も、一番〉といった意味の程度副詞的用法が、キリシタン資料において見られるようになる。

また、一方、「曾我物語」において、一例のみ、注釈副詞的用法と思われるものが見られる。〈なによりもまず、ほかのことはともかく〉といった意味と思われるのだが、同時期には他に例が無く、この用法がこの時期から広く使われていたとは考えられない。しかし、江戸時代に入ると、程度副詞用法とともに注釈副詞的用法が多く見られるようになる。

32 かれこれもつて、祐経にしられ、かへりてねらはれん事、うたがひなし。かゝる大事こそ候はね。第一、上へきこしめされては、死罪・流罪にもおこなはれ、身をいたづらにせんことの無念さよ。 (曾我物語、巻四)

33 いづれをひとつ、あしきと申べき所なし。情第一深し。 (好色一代男、巻五)

34 世間に鬼はなしと嬉しく耳をすまして聞に、「第一内かたは愀気ふかし。面屋の若い衆と物云事も嫌ひ給ふなり。 (好色一代女、巻四)

35 のぼりつめてはお客にも女郎にもえて怪我のあるもの。第一勤の妨げと堰くはどこしも親方の習。それゆゑのお客の吟味。 (心中天の網島)

32 は先述の「曾我物語」の例、33 は「好色一代男」における程度副詞の例、そして 34・35 が、注釈副詞的用法の例である。前代までの用法を継承しつつ、この時代には 34・35 のような注釈副詞的用法がまとまって出現する。井原西鶴の作品において、33 のような程度副詞用法のものが数例見られるが、他資料には見られない。特定の表現と呼応せずに文全体にかかる注釈副詞としての用法は、この時期に確立されたものと思われる。但し、現代のようなマイナスよりのイメージを持つには至っていないようである。

【所詮】

「所詮」は、前述の通り鎌倉時代から副詞用法自体はあるが、中世末期から近世にかけての時期に、意味に変化が見られるものである。

鎌倉時代においては、以下のような例がある。

36 基盛、「御家名うけ給候畢。所詮宣旨によつて御上洛候か、院宣に随つてまいらせ給候か、承らん。」と申せば、(保元物語、上)

37 中にも義朝を只一矢に射ころすべかりし物を、助をきたれば、今は親の敵に成ぬる事こそ悔けれ。所詮鎮西に下て、九国の者共催して、都へ責上り皇城を打傾けんに、義朝定而防かむずらん。(保元物語、下)

この時期の所詮は、〈結局、つまり〉といった意味で「結果的に落ち着くところ」としての事態を単に述べる場面での使用である。

室町時代に入ると、以下のような例が現れる。

38 所詮、世のけいにまかせ、伊東二郎にたまはるべきか、また祐経にたまはるべきか、相伝の道理について、憲法の上裁をあふがんと欲す。(曾我物語、巻一)

39 「所詮今は何に憚るべき、たゞ思ふ様に遊ばせ参らせよ」とて、泉冠者に申し付けて、(義経記、巻七)

おおむね前代と同じと思われるが、39の例は、やや後代の要素が含まれているようにも解釈が可能である。

40 死は軽くして易し生は重くして難し。所詮命を全くして平氏の怨敵。右大将頼朝を一太刀恨み(出世景清)

41 其の期にのぞんでは嘆きに沈みよもや討ち給ふまじ。所詮我等臆病者未練の体を見給はば。御憎しみの怒りの刃御心やすく討ち給はんと。(姫山姥)

この時期に至ると、前代までの単なる〈結局、つまり〉の意味だけではなく、その結果の事態に対する話者の評価・注釈の意味が濃く表れ、より注釈副詞性を増していると思われる。

【勿論】

「勿論」は、中山緑朗（1986）においては、「玉葉」「園太暦」の例を一例ずつ挙げ、古記録の方面では副詞として盛んに用いられていたとし、また本調査でも用例が得られたが、古記録以外の資料では、以下に挙げるように、室町末期に至るまで、注釈副詞としての用法は見られない。

42 今度山門の御訴訟、理運の条勿論に候。御成敗遅々こそ、よそにても遺恨に覚候へ。(平家物語、巻一)

43 学頭の仰せは勿論に候。(義経記、巻三)

44 いかなる柔和忍辱の阿闍梨なりとも、命を絶ちたきこと勿論なり。(猫のさうし)

室町に入る頃までは、いずれも形容動詞としての例しか見られない。

45 その時もちろん維盛も都を落ちられてあったか？(天草版平家物語、巻三)

46 流人御免とは尤もの善根然らば勿論俊寛僧都。丹波の少将成経平判官康頼。三人共の御赦免であらうずるなどの給へば。(平家女護嶋)

今回の調査では、天草版平家物語の例が、副詞用法としての初出であった。

このように、「第一」「所詮」「勿論」は、漢語単独の副詞用法で使われるようになるとともに、注釈副詞としての用法が発生しているといえる。

趙(2002)では、近代に漢語の注釈副詞が増加した原因について、「数の少ない和語の注釈副詞を補う形で漢語の注釈副詞が増えてきたと考えられる」「近代漢語副用語において、数の少ない和語の注釈副詞を補う形で漢語の注釈副詞が増えてきたのは、和語語基より文のいろんな成分に自由に転成できる漢語語基の性質に由来すると考えられる」と指摘している。

和語の注釈副詞の種類や数について調査する必要があるが、漢語の副詞化の中でも、注釈副詞化という用法の変化について言えば、趙が近代以降のものとして述べるように、比較的遅くに起こったことであると考えられる。前項で見たように比較的早い時期から見られる程度副詞化に対して、注釈副詞化というものも、中世末期から近世前期にかけての一つの傾向として指摘できるのではないだろうか。そして、特に「第一」においては程度副詞化が起こった後で注釈副詞用法が一般化していることから、順序としては、注釈副詞化の方が後であると言えよう。

さて、現代では、漢語「結果」について、注釈副詞(文副詞)的用法の使用が見られるようになっている。次のようなものである^{注6}。

47 それが頓挫すると、政局第一に転換し、「解散・総選挙があるぞ」「あるぞ」と言ってきたが、結果、総選挙は越年となった。(Yahoo!ブログ、2008)

48 米については、長年過剰基調が継続しこれが在庫の、増嵩、米価の低下を引き起こし、結果、水田農業の経営が困難な状況に立ち至っている一方、消費者ニーズが多様化し、(福島県大沼郡会津美里町「広報あいづみさと」)

47・48の例は、「結果」が単独で文副詞的に使用されたものである。従来からある、「その結果」「～した結果」などの形で、漢語「結果」の前に連体修飾部が付くものでなく、このように、単独で使われる点が新しい用法といえる。〈結果として、結局〉といった意味を表している。これは、「に」「と」などの付いた形で使われていたわけではないので、元の形を想定すれば、「結果として」「結果的に」などが考えられる。もともと単独の副詞用法をもつ「結局」と形も意味も似ており、そこからの連想が働いたこともあわせて考慮する必要があるだろう。

5. おわりに

以上、本稿では、漢語受容史の中で形容動詞・副詞をとらえ、それらの品詞性を整理したうえで、特に漢語単独での副詞用法発生について、必ずしも二型・ト型から「に」「と」が落ちるというパターンが基本的とは言えない可能性を示した。

用例を収集する資料を増やすことや、個別の語のそれぞれより詳しい調査などは今後の課題としなければならないが、漢語副詞の発生・展開を考える場合、近世までの範囲での漢語単独用法のあり方と、それとの対比の上での近現代以降の特色について、その大筋を示すことができたと考える。

注1 野村雅昭（1999）の「基本三千漢語一覧」などを参考にした。

注2 調査は、以下の文献で行った。

《鎌倉時代》「保元物語」「平治物語」「平家物語」…日本古典文学大系（岩波書店）、「三長記」「平戸記」「順徳院御記」「後鳥羽天皇宸記」「吉統記」「勘仲記」「伏見天皇」「冬平公記」「後伏見天皇宸記」…増補史料大成（臨川書店）、「花園天皇宸記」…史料大成（臨川書店）
《室町時代》「御伽草子」…日本古典文学全集（小学館）、「曾我物語」「義経記」…日本古典文学大系（岩波書店）、「幸若舞」…笹野堅『幸若舞曲集』（第一書房、1943）、「ぼうちづもの授けやう」「おらしよの翻訳」…林重雄『ぼうちづもの授けやうおらしよの翻訳 本文及び総索引』（笠間書院、1981）、「天草版平家物語」…江口正弘『天草版平家物語 対照本文及び総索引』（明治書院、1986）、「エソポのハブラス」…大塚光信・来田隆『エソポのハブラス 本文と総索引』（清文堂、1999）、「ロザイロの観念」…小島幸枝『キリシタン版『スピリツアル修行』の研究』（笠間書院、1989）、「こんてむつすむん地」…近藤政美『こんてむつすむん地総索引』（笠間書院、1977）、『吉利支丹文学集』（日本古典全書、朝日新聞社）、「コリヤードさんげろく」…大塚光信『コリヤードさんげろく私注』（臨川書店、1985）、「虎明本狂言」…池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究』（表現社、1983）、「康富記」「碧山日録」「親長卿記」「宣胤卿記」…増補史料大成（臨川書店）、「斎藤基恒日記」「斎藤親基日記」「蔭涼軒日録」「大乘院寺社雑事記」「後法興院関白記」「多聞院日記」「家忠日記」…増補続史料大成（臨川書店）、「臥雲日件録抜尤」…大日本古記録（岩波書店）、「晴富宿禰記」…図書寮叢刊（明治書院）

《江戸時代》「西鶴集」「近松浄瑠璃集」…日本古典文学大系（岩波書店）、「時慶卿記」…『ビブリア』40・41）、「言緒卿記」…大日本史料、「本光国師日記」…大日本仏教全書、「忠利宿禰記」…改訂史籍集覧、「堯恕法親王日記」…妙法院史料、「唐通事会所日録」…大日本近世史料、「妙法院日次記」…続群書類従完成会

注3 「事実」「実際」については、拙稿（2013）で述べた。

注4 『日本国語大辞典』第二版の「意外」の項には、「現代では、俗に「意外と」の形で副詞的にも用いる。」とある。

注5 「随分」については拙稿（2012）、「真実」については拙稿（2013）で、詳しい語史を述べた。また、「無下」についても、漢語由来であるかどうかといったことも含めて、拙稿（2008）で述べた。

注6 「結果」のこうした用法についてはすでに指摘が複数ある。例えば、高橋圭子・東泉裕子（2013）では、新用法発生のプロセスが論じられている。

調査資料

例文の引用には、注 2 に挙げた文献の他、下記のデータベース・テキストを使用し、また、用例の検索・調査には、その他公刊されている索引も使用している。なお、表記は私に改めた場合がある。

データベース…「現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言」

テキスト…『日本古典文学大系』（岩波書店）、『明治文学全集』（筑摩書房）、『宮本百合子全集 第 15 巻』（新日本出版社）

参考文献

- 菊池由紀子（1983）「もっぱら」（『講座日本語の語彙 ⑩ 語誌Ⅱ』明治書院）
- 小林幸江（1978）「「に」のつく副詞、「と」のつく副詞」（『日本語学校論集』6）
- スワン彰子（1994）「形容動詞＋「な」／「の」について」（『講座日本語教育』29）
- 高橋圭子・東泉裕子（2013）「漢語名詞の副詞用法 ～『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『太陽コーパス』を用いて～」（第 4 回コーパス日本語学ワークショップ予稿集）
- 田野村忠温（2002）「形容動詞連体形における「な/の」選択の一要因 —「有名な」と「無名の」—」（『計量国語学』23-4）
- 趙英姫（2002）「近代漢語副用語の出現形態と使用場面との関連性」（『早稲田日本語研究』10）
- 永澤済（2011）「文法的機能からみた漢語」（『国文学 解釈と鑑賞』76-1）
- 中山緑朗（1986）「古記録の語彙に見る副詞 —漢語副詞の登場—」（『学苑』561）
- 鳴海伸一（2008）「「むげ」の意味変化」（『国語学研究』48）
- 鳴海伸一（2012）「程度の意味・評価的意味の発生 —漢語「随分」の受容と変容を例として—」（『日本語の研究』8-1）
- 鳴海伸一（2013）「真実性をもとにした程度の意味の発生 —漢語「真実」とその類義語を例に一」（『訓点語と訓点資料』131）
- 野村雅昭（1999）「語彙調査データによる基本漢語の抽出」（『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』12）
- 原卓志（1992）「漢語「一向」をめぐる問題点—否定用法・使用者層について—」（『古代語の構造と展開』和泉書院）
- 前田富祺（1983）「漢語副詞の種々相」（渡辺実編『副用語の研究』明治書院）
- 宮田裕行（1976）「平安時代和文における漢語を構成要素にもつ語彙について」（『東洋大学短期大学部紀要』7）
- 村木新次郎（2004）「漢語の品詞性を再考する」（『同志社女子大学日本語日本文学』16）
- 山田孝雄（1940）『国語の中に於ける漢語の研究』宝文館
- 渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房

「全然」の“迷信”に関する通言語的考察

橋本行洋

はじめに

日本語における漢語副詞「全然」については、大正末から昭和にかけて否定との結びつきが強まり、そこから昭和戦後に至って「否定と呼応しなければならない」という、いわゆる“迷信”の生じたことが知られている⁽¹⁾。

本稿では、語の用法変化とそれに伴う“迷信”とも言うべき意識が、日本語と中国語の同形語において同様に生じていることを観察し、これを通言語的に捉えうる現象であることを示す。

1. 中国語にもある「全然」の“迷信”

日本語と同様に、現代中国語においても「全然」は多く否定表現に用いられ、現行の中日辞典には、「否定文に用いる」（東方書店、北京・商務印書館共編『東方中国語辞典』東方書店 2004 年／松岡榮志他編『超級クラウン中日辞典』三省堂 2008 年）、「否定の副詞として用いられる」（愛知大学中日大辞典編纂所『中日大辞典』第 3 版、大修館書店 2010 年）と注記するものがある。一方、中国における主要な現代中国語辞典類には、

- 全然** 意思和“全”基本一樣，但用法不完全相同，一是只用于書面語，二是多修飾否定形式。例如：①農民的眼睛，全然沒有錯的。誰个劣，誰个最甚，誰个稍次，誰个恁弁要嚴，誰个処罰從輕，農民都有極明白的計算，罰不當罪的極少。（《毛澤東選集》17）
②他只是搖頭；臉上雖然刻多趨紋，却全然不動彷彿石像一般。（《魯迅全集》一卷 68-69）
（北京大学中文系 1955 1957 級語言班編『現代漢語虛詞例釋』商務印書館 1982 年）

- 【全然】** quánrán **副** 完全地（多用于否定式）：他一切為了集体，～不考慮个人的得失。（中国社会科学院語言研究所詞典編纂室編『現代漢語詞典』第 6 版、商務印書館 2012 年）
等とあって、これらでは断定を避けた表現が用いられているが、

- 全然** quánrán **〔副〕** 完全；全都：～不了解情況 | ～不計后果 | 為了保護国家財產，～不顧个人安危。**【注意】**“全然”只能用于否定，如“全然不考慮个人得失”，不能用肯定，不能說“全然考慮个人得失”。（商務印書館辭書研究中心編『應用漢語詞典』商務印書館 2000 年）

のように、肯定表現での使用はできないと注記する辞書もある。しかし実際には肯定表現

に用いられることもあり、たとえば『人民日報』（《人民網》<http://search.people.com.cn/>による）を検索しても、

○縱使当初思前想后、發誓丁克一輩子的人，一旦看到孩子出生時的面龐，全然是種種幸福弥漫。（「春節回家，你怕父母催生嗎（民生觀）」2014年1月24日）

○祁又一的《探宝記》，…中略…揭示了当下社会的人們因耽于物欲的无尽追求，全然把自身的価値与意義抛之腦后的現實。（「2013年，長篇小說變招為哪般？（文学新觀察）」2014年1月10日）

○在樹下凝思，又從樹下離去。那一刻，我全然傾心動情了，真想回頭對白梅樹說一句什麼話。（「武夷白梅」2013年12月11日）

のような例を容易に見出すことができる。『応用漢語詞典』が不可とする「全然考慮～」という例も、

○写忠誠、為人民，強基礎、求發展，謀創新、真作為，樹形象、爭排頭。…中略…二十四个字簡要、明了，將司法行政工作的政治性、法律性、社会性、服務性全然考慮進去。

（「[江蘇省泰州市]海陵區司法局“新時期海陵司法行政精神”候選項」2013年1月11日

http://sfj.tzhl.gov.cn/art/2013/1/11/art_3737_188748.html）

のように使用されることがある。

考えてみれば、『応用漢語詞典』が「全然」について、敢えて【注意】と断ったうえで「否定のみに用いることができ、肯定に用いることはできない」と記すのは、上掲のような肯定表現に用いられる例がしばしば見られ、それが“本来とは異なる誤った用法”と判断されたためであろう。その点においてこれは、日本語の「全然」における場合と同様の“迷信”に相当するものと言うことができる。

2. 『朱子語類』の「全然」

『大漢和辞典』および『漢語大詞典』には、「全然」の古い例として次のものが掲げられている⁽²⁾。

○出而謂列子曰、幸矣、子之先生遇我也、有瘳矣、全然有生矣、（『莊子』応帝王）

この箇所は『列子』に「灰然有生矣」とあって異同が存するが、『莊子』の「全然」についてみればこれは肯定表現に用いられているということになる。ただし、古い時代の「全然」には未だまとまった数の例が見られず、用法の偏りを考察することはできない。

「全然」が比較的多く認められる早い時期の文献としては、宋代、朱熹と門弟たちとの問答を記録した『朱子語類』があるが、これに関する言及として次の考察がある（文中の書名略号は次の通り：《変文》＝《敦煌変文集》、《語類》＝《朱子語類》、《平話》＝《新編五代史平話》、《金》＝《金瓶梅詞話》）。

○強調の語氣副詞，只能用于否定句．也就是說．它們只能修飾否定形式，表示對否定的

強調。…中略… 到近代漢語中，“了”基本上不再用作語氣副詞，但修飾否定形式的副詞明顯地增多了。《變文》中有“並、殊”；《語類》中有“並、初、斷、絕”，另外還有“決、全、全然、殊”也多修飾否定形式，很少修飾肯定形式；《平話》中有“初、斷、絕、了、全、殊”；《金》中有“白、並、斷、斷然、通、又、再”。…中略… 這些修飾否定形式的語氣副詞，有的是非常嚴格地只修飾否定形式，如“並、初、又、再、白”有些則偶爾可以修飾肯定形式，如“斷、斷然、絕、決、全、全然、殊、通”等。

（楊榮祥(2005) pp.370-371）

ここでは、『朱子語類』における強調の副詞としての「全然」は「決」「全」「殊」と同様、多く否定形式の修飾に用いられ、稀に肯定形式の修飾にも使用されると述べられている。その確認のため、『朱子語類』中に認められる「全然」の用例を次表に掲げる（「頁」は中華書局理學叢書版『朱子語類』（1994）の頁を示す⁽³⁾）。

【表 1】『朱子語類』「全然」

	用例	卷次・標目	頁	用法
1	全然守在這裏、不得動。	3・鬼神	41	否定
2	到夜全然收斂、無些形越時、便是智。	6・性理三	111	否的
3	那紙上説成、全然靠不得。	9・学三	152	否定
4	全然虚心、只把他道理自看其是非。	11・学五	180	否的
5	全然把一己私意去看聖賢之書、	11・学五	180	肯定
6	初間只争些小、到後來全然只有一边。	13・学七	233	否的
7	意誠、便全然在天理上行。	16・大学三	341	肯定
8	但著实行处全然欠闕了。	22・論語四	531	否的
9	是不是全然不為。	23・論語五	537	否定
10	他聽之全然似不曉底。	24・論語六	568	否定
11	亦不是全然無所作為也。	25・論語七	629	否定
12	全然盛水不得。	27・論語九	673	否定
13	全然閉塞隔絕了。	27・論語九	690	否的
14	便是全然無了這些子心。	28・論語十	724	否定
15	且看来日月至与全然別、	31・論語十三	791	否的
16	又不能遵守齊之初政、却全然變易了、	33・論語十五	829	否的
17	便是全然不是、	34・論語十六	858	否定
18	改過則是十分不好、全然要改。	34・論語十六	859	否的
19	却是權与經全然相反；	37・論語十九	991	否的
20	若曾子之学、却与曾点全然相反。	40・論語二十二	1031	否的
21	如此問、乃見公全然不用工夫。	44・論語二十六	1146	否定
22	見得聖人所以孝其親者、全然都是天理、	58・孟子八	1357	肯定

23	不聞不見、全然無形迹、暗昧不可得知。	62・中庸一	1503	否定
24	今日は秋、為変到那全然天涼、	74・易十	1887	肯定
25	見得古注全然錯。	78・尚書一	1986	否的
26	全然不合。	79・尚書二	2026	否定
27	到第二章已下、又全然放寬、	80・詩一	2065	肯定
28	更含蓄意思、全然不露。	80・詩一	2065	否定
29	如蟋蟀之序、全然鑿說、固不待言。	81・詩二	2111	否的
30	有讀了後全然無事者、有得一二句喜者。	81・詩二	2115	否定
31	則全然反乎正矣。	81・詩二	2132	否的
32	若作刺厲王、全然不順。	81・詩二	2134	否定
33	全然不是、豈止有不是处。	83・春秋	2166	否定
34	如今全然没理会、	84・礼一	2188	否定
35	唯是五体新儀全然不是。	87・礼四	2266	否定
36	孔門学者、如子張全然務外、	93・孔孟周程張子	2355	否的
37	少看有功却多、泛泛然多者、全然無益。	95・程子之書一	2424	否定
38	全然做天底、也不得。	95・程子之書一	2440	否定
39	猪則全然蠢了。	98・張子之書一	2515	否的
40	而今人看文字、全然心粗。	104・朱子一	2621	否的
41	當時曾無玷陳君举之徒全然不曉、	107・朱子四	2662	否定
42	如今全然無此意、如何恁地。	109・朱子六	2701	否定
43	如今宰相思量得一辺、便全然掉卻那一辺。	112・朱子九	2733	否的
44	近却尽去得前病、又覺全然安了、	113・朱子十	2749	肯定
45	何況慢慢地、便全然是空。	114・朱子十一	2759	否的
46	全然与所知者相反。	114・朱子十一	2763	否的
47	乃是行上全然欠耳。	114・朱子十一	2763	否的
48	所以全然無益。	120・朱子十七	2884	否定
49	如說易、說甚性命、全然惡模樣。	120・朱子十七	2899	否的
50	今只是略略火面上燐得透、全然生硬	121・朱子十八	2920	否的
51	又有全然不要、	121・朱子十八	2944	否定
52	於義理上全然理会不得。	122・呂伯恭	2952	否定
53	及其再人、全然若無能、	131・本朝五	3155	否定
54	匡衡做得相業全然不是、	135・歷代二	3229	否定

これを見ると、否定語（「不」「無」）と共起するもの（＝用法欄に「否定」と表示）は、54例中 26 例（48.1%）で半数に満たない。ただし、「別」「反」「錯」「欠」「惡」あるいは「収斂（消えて無くなる）」「蠢（愚かである）」「心粗（そそっかしい）」「生硬」等の、打消ないし否定的要素の認められる語を伴う例（＝同じく「否的」と表示）を含めると大多数

(48 例：88.9 %) を占める。また上表では「肯定」としたが、5「全然把一己私意去看聖賢之書」、27「到第二章已下、又全然放寬」等、文脈から否定的ニュアンスを認めうる例を含めるならば、さらにその割合は高くなる。楊榮祥(2005)による指摘は、おそらくこれらを含めた結果に基づく判断と考えられる。

しかし一方で、楊榮祥(2005)が「有些則偶爾可以修飾肯定形式」とする通り、22「見得聖人所以孝其親者、全然都是天理」や 44「近却尽去得前病、又覺全然安了」のような否定的ニュアンスを認めがたい文脈においても「全然」は用いられることがあった。

3. 明清白話小説の「全然」

『朱子語類』の言語は大略宋代の口語を反映するものと考えられるが、下って明清の口語で記された白話小説類においても「全然」はしばしば用いられている。以下【表2】に、比較的著名と思われるものを中心として、筆者の判断によって選択した文献における「全然」の用例⁽⁴⁾を掲げる。

【表2】明清白話小説「全然」

	用例	書名	用法		用例	書名	用法
1	全然無効	三国演義	否定	67	全然不知	醒世恆言	否定
2	全然不睬	三国演義	否定	68	全然不理	醒世恆言	否定
3	全然不出	三国演義	否定	69	全然不知	醒世恆言	否定
4	全然不顧	三国演義	否定	70	全然不応	醒世恆言	否定
5	全然不動	三国演義	否定	71	全然不睬	醒世恆言	否定
6	全然不懼	三国演義	否定	72	全然好了	醒世恆言	肯定
7	全然不退	三国演義	否定	73	全然不覺	醒世恆言	否定
8	全然無俗態	水滸全伝	否定	74	全然不以為意	初刻拍案驚奇	否定
9	全然不動	水滸全伝	否定	75	全然未保	初刻拍案驚奇	否定
10	全然不記得	水滸全伝	否定	76	全然未保	初刻拍案驚奇	否定
11	全然打聽不著	水滸全伝	否定	77	全然不像夢境	初刻拍案驚奇	否定
12	全然不慌	水滸全伝	否定	78	全然不以為意	二刻拍案驚奇	否定
13	全然不懼	水滸全伝	否定	79	全然未保	二刻拍案驚奇	否定
14	全然不知	水滸全伝	否定	80	全然露著	二刻拍案驚奇	肯定
15	全然不懼	西遊記	否定	81	全然不理	二刻拍案驚奇	否定
16	全然没有	西遊記	否定	82	全然無異	二刻拍案驚奇	否定
17	全然不怕	西遊記	否定	83	全然無人認得	二刻拍案驚奇	否定
18	全然不知下落	西遊記	否定	84	全然不怕	三遂平妖伝	否定
19	全然無懼	西遊記	否定	85	全然不動	三遂平妖伝	否定

20	全然压倒	西遊記	肯定	86	全然未保	三遂平妖伝	否定
21	全然不見	西遊記	否定	87	全然不動	三遂平妖伝	否定
22	全然不懼	西遊記	否定	88	全然不覺	三遂平妖伝	否定
23	全然不見	西遊記	否定	89	全然像個人手	三遂平妖伝	肯定
24	全然不懼	西遊記	否定	90	全然不睬	三遂平妖伝	否定
25	全然無損	西遊記	否定	91	全然不曉	三遂平妖伝	否定
26	全然不理	封神演義	否定	92	全然没用	三遂平妖伝	否定
27	全然不知	封神演義	否定	93	全然不覺	三遂平妖伝	否定
28	全然不会壞動一角	封神演義	否定	94	全然失去	三遂平妖伝	否定
29	全然不理	封神演義	否定	95	全然不管	三遂平妖伝	否定
30	全然不理	封神演義	否定	96	全然不解其意	三遂平妖伝	否定
31	全然不理	封神演義	否定	97	全然不覺	三遂平妖伝	否定
32	全然不懼	封神演義	否定	98	全然不知	三遂平妖伝	否定
33	全然不省	喻世明言	否定	99	全然無異	三遂平妖伝	否定
34	全然未保	喻世明言	否定	100	全然不知	紅樓夢	否定
35	全然不解	喻世明言	否定	101	全然無一点兒能為	紅樓夢	否定
36	全然不校	喻世明言	否定	102	全然温習	紅樓夢	肯定
37	全然不懼	喻世明言	否定	103	全然明白	紅樓夢	肯定
38	全然未保	喻世明言	否定	104	全然没有	儒林外史	否定
39	全然不惜体面	喻世明言	否定	105	全然不解	儒林外史	否定
40	全然無懼	喻世明言	否定	106	全然不知	儒林外史	否定
41	全然不識一字	警世通言	否定	107	全然看不得	儒林外史	否定
42	全然不理	警世通言	否定	108	全然不知道	儒林外史	否定
43	全然又無些子消息	警世通言	否定	109	全然不問	儒林外史	否定
44	全然没事	警世通言	否定	110	全然不会制作礼楽	儒林外史	否定
45	全然未保	警世通言	否定	111	全然没有了	儒林外史	否定
46	全然不以為怪	警世通言	否定	112	全然是我來說的	儒林外史	肯定
47	全然未保	警世通言	否定	113	全然不喫	儒林外史	否定
48	全然不知家中之事	警世通言	否定	114	全然不知	儒林外史	否定
49	全然不濟	警世通言	否定	115	全然是火	女仙外史	肯定
50	全然不知	警世通言	否定	116	全然是金	女仙外史	肯定
51	全然不濟	醒世恆言	否定	117	全然不解其意	女仙外史	否定
52	全然不疑	醒世恆言	否定	118	全然不在他心上	女仙外史	否定
53	全然不改	醒世恆言	否定	119	全然布素	女仙外史	肯定
54	全然没了	醒世恆言	否定	120	全然不懼	女仙外史	否定
55	全然不拒	醒世恆言	否定	121	全然無心	女仙外史	否定

56	全然不動	醒世恆言	否定	122	全然不解	女仙外史	否定
57	全然不覺是女	醒世恆言	否定	123	全然不動	女仙外史	否定
58	全然没事了	醒世恆言	否定	124	全然不覺	女仙外史	否定
59	全然不知	醒世恆言	否定	125	全然覆没	女仙外史	肯定
60	全然無恙	醒世恆言	否定	126	全然風雅詩人	女仙外史	肯定
61	全然不理	醒世恆言	否定	127	全然不解	女仙外史	否定
62	全然未保	醒世恆言	否定	128	全然不懼	女仙外史	否定
63	全然未保	醒世恆言	否定	129	全然不知	女仙外史	否定
64	全然不理	醒世恆言	否定	130	全然不動	西湖佳話	否定
65	全然不理	醒世恆言	否定	131	全然不理	西湖佳話	否定
66	全然不睬	醒世恆言	否定	132	全然不疑了	西湖佳話	否定

この表から明らかなように、文献による差異はあるものの、ほとんどの例が「不」「無」「没」「未」という否定語を直後に伴っている（132 例中 120 例：90.9%）。中には「全然不理」「全然未保」のように固定した言い回しと見られるものもあるが、いずれにしても「全然不～」「全然無～」等の否定表現における例がほとんどである。

やや粗い調査ではあるが、これにより「全然」が肯定表現との共起例を残しつつ、否定表現における使用に偏向する状況は認められよう。このような否定表現への極端な偏りのために、実際には否定と共起しない例が存していても、「全然」は必ず否定を伴わなくてはならない」という意識（＝“迷信”）が生じるようになったものと考えられる。

4. 用法の変化と“迷信”の発生

明清白話小説の「全」および「全然」が否定を伴う現象については、次の指摘がある。

○“全”は“全然”を含め、多く否定副詞を後にとる特徴をもっている。…中略…否定はそれだけで完結していて、それを強調する必要はないはずである。「私は中国人ではない」ということは、それだけで十分で、「まったく」とか「けっして」という強調を必要としない。否定はそれだけで全面的であるはずである。しかし、私たちは単に否定しただけでは不安を覚える。この「不安」を解消する一つの方法として、このような“全不…”“全然不…”という否定の強めが生まれる。この傾向は、吉川幸次郎氏⁵⁾によれば、六朝頃から多くなったということである。（香坂順一（1987）pp.239-240）

これは、主に否定表現の面からその強調に際しての「全」「全然」との共起を述べたものであるが、引用の冒頭部分にもあるように「全」「全然」の側から見れば、否定語を多く伴うということになる。なお「全」については、陳宝勤（2011:294-306）による後漢～清代の文献例を調査した報告がある。ここによればもと「完全（な）」という意味の形容詞であった「全」が、後漢の頃⁶⁾から「すべて」「まったく」という副詞として用いられるよ

うになり、近古後期（元～清）の文献において否定語に掛かる例が際だって多くなる⁽⁷⁾ことが観察される。

また副詞としての「決」は、「用在否定詞前面」（『現代漢語詞典』第 6 版）とあるように、現代中国語では専ら否定表現に用いられるが、楊榮祥(2005)は、

○像“決”在現代漢語中用作語氣副詞時，只修飾否定形式，但近代漢語中也可以修飾肯定形式。(p.69)

として、「今日見得義當為、決為之；利不可做、決定是不做」（『朱子語類』卷 15）、「當時若能聽用、決須救得一半」（同、卷 101）、「西門慶吩咐：那个小廝走漏消息。決打二十板」（『金瓶梅詞話』卷 26）の例を掲げている。すなわち「決」は、日本語の「^{けつ}して」が、

○決^{けつ}して弟子の中に此くせものあるには極れり。搦^{からめ}捕^{とつ}て渡せよと押付て申渡せしを。（江島其磧『鬼一法眼虎の巻』卷四・三（1773 年））

のごとく「確かに」の意味で肯定にも用いられたのと同様に、もと肯定否定両用であったものが次第に否定専用となり、現在に至っているのである。したがって、仮に現代語で「決有異言」「^{けつ}して異論がある」等と言うようなことがあれば中日両語ともに誤用ということになる。「全然」が〈否定と呼応しなくてはならない〉という“迷信”も、この延長線上に存する現象と言えるだろう。

5. 通言語的に見た“迷信”

もと肯定にも否定にも用いられた副詞が、否定を伴って否定強調に使われることが次第に多くなると、やがて「否定と呼応が正しい用法である」という意識が生じるようになる。その状況下で、旧用法を踏まえているか否かに関わりなく、特に若い世代などを中心に、否定と呼応しない使い方が目立つようになる⁽⁸⁾と、それを誤用として非難する動きが生じる。極端なものになると、

○しかし漱石も（肯定的な「全然」を^{筆者注}使っているのだから、というのはおかしい。

言葉の使い方をまちがえる作家はたくさんいて、ことに漱石は、おかしい当て字の名人である。（島野功緒(2001)p.211）

のように、旧用法の例まで“誤用”と決めつけてしまうものもある。

こうした、「全然」における用法変化とそこから生じる批判意識の類例は、否定と呼応するとされる副詞だけを取っても「全然」のほか「とても」⁽⁹⁾「断然」⁽¹⁰⁾などに見られる。これらは、部分的には相互に影響し合うこともあるかもしれないが、むしろ普遍的に生じる現象と考えられる。さらに同様の現象が中国語にも見られることを考慮すれば、これを言語類型論の問題として通言語的な視点から捉えることができるものと考えられる。

おわりに

以上、本稿では日本語と中国語における「全然」を中心に考察を行った⁽¹¹⁾が、認知論の立場から日本語の「全然」等と英語の“at all”等とを対比し、そこから非明示的な否定表現における類型論的分析を目指した考察に有光奈美(2002)および(2008)がある。なおその中で述べられる、「ひどく」「すごく」「大変な」等と“awfully”“terribly”“deadly”“bloody”等に共通に見られる「否定的価値から量・程度の甚だしさへ」についての言説(有光奈美(2008)pp.263-265)は、いわゆる「濁音減価意識」⁽¹²⁾に関連して、否定的価値(サマーザマ、ハレルバレル等)と量・程度の甚だしさ(トントンドンドン、トロリードロリ等)が同じ原理で発生する現象に通じるものである。

もとより、すべての言語現象を通言語的に捉えることは控えなくてはならないが、同じ言語現象が、共時的および通時的に異なる言語間で、同じ原理により発生する可能性がある以上、言語類型論による視点は重要性を有するものと考ええる。

【注】

- (1) 新野直哉(2011)等を参照。なお同書にもある通り、“迷信”という表現は小池清治(1994)が用いたものである。
- (2) 「全然」には連体修飾の形容詞用法もあり、『漢語大詞典』には唐代の例が示されるが、本稿では副詞用法の例のみを考察対象とした。
- (3) 『朱子語類』の調査にあたっては、『諸子百家中国哲学書電子化計画』<http://ctext.org/zh> のデータベースを用い、理学叢書版『朱子語類』(中華書局 1994 年)によって確認を行った。
- (4) 《開放文学網》(<http://open-lit.com/>)、《中央研究院漢籍電子文獻》(hanji.sinica.edu.tw/) および《諸子百家中国哲学書電子化計画》(<http://ctext.org/zh>) 所収のデータベースによって検索を行った。
- (5) 次の指摘を指すものと考えられる。

○かく「すべて」という意味の言葉を、「不」「無」の上に添えて、全面的に否定する語法の起源は、非常に古いのでありまして、今日の中国語の「全不」「並不」「並沒有」という言い方は、一見近世に突如出現したもののように見えますが、実は決してそうではない。少くとも魏晉までははっきり遡ることが出来、また稀薄ながら漢以前にも遡り得るのであります。「尅」「威」「都」「全」「並」と、言葉こそ変わっておりますが、其の理は一つであります。(吉川幸次郎(1949)p.53)
- (6) 太田辰夫(1958)は「南北朝の頃から」(p.285)とする。
- (7) 陳宝勤(2011)ではこの点について明言されていないが、示された数値から明らかである。
- (8) これを〈Ⅰ 具体的意味での肯定否定両用→Ⅱ 否定の強調→Ⅲ 肯定の程度強調〉として典型的に捉えた研究に播磨桂子(1993)がある。
- (9) 「とても」については、坪内逍遙「所謂漢字制限の分析的批判」(1923 年)、芥川龍之介「澄江堂雜記」(1924 年)多くの言説のあることが既に知られている。
- (10) 「断然」については播磨桂子(1993)に言及があり、橋本行洋他(2013)においても考察を行った。
- (11) なお、中国語話者の立場から、現代における中日両語の「全然」に関する対照研究を行ったものに、葛金龍(1999)があるが、そこでも、「中国語の“全然”は日本語の“全然”のような肯定文でプラス意味合いの語と共起する用法がな」(p.27)いとされる。

【引用参考文献】

- 有光奈美(2002)「否定的文脈と否定極性項目に関する一考察—"not at all" vs. 「全然」を中心に―」(『言語学論集』8)
- 有光奈美(2008)「日英語の対比表現に見られる非明示的否定性と量・質・態度に関する変化のメカニズム」(児玉一宏・小山哲春編『言語と認知のメカニズム―山梨正明教授還暦記念論文集』ひつじ書房)
- 遠藤邦基(1977)「濁音減価意識―語頭の清濁を異にする二重語を中心に―」(『国語国文』(46)4)
- 太田辰夫(1958)『中国語歴史文法』江南書院＊引用は朋友書店の新装再版(2013年)による)
- 小池清治(1994)『日本語はどのような言語か』筑摩書房
- 香坂順一(1987)『《水滸》語彙の研究』光生館
- 島野功緒(2001)『誰もがうっかり見過ごす 誤用乱用テレビの日本語』講談社
- 新野直哉(2011)『現代日本語における進行中の変化の研究』ひつじ書房
- 橋本行洋・梅林博人・新野直哉・島田泰子・鳴海伸一(2013)「漢語副詞の受容と展開―〈漢語の和化〉と否定との呼応―」(『日本語学会 2013 年度秋季大会予稿集』日本語学会〔ブース発表資料〕)
- 吉川幸次郎(1938)「中国語における否定の強調」(1938年10月16日大阪懷徳堂における大阪漢学大会にての口述および12月典籍之研究社その記録＊引用は『吉川幸次郎全集』第2巻、筑摩書(1968年)による。
- 陳宝勤(2011)『漢語詞彙的生成与变化』商務印書館
- 葛金龍(1999)「日中同形漢語副詞「全然」についての比較研究」(『愛媛国文と教育』(32))
- 楊榮祥(2005)『近代漢語副詞研究』商務印書館

執筆者一覧

国立国語研究所共同研究プロジェクト（萌芽・発掘型）
近現代日本語における新語・新用法の研究

プロジェクトリーダー

新野直哉（国立国語研究所時空間変異研究系）

共同研究者（50 音順）

梅林博人（相模女子大学学芸学部）

島田泰子（二松学舎大学文学部）

鳴海伸一（京都府立大学文学部）

橋本行洋（花園大学文学部）

国立国語研究所共同研究報告 13-03

近現代日本語における新語・新用法の研究

2014 年 3 月 28 日 発行

編者 新野 直哉

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

電話 042-540-4300（代）

<http://www.ninjal.ac.jp/>

印刷 絢文社

©国立国語研究所

ISBN 978-4-906055-33-3

ISSN 2185-0127

ISSN 2185-0127

NINJAL Collaborative Research Project Reports 13-03

A Study of Ongoing Changes in Modern Japanese

Department of Language Change and Variation, NINJAL

NIINO Naoya (ed.)

March 2014

NATIONAL INSTITUTE FOR JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS